
それが全能結晶の無能力者

詠見嫌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それが全能結晶の無能力者

【Zコード】

Z2140W

【作者名】

詠見嫌

【あらすじ】

世界に「結晶」が降り注ぎ、人々は「能力」を手にした。いつか異常は正常に組み込まれ、選ばれた者は常識を超えた異能を手にする世界となっていた。それを才能の一部とし、生きる人々。けれど、少年はその「能力」を手にすることはなかつた。それでも「妹」さえいればそれだけでよかつた。そんな妹が同じ高校に入学した時、変化と呼ぶ物語は幕を開ける。

1 1 始まりの夜

1 1 始まりの夜

砕け散り四散した結晶を、人は雪と呼んだ。

真夏の夜に白い雪が降った。世界を覆い尽くす程の雪が。だがその雪は溶けることなく、ただ地上を白く染め上げた。そんな白く光る夜がこの世界の歴史を大きく変えた。世界一変の日。

そんな世界を書き換えるそれは雪ではなかつた。これは結晶。砕かれた結晶が空を舞い、ただ落ちてきた。その結晶が落ちて来た日。神秘の光が墜落を繰り返した日。

だが落ちてきたのは結晶だけでは、なかつた。

そんな奇跡のような真下で、地獄の業火が柱となつて形を成した。深淵のような闇夜の下、巨大な火柱がそんな降り注ぐ結晶さえも焼き払つていた。赤気が立ち上り、木々も鋼鉄も人間までも全てを平等に焼き尽くしている。

つい先程まで空中を飛行していた鋼鉄の塊は真つ一つに折れ、そこから轟々と炎と煙を巻き上げている。そんな炎の下に少年は額から血を流し倒れていた。

「な、……なにが

じきとうひゅきや

わからない。何もわからない。時任雪哉には何もかもがわからなかつた。

気がつけば倒れていた。さつきまで飛行機の中にいた。目覚めれば地上だつた。何一つわからないまま血を流していても、生きていることだけはわかつた。しかし家族の姿は、なかつた。

目の前の光景に絶句し、そして絶望した。

炎は全てを呑み込み、それはまるでこの世の終焉かと錯覚させる

ほどだつた。声を上げた。慟哭を繰り返しながらも、雪哉は真つ先に家族の名を絶叫した。けれど返事が返ってくることはなかつた。ただ炎が雄叫びを上げるように激しさを増し、そして白い結晶が雪哉の身体に積もるだけだつた。地に膝をつき、ただ崩れるように倒れた。仰向けのまま空を見つめた。結晶の雪がひたすらに降り、雪哉は涙を流した。

そんな夏に降る不可解な結晶は人々に奇跡を与えることになる。だがそんな奇跡よりも、全てを失つてしまつたと思い知らされた雪哉にとつてはどうでもいいことだつた。そんな一人の少年の絶望など他所に世界は一人歩きを始める。たつた一人の慟哭で、この世界を停止させることなんてできやしない。それでも雪哉は咆哮することを止めることができなかつた。

1 2 始まりの兄妹

1 2 始まりの兄妹

あの絶望から六年。

季節は春。桜咲く並木道を背に一人の男女が歩いていた。

男の名は時任雪哉。今日から新しい学年に上がる。しかし雪哉の容姿はどこか不自然だった。背丈はやや高く、伸ばした背筋は何に対しての自信なのか。そしてやけに伸ばした前髪は片目を覆い隠すほどだった。しかしその奥には鋭い眼光を見せ、闇雲に敵意を向けていた。そんな雪哉の歪さとは真逆の存在がすぐ横にいた。雪哉と肩を並べて歩く少女は雪哉よりもずっと背丈は低く、身長は雪哉の腰元までしかない。そんな少女の身体は小さく細くそれは華奢と言うのだろう。白雪の肌に、そんな肌に負けぬ程の白銀の長髪。穢れなどない白の少女。無垢なる子。そんな清楚な雰囲気だけを形にしたような少女。

少女の名は時任理愛。^{ときといりあい} そう二人は兄妹である。

あの六年前の惨劇、航空機墜落事故。乗員乗客は五百名を遥かに超えていた。しかし生き残ったのは十本の指で数えられる程度だった。日本国内で起きた航空機事故の中でも最多となる驚愕と悔恨の事故となつた。その数少ない生き残りが雪哉と理愛である。不幸中の幸いとまるで言葉通りのように一人は無傷で生還した。しかし同乗していた両親は亡くなり、時任家は一人だけになつてしまつた。色々人の援助があつたおかげで生活もでき、こうして学校にも通えている。心に深い傷を負つたものの、なんとかこうして今を生きている。たつた六年、たつたの六年で傷が癒えるのかはわからない。しかし、

「世界が犯した過ちを教えてやる!……それは、俺を生かしたこと

だ

「兄さんが生きてること自体過ちです」

「こんな会話を平気にこなす兄妹に本当に心の傷などあるのだろうかと疑問さえ抱いてしまつ。

雪哉は前髪に覆い尽くされた瞳を底づ様に手を翳し、小さく呻き声を上げる。

「共鳴？なるほどな……魔的であるからこそ、異なつた存在との邂逅する確立を増長させるわけか……さしつづめ『マージナル・シンダー転回式境界線』と呼ぶべきか？」

「マジ……？きよーかい？……兄さん、お願ひですから横文字と変な言葉を一緒に言うのはやめてください。日本語をお使いになつてください、理愛はとっても心配です。兄さんがこのまま妄想しかしなくなるんじやないかって時たま思つのです」

「案ずるな、理愛よ……俺は死なん」

「いや、そうじゃなくてですね……はあ……もう死ね」

道路の真ん中に蛆の湧いた死体でも見るような飛び切りの不快感を露わにしたような目で理愛は雪哉を睨み、そして思いつきり死刑宣告した。だがそんな氷のような視線もおぞましい言葉も雪哉は何の反応も示さず、ただ顔に置いた手をすらし、そのまま歩く。二人の身長差は第三者から見ても歴然ではあるが、明らかに雪哉の歩幅は理愛に合わせて踏まれている。理愛はそれを知らないわけがなかつた。だが何も言わない。だけど、二人は仲が悪いというわけではない。たつた一人の家族。良いも悪いも一人にはない。だから一人はいつものように同じ道を歩く。

「それにその左腕の包帯なんなんですか……ちつともそんなの流行つてる気配なんてないです。外してくださいよ。ちらちら視界に入つてきて鬱陶しいことこの上ないです」

何もかもが不可解すぎる雪哉を象徴づけているのはきっと左腕の肘まで巻かれた包帯にあるのだろう。指先まで巻かれていってまるで大怪我でもしたのかと思わせるほど大袈裟に巻きついている。だが

その左腕は思うがままに、指先の一本一本が雪哉の意思でしっかりと動いている。そんな腕を見せ付けられては怪我をしているとは思えない。なら人に見せられない傷跡を隠しているのか？

「これは朽ちて尚、放出し続ける神の力を抑える為の聖骸布と何ら変わらないんだ。そう易々と触れていいものではないぞ。これを外す時はその者の終わりだけを見せつけるだけだ、わかつたのならその手を止ける」

「……兄さん、本当にこんなことしていらっしゃるのも今の内ですよ。さつさとの包帯も解いて、そのボサボサの長い前髪も切って、ちやんとした日本語を喋れるようになつてください。社会に出た時、どうするんですか？」

「いやつていつも雪哉は妹に諭されるのである。

だが肝心の雪哉は「いつと聞く耳も持たず、自分自身の描いた設定を夢想し続け、創造された人格。そんな周知に理解されることのない人間性のまま今もこうして雪哉はここにいる。

「はあ……兄さんの頭の中を覗くためだけにしてスキヤンの購入を考えちゃいますよ」

「それでこの俺の深層心理を覗くことができるのか？ できないだろ？」

「できるわけないですよ。それ以前にそんなもの買つお金もないでしょ。もし買つたとしてもどこに置くんですか。まったくもう……冗談なんですから、もうちょっと気を利かせてくださいよ」

「そうか、そうだったな、すまない」

「謝り方もなんか気持ち悪いし、兄さんは学校で友達とかいるんですか？」

そんな質問にただ黙殺し、黙秘を決め込んだ雪哉にただ呆れて小さな嘆息をもらす理愛。こんな態度しか取れない人間と価値観を共有しようなどと思う物好きはいないだろう。

「なら、理愛はどうなんだ？ 友達、いるのか？」

黙つていただけの雪哉が理愛に声をかける。質問を質問で返して

いるようなものだ。理愛は不満そうに頬を膨らませる。しかし、ゆつくりと選定するように言葉を紡ぐ。

「わたしは……わたしはいいんです、わたしは上手に過ごしますから」

拒絶。必要がないとそう言つた。口上こそ緩やかだが、峻拒の意思がはつきりとわかつた。雪哉はこれまで理愛と暮らしてきて、友達らしい友達を見たことはなかつた。理愛自体、愛想も良く、柔軟な関係を築くように、自ら進んで行動している。人間嫌いというわけでもない。けれど最後に必ず距離を置くその様は上辺だけ取り繕つてゐるようにならぬ。周囲の視線を気にするように、これまでもこれからも理愛は他人に気を遣つて生きていきそうだ。

それは人とは違う髪の色と瞳の色だけで十分な理由になる。日本人らしい黒の色からは遠ざかつた結晶のような色。人と違うというのは、それだけで異質なのだ。純粋の中に一つ異物を混入するだけで、焦点は定まるものだ。こうして学校への通学路を歩くだけで、実際何度も通りすがりの歩行者が理愛を見てすることは鈍感な雪哉でも確実にわかつていた。そしてそれを気にしていることも雪哉はしつている。しかし雪哉の心の中ではいつも舌を打ちながらこう囁いてゐるので。「くだらない」と。

「人とは違う……それは古なる戒めの力を封じた白き竜の生まれ変わり……さすが我が妹だな」

「わたし、昨日まで普通の中学生だつたんですけど

「そのように振舞つて周囲の人間を巻き込まぬようにか……殊勝だな」

「兄さん、わたしまで巻き込まないで。他人に迷惑をかけたらそれこそ兄さんの病気はただの害悪ですよ」

「そんな言葉で俺を罵つても無駄だ。そして俺とお前は他人ではない……兄妹だ」

「もう他人でいいですよ、こんな兄の妹だなんてただの恥ですよ」

「お前の恥も何もかも背負つて俺は生きよう

「勝手に生きててください、わたしは兄さんの顔を見なくていいように遠くへ行きます」

途端に理愛の歩幅は広がり、速度が上がる。もはや競歩にレベルアップしていた。段々と理愛の小さな背中が更に小さくなつていいく。それでも雪哉は鼻で笑い、歩き始めた。

「制服姿、似合っているぞ」

「話しかけないでください、あと追いつけてこないでください」

どれだけ歩く速度を上げたとしても、明らかな身長差の前では雪哉が理愛に追いつくのは至極当然だらう。それどころか雪哉は半分の力も出してはいない。肩を揺らす程に力いっぱいに歩く理愛には目もくれず、ただ雪哉は理愛と肩を並べて歩いていた。歩く理愛を横目で見れば、そこには新調された制服を着込んだ姿が見える。理愛の着る制服は雪哉が通う学校と同じモノで別に一年早くその学校に通っていたのだから、女子の制服だって見慣れているわけなのだ。がそれでも妹の制服姿となると見る目も価値観さえも変わるものだ。似合っているのは本心であり、ただ可憐さを際立たせている。確かに理愛の見た目は常人とは少し違ひが生じているかもしれない。銀の髪に銀の瞳。だが理愛の感じている奇異な視線はただ珍しいからだけではないはずだ。異性なら振り返ってでも見つめてしまう美しさを理愛は持つているはずなのだから。雪哉はいつもこうして理愛を過大に評価する。しかしそれはただの過言ではない。誰が見たつてきっと理愛に惹かれる。それほどの魅力を理愛は持つているはずなのに、それなのに本人はというと距離を置くことだけを第一に考える自信の無さを見せ付ける。そんなものを見せ付ける必要は無い。魅せることができるのだから、それを前に押し出せばそれだけできつと理愛は変われるはずだ。けれど雪哉はそんな本心をずっと内に隠し続けている。言葉だけで変化をつけることができるのなら、とつこの昔に言つている。理愛自身が気づけなければ意味がない。だから雪哉は信じているのだ。信頼しているのだ。兄妹だから。たつた二人だけの、家族のだから

「見えてきましたね」

「そうだな」

緩やかな傾斜であつても上り坂。理愛にとつては十分過酷であつたろう。そもそも運動は得意ではないし、体力もそんなに無いのに無理をするから。小さく、息を殺すほどに小さく荒い息を零していくのも雪哉は知っていた。けれど、絶対にそのことを指摘しない。ただ無言で手を差し出す。

「転ばれては困るからな、往くぞ」

「兄さんの手を握つてなんて……本当はイヤですけど、仕方ないですか、ね」

頬が紅潮していたのは体温が上昇しただけのものなのか、それとも……しかし雪哉は気付かない。あれだけ理愛を見ていても、どんな細かな変化さえも見極めることができるのはずなのに、肝心な部分だけ気付かないまま。

そして二人は手を繋ぐ、新たな高校生活が始まろうとしていた。けれどそれが一人の世界を一変させる」となど知らぬままに、全てが動き出そうとしていた。

1 3 「種』と呼称された

1 3 「種』と呼称された

それが人の能力の一部として組み込まれたのもつい最近。もはや普通とは何だったのかとさえ思われるほどに、過去の人々が築いた社会というものは崩壊していた。今はもう個人の『才能』によつて未来を切り開いていく世界が完成していた。

それが『異能』　人より優れ、常識を超えた能力。

超能力とも呼べるのかもしれない。別に魔法と呼んでもでもいいのかもしれない。もうなんだつていいのかもしれない。ただそれはまさに奇跡を具現させた力と呼ぶものだろう。

そんな異常な能力は小説やお伽噺の中だけのただの絵空事だと思われていた。もしそんな力を持つていたとしても、呆れて笑われるのが普通だったのかもしれない。しかし今やそんな幻想は人々の才能の一つとして評価され、より優秀な能力を持つ者は富や名声を得ることが約束された。そしてそんな異能と呼ばれる超能力は偶然的、突発的に発現するわけもなく……今や誰もが望めばきっとその力は手にすることができるようにならなつていた。

そんな奇跡が今や当たり前となつたこの世界。奇跡を当然とさせたのは今から六年前、雪のような結晶が降り注いだあの日からである。

六年前、突然降り注いだ結晶は雪のような白ではなかつた。まさに光り輝く金剛石のようだつた。だがそれはただの炭素の同素体の一つが落下してきたわけではない。その結晶こそがまさに入瞿智をもたらした原因なのである。それを人は『種晶』（シード）と呼んだ。ピアスのように耳に穴を開け装着する者もいれば、耳以外の

皮膚に埋め込んだりと、装身具として身につけることでそれを装備すれば力を手に入れることができる。しかし持つているだけで誰もが能力を解放できるのかと聞かれればそういうわけでもない。所持しているだけでは何も起こらない。まさに種の名を冠するように持つているだけではただの種と変わりない。その種を開花させるには人間が持つ技巧が必要となる。それは才能となり、異能を引き出せることができれば、どれだけ微力であろうとも、『有能力者』（ローダー）として分類されることとなる。どんな能力であっても、世界に貢献できればそれだけで価値を見出せる。可能性を広げることができる。力とは道を作り出すことを指す。大きな力があればそれだけでその道は多数に分岐させることもできる。それを増やせるかどうかはその人間次第となる。問題はそんな大いなる力を平然と手にしてしまった世界になつてまだ六年しか経過していないということにある。未だに能力が発現するのは突發的で、気がつけばなどと曖昧なことが多い。勿論、この能力を研究する組織なども存在する。それでもあまりにも時間が足りなさ過ぎる今の人類にできることは、そんなとてつもない力を悪用することを防ぐ為にも能力を持つ者を管理、管轄する組織を作ることで精一杯だった。今やどんな殺傷兵器よりも危険な『異能』は今以上に軍事力を高めることだけで容易に行える。能力を持つた人間の軍隊を一つ作るだけで、どんな強力な兵器を保有した国すらも壊滅させることができるとされている。そんな危険分子がどの国にも存在してしまった世界になつたのだ。そんな不安定極まりない力を安定させる為にもこの世界全てがそういつた幼い頃からそういつた能力を持つ子供たちを学校という機関の中で一つにまとめ、能力をより良い方向へと使用させる為に教育するカリキュラムも立てられている。

そうやって世界の均衡を保とうとしていた。それでも、それは能力を持つた人間に置かれた境遇でしかない。世界の人口の数割にも満たない者だけが持たされた能力。殆どの人間はあの結晶の雪が降り注いだのを見ただけでしかない。それは雪哉も一緒だった。いや、

違う。雪哉はそんな雪の結晶など目もくれていなかつた。一夜で自分の世界を半壊させられただけのそんな夜だ。能力などに微塵の興味もなかつた。

だから、雪哉は異能を持たない。

身体に種晶を埋め込んでいるわけでもなく、一切の能力を身につけることなく雪哉はこれまで過ごしてきた。世界はこんなにも変革を起こしたはずなのに、雪哉の世界はあの六年前から壊れたままなのだ。だからこそ理愛がいなければ、雪哉がどうなつっていたかなんて言つまでもない。彼を塞き止めている存在だからこそ、雪哉にとつては理愛が大切だつた。きっと壊れてしまつた雪哉にとつてはどうしても他人との感覚にズレが生じている。

それなのに、

「おはよう、雪哉。今日も朝から眠そつだね」
机の上に肘を突き、傾いた首をその手で支え、何故に不機嫌なのが仏頂面をしたまま窓の外を見つめる雪哉に屈託のない笑顔を見せ付けて近づく男が一人。手を振りながら前の席に座る。しかし椅子の向きは雪哉の方向を向いていた。雪哉と同じく高い背丈、しかしやけに線は細く、男性の体格とは思えないほどだ。そんな男はニヤニヤと不敵に微笑んでいる。そんな表情が気に入らなかつたのか雪哉は窓の外を見つめるのは止めて、その男に視線を移した。

「朝からその顔はやめる、不愉快だ」

「つれないなあ、雪哉は。友達がこうして会いに来ているんだから挨拶ぐらい返してよ」

狐目をした男はそう言つて、大袈裟に肩を落とす。しかし雪哉は何も言わない。これがいつもの日常なのだ。こうやっていつも夜那城切刃は雪哉に近づいてくる。入学してからずつと何の因果か悪戯が、雪哉は切刃に付き纏われている。雪哉は頑なに切刃の接近を拒んでいるのだが、どうしてか切刃は諦めずに雪哉への接触を繰り返

していく。だからとつぐに心が折れた雪哉は言葉こそ辛辣だが、拒絶することは止めたのだった。朝、通学中に理愛に友達はないのかと聞かれた時に答えられなかつたのは雪哉にとつて切刃が友達なのかどうかは自分自身でもよくわかつていなかつたからである。

「俺と、友達？」

だから切刃の言葉に訝しげに顔を顰め、目つきがより一層悪いものに変わつてしまつ。

「そうさ、僕たちは友達だろ？？」

「そうだつたか？」

「そうだつたよ」

悪びれもなく切刃は言つと、口元に手を当てて雪哉の耳元で話し出す。

「組織が動いているんだろ？ 協力者は多い方がいいんじゃないのかい？」

これだ。これなのだ。これが切刃を絶対的に拒めぬ理由。ただ単に興味本位だけで切刃が近づいてくるのならただのいけ好かない優男として雪哉も適当にあしらつていた。しかしちゃんは何枚も上手だつたのだ。切刃は雪哉がどういう人間なのかをよく知つてゐる。知つてゐる上で、馬鹿にすることもせず、こうして雪哉の『設定』に乗つかつてゐるのだ。

「邪氣眼つて言うんだつけ？ 雪哉の持つてゐる眼のことは？」

「あんな劣化魔眼と一緒にするな……あれは第四世代が気紛れで与えた脆弱な力だ。石に変えることもできなければ、万物の生き死にさえも見れないだなんて、どうかしている。俺の眼は違う……だが、それが何かは言えない。言えばお前もきっと狙われるだろ？ からな」

「組織にかい？」

「あまり大きな声で言うな……敵はどこにでも存在する。教育機関なんてもつての他だ。とくにこういった一階はなともかくここは苦手だ。お前も俺に興味本位で近づくだけなら止めておけ。死にたくはないだろ？」

「わかつてはいるんだけれどね、どうしても雪哉のことが気になつてね」

「そりか、なら勝手にしろ。勝手に死ね。あと訂正しろ、組織ではない……『図書館』だ。気をつける、ヤツらは俺の持つていてる『眼』と『腕』もだが、本命はこの『禁忌』^{ブヨウイニック}の断片なはずだ。これ一枚で十分因果律の変動が可能だからな。奴らが血眼になつて探しているのもわかる。だが、これを上手く使えば連中を誘き出すこともできる。失敗は許されない、俺に近づくのはいいが足手まといにはなるなよ」

なんて他人が聞けば全くもつて不可解な会話が展開されている。それでも切刃は雪哉の言葉を一言一句漏らさずに清聴していた。本来なら鼻で笑つてもいいところだ。それなのに切刃は馬鹿にすることなく首を縦に振つている。だから雪哉は切刃を否定できない。ただ話をし、聞くだけの関係。入学して一年以上、これといったことはなかつた。互いのメールアドレスも電話番号も交換していない。休日どこかへ行つたわけでもない。計画を立てたこともない。夏休みとなればその間は顔を見ることすらなかつた。だから雪哉は切刃のことは何も知らない。ただ自分の話に付き合つてくれるだけしかない。

「君は本当に命がけなんだね」

「そうでもないさ、もう慣れた」

「ところで雪哉、君はもう『種晶保有検査』はしたのかい？」

そんな切刃の言葉に一気に現実に戻された。そして雪哉は片目で切刃を見ると切刃自身は作つたような笑みを浮かべてやれやれと両肩を上げていた。

入学式も無事に理愛の姿を見つけることができた。それだけでいい。校長の長い言葉も甘んじて受け止めるし、これから始まる学業にまた身を粉にする所存である。だから雪哉の高校生活はそれだけいいはずなのに、どうしても余計なものがついて回る。

『種晶保有検査』とは国が義務付けた、謂わば調査だ。種晶とい

うものはいつどこでどうやって身に付くかわからないモノであり、自分の意思で装備するものもいれば、突然身体に入り込む可能性だつてある。種晶は身体に埋め込むようにしなければ効果を発揮しないのは大前提なのだが、ごく稀に身体の中に、臓器や骨といった箇所に埋没しているなどといった場合もある。だからこそ病院の検査のように大掛かりな機械の中に身体を入れなければならないのである。ここ最近、種晶の常識を逸脱し、常人を超えた能力を使っての犯罪も多少なりとも発生している。本来ならば小さな罰であつても、能力使用による犯罪行為はとても重い罪が科せられる。しかしそういう者は大抵種晶を装備していることを隠している場合が多く、また唐突に犯行に及ぶ為、捕まえることは難しい。だからこそ事前に国で種晶を保有している者を調べ、データ化することで、未然に犯罪を防ごうという仕当たりからこの『種晶保有検査』は始まつた。国の安全を守るために、義務であるのなら仕方がないのだ。雪哉はその種晶というものには触れたことすらない。ましてや欲しいとも思わない。だから何度やろうが結果は同じ。そんなものする意味はないのだ。だから雪哉にとってその制度は面倒なだけでしかない。十数分程度ではあるが、機械の中に缶詰にされるのは気分のいいものではない。ましてや知らない人間に身体の中身を覗かれるなんて吐き気がする。それでも雪哉は顔にこそ不機嫌さを見せても、口には出さなかつた。理愛もまたその検査を受けているのだから。理愛も雪哉と同様に種晶は持たず、幾度となく検査を繰り返しても種晶は検出されなかつた。当然である。二人はそんなものは興味がないのだ。その力を手に入れることが出来る世界が作られたあの日、二人は大事なものを、大切な家族を失つてしまつたのだから。最も必要なものが手元にないのだから。だから力などを求めることは永劫無いだろう。

「したさ。何もなかつた」

「そう、僕もだ」

結果はいつもと変わらない。雪哉も切れも能力を持つてはいない。

そう、二人は一切の異常を持たぬ者。六年前ならそれが普通だったのかもしない。しかし今では能力を持つ者こそが絶対という程の社会観が確立されてしまつていて。能力を持つ者こそ絶対であり、能力を持たないただの人間は『無能力者』（ヌーブ）であるという言葉も生まれたのも事実だ。有能と無能、明らかな隔たりを生んだ世界。いつしか平等などという概念すらも崩れ去り、こうしてどのような場所であろうとも差を別つ空間が出来上がってしまう。この小さな教室の中にも一人、異能の才能に恵まれた者がいただけで上下関係が生まれるのである。それでも一人はそんな世界観に微塵も触れることなく、会話を愉しんでいた。種晶が無い、能力が無いという話題は一瞬で終了したのである。

「切れ、もし能力が手に入るとしたら何がいい？」

「雪哉から話を持ち出すなんて珍しいね、そうだな……発火も透ク
視も念力もあまり魅力的ではないよね」

「確かに、そんなもの程度が知れる。『図書館』の連中ならばそんな能力所持者『まん』といふ。俺もそのレヴェルの能力者なら容易に立ち回れる」

「ははっ、雪哉ならそうなんだろうね。そうだなあ、能力ねえ……あまり深く考えたことないけど、憧れある能力なら、この俗世を切り離すことができる、とかだったら欲しいかな。僕の人生以前にこの世界があまり好きじゃないからね、僧にでもなつて念佛唱えてようかなつて思うよ」

「ほう……切れの望む力は幻想剣か、欲を出したな。確か『勇者の剣』の一人にそれに近い能力を持つ者を見たことがある」

「そうなのかい？ とんでもないね。でも得られる力なら強大がいいなあ僕は。やっぱり絶対的な力で相手を屈服させるのが普通だろう？」

「その考えは否定しない、惰弱な力で満足しているのならそいつの限界はそこまでだろう。欲するのならば限界を超えるに越したことはない」

「だったら、雪哉は何を望むの？」「俺か……？」

そんな切刃の質問に、腕を組み頬に手を置き、西田を閉じ、ゆつくつとその言葉を咀嚼し、考察し、希望を搾り出す。

「俺は、理愛を守る力だけでいい」

「ああ、妹さんいたんだっけ雪哉。なるほど、魅力的じゃないか。素晴らしいと思つよそれ。きっと雪哉なら見つけられるんじやないかな」

なんてやっぱり第三者に聞かれているのなら完全に冷淡に見られてしまうのかもしない会話だった。それでも一人は至つて真面目だった。それがいつもの雪哉と切刃なのだから。どんな世界に改变されたとしても、この世界とてつもない改悪を施されていたとしても問題はなかつた。一人にとつてはただの瑣末。世界の顛末には興味があるが、そこに一人はいないうだろう。能力を持たない者には関係の無い物語なのだから。

そんな机上でただ空論を続いていると、携帯電話が鳴つた。画面を開くとそこには一通のメールが届いたと知らせるメッセージと理愛の名前が記されている。

そこには一緒に帰つて欲しいだけしか書かれていなかつた。しかし珍しい。理愛が雪哉にメールを送ること自体そうないので、雪哉はとこゝと心底気になつた。入学初日、緊張もしただろう。髪色と田色のせいか注目されていたのは雪哉も承知している。

放課後、とはいつても今日は入学式だけで授業があるわけでもなく午前中に終了した。切刃に帰り遊びにでも行かないかと誘つたが、そこは丁重に断つた。理愛と帰るという最優先事項を果たす必要があつたからだ。ただ何もなかつたとしても切刃の誘いは断つていたかもしれない。

そんなことはどうでもよく、雪哉は普段より少し早く歩いていた。校門前には沢山の生徒らが下校している中で校門に背もたれて眉一

つ動かさぬ神妙な面持ちでそこに立っていた。通り過ぎる少年少女らはそんな理愛を見て怪訝そうな目で見過ごしていく。声をかけるのすら躊躇するその緊張感にただただ圧倒されているのだろう。それもそうだ、遠くを見つめるように、まるで魂でも抜かれた人形みたいに、頃垂れる様は不自然そのものだつた。だから雪哉はすぐに声をかけた。まるでいきなり消失してしまった。その程に、理愛の存在そのものが薄れていいくように思えたから。

「どうした、理愛。まるで死人のようだぞ？」

「あっ、兄さん……すみません、その、帰りましょつか

「ああ」

厭な予感しかしない、不快だった。理愛の目はどこか虚ろで、ついさっきにでも人間の死体でも見たんじゃないかってぐらいに怯えていたから。それでも雪哉は極力いつも通りに振る舞い、理愛の言動に期待するしかなかつた。

街路樹を抜け、住宅街が見える参道。生徒の姿は見えず、今は雪哉と理愛の二人しかいない。散りばめた桜の道を歩いていると、ふと理愛が歩くのを止めた。数歩だけ進み、立ち止まる雪哉は振り向き理愛を見つめる形になる。首だけ動かして、理愛を見れば……どことなく震えているようにすら見えた。

「兄さん」

「どうした」

「今日、検査しましたよね？」

「ああ、そうだな」

「兄さんはどうでした？」

「何も、何も　なかつた」

「そうですか」

沈黙。吹き抜ける風の音だけが耳を劈いた。雪哉はゆっくりと正面を向き理愛と視線を合わせた。小さな銀の少女、その震えを止めてやりたかった。抱く不安を取り除いてやりたかった。

「兄さん……わたしの身体の中に、種晶が、見つかったんだって

」

それなのに、それができなかつた。その言葉は確かに雪哉の耳に届いたはずなのに、雪哉は言葉の意味を理解できなかつた。ただ雪哉が築き上げてきたモノが音を立てて崩れしていくのだけはわかつた。

「ごめんなさい……」

ただ今だけはそんな理愛の謝罪さえも、雪哉の耳には聞こえなかつた。心に届くことはなかつた。それでも、はつきりと理愛の双眸には大粒の涙が溜まつたのだけはわかつた。

1 4 虹色との邂逅

1 4 虹色との邂逅

时任理愛は人間が苦手だ。

そしてこれは时任兄妹が運命に呑まれる直前の話である。

時間軸は入学式が終わり、同学年の生徒らが一つの教室に詰め寄る辺りになる。苗字の順番で左上から座つていくのだが、理愛の席は一番後ろ、左端、窓から外の景色がよく見える場所だった。日の光がよく当たり、陽気に誘われてそのまま眠つてしまいそう。

この間、兄の雪哉と通学し校門を越えて、この教室に戻つて来るまで延々と小さな声で理愛の容姿を口にする生徒らの言葉を頻繁に聞いた。しかし理愛は慣れている。右から聞こえた言葉は左に抜け消えていく。髪も目も日本人とは思えない銀の色。ただ髪を染めているわけでもない。どうしてこんな色彩を帯びたのかも理愛は知らない。生まれた頃からこの色のままだ。一度だけ黒に染めたことはあつたが、黒は銀に馴染むことなく、理愛の髪色を変えることはできなかつた。だからとつぐに諦めた理愛は、自分の容姿に対するこう言わることは最早、雑音と同義だつた。そんな雑音がする方に視線を移せば、音は消え、顔を逸らされる。これが続いたせいか理愛は人間が少しづつ嫌悪を抱くようになつてしまつた。

元々、苦手だつたわけではなかつた。けれど、幼い頃から髪と目の色を冷やかされ続けければ人付き合いを嫌がり、人見知りになつてしまつのも無理はないだろう。

ここでもまた三年間、自分から味方を作れず仕舞いなのだろうと入学初日から希望は捨てていた。何もかも独りでやるしかない。そう、思つていた。

「へえ、すごいね、これ」

「そうやって心の壁を形成し、一つの結界を作り上げていたはずの理愛の目の前に突如として侵入する者が現れた。

「綺麗だね、銀色の髪なんて初めて見るよ。当たり前か」

一つ前の席に椅子は黒板の方を向かず、理愛の方を向いていた。そこに座る少女もまた理愛を見ていた。気がつかなかつた。声を掛けられて初めて自分の髪がその少女に触れられていることに気づいた。だが理愛がその手を解くより早く、少女は理愛の髪から手を離していた。

「もうちょっと触つたら叩かれそうな勢いだったからね、『ごめんね』」
そう言つて片目を閉じて、片手を垂直にし、小さな舌をチロリと出し、謝罪された。毒氣を抜かれ、理愛の怒気はすでに薄れてしまつていた。小さく会釈だけして、少女から窓へと視点を移した。

「私、月下虹子。よろしくね」

それなのに、こんなにもはつきり拒絶しているのに、少女は自分の名前を言い、理愛の机に肘を置いていた。だがそんな虹子の行動に理愛は動搖していた。何のつもり？ 何を狙つている？ 何を考え、思つているのか？ 考えれば考えるほど虹子の行動が理解できなかつた。

理愛と同じぐらいの小さな背丈。栗色の髪は肩まで伸び、微笑むその姿は小動物さながらだ。しかしどうだろつ、一つだけ虹子を見ていて他の人と違う点が見つかった。

「目の、色……」

そこで初めて理愛は声を出してしまつた。しまつたと言わんばかりに顔を歪め、そのまま机を見つめ、黙り込んだ。だがそんな理愛を見て、虹子ははしゃぐように向く理愛を潜り込むようにして見つめてくる。

「そうだよ、私の目はね色が口口口口変わるんだよ」
角度によつて赤から青へ、黄にも緑にも、多彩に変色させる瞳を前に理愛は開いた口が塞がらなかつた。

「銀色にもなるんだけどね、でもこればつかはキミのが綺麗だよ」

「綺麗なんかじゃ……」

そんな言葉を使って欲しくはなかった。この色は嫌いな色だから。好きになんてなれない。この髪と目の色のせいでずっと周りからは奇妙に、気味悪く思われてきたのだから。

「色はね、意味なんだよ。同じ色なんて、つまらないじゃない。人と違う、いいじゃない。キミはキミなんだし、私だって私だからこの目は気に入ってる」

「アナタ、なに?」

不意に理愛の空間に入り込んで、言いたいことだけを呟く虹子に理愛は憤りを感じていた。ただ価値観を押し付けてくるその様に、これ以上ない悪感情を持った。

「と、き、と、う、り、あ。ふ～ん、时任理愛って言つんだ、いい名前」

「勝手にわたしの名前を呼ばないでください」

「まあ、まあ、そう怒らないでよ、わかってる、わかってるよ。キミが距離感を大事にしていることもさ」

「そうです、私は他人と馴れ合つ気は毛頭無いんです。だからこれ以上話しかけないでください」

「気に入つたよ、なんというか他人は信じない。常に警戒し、接近すれば迎撃する。その姿勢、その態度、いいね。理愛、いいよ」

全くの他人、今日まで顔すら見たこともない少女がどうしてこれまでに理愛を執拗に煽るのか、そんなこと理愛にわかるはずもなかつた。それでも理愛がわかることがある。この女、敵だ。

「しかしリア、ね。いかにもキミにピッタリの名前だね。そうかあ、びっくりだあ」

何度も何度も理愛の名前を反芻し、一人で何かに納得している。

そして理愛の名を反芻することを止めた虹子は教室の扉を指差した。教師の一人が理愛の名前を呼んでいる。種晶保有検査の順番が回つて来たのだ。だが、虹子を飛ばして理愛の名前が呼ばれた。

理愛は虹子を見る。虹子は小さく手を振り、余裕綽々に机に突つ伏している。虹子の順番を飛ばすということは、虹子は種晶を保有しているということだ。この検査は種晶を持たぬ者だけに行われる検査だ。目の色が複数に変化するなんて時点で気がつくはずだった。目の色が好きに変化させるだなんておかしいじゃないか。それが能力でなくとも、十分異質だ。そんなことに気がつけないなんて怒りで思考が鈍っていたのだろうか、すっかり理愛は失念していた。

「理愛は種晶がないの？」

「ありません、なくていいですそんなもの」

そのまま虹子には目もくれず理愛は立ち上がり、颯爽と教室を出た。長い銀の髪が理愛の歩いた道の上に軌道を描くように揺らめいている。そんな理愛の後ろ姿を見て、虹子は笑った。あまりにもそんな強がりが滑稽に思えて。

「理愛、キミがどれだけ『普通』に固執してもね、理愛がいるだけで、この世界は十分異常なんだよ」

机の上に手を置き、顔を押し付ける虹子は誰にも聞こえない声でそう言った。ましてや賑やかな教室の中ではこの言葉が聞こえる人間などいやしないだろう。

だがそんな虹子の言葉はこの先の運命が動き出すことを知っているような口ぶりだった。

こうして理愛は教師に連れられ検査を受けることになる。そして結果として種晶が見つかることとなる。それは種晶を持たない兄との絶対的な決別となる。だけどやうして、やつと物語は始まりを遂げたということになるのだ。

1・5 銀の少女を救うのは

「理愛が、声を、掛けてくれない」

顔面を蒼白させて、額に両手を押し当てるまま雪哉は白目を剥いて、死人のように変わり果てていた。そんなやけに厭世的に落ちぶれる雪哉を見て切刃はクスリと笑っていた。

「笑い事か、今にも俺の右腕の力を暴走させてしまつかもしれない瀬戸際だといふのに」

「そうなると、どうなるんだい？」

「世界の終焉、そして創造が開始される」

「なるほど、さながら『リスタート再開』かい？」

「ほう、切刃にしては上手いな。だいたいは合ひているぞ」

「正解ではないんだね」

そこで一旦会話が中断される。

数秒間、音が完全に死んだ。そして雪哉は再び頃垂れる。

「朝、目が覚めればすでに家を出ている。学校が終わればすでに帰っている。家に戻れば、部屋に閉じこもり……そして日が変わる

」

「何があつたんだい？ 入学式の日は一緒に登校したそうじゃないか」

そんな切刃の言葉が更に自己喪失を加速させる。視界が真っ暗になつていき、生きる気力を失つていく。何もかもが狂い出したのは一週間前、入学式が終わつてからの帰り道。

理愛の身体の中に、種晶が確認されたということだ。

「妹さんの身体に種晶が見つかつたって、それだけだつたんじよう？」

「それだけ、で十分おかしこさ」

あれから一週間、理愛は孤独を徹底していた。雪哉にさえ声を掛けることをしなかつた。同じ屋根の下で暮らしているのだから、確実に顔を合わせるわけなのだが、それでも他人行儀に言葉を交わすだけ。これまでも、これからもそんな風に声を掛け合つことなんてなかつたはずなのに。

「能力の発動は確認されたの？」

「いや、それはわからない。聞いていないし、教えてもらつてない。これはよくあることだ。」

種晶が身体のどこかに見つかるなんてことはざらにある。問題はその先の能力発現にある。

唐突にお前は種晶を持っている、だから今すぐこの場で能力を発動させて見せると言わっても、そんなこと出来るはずがない。稀に能力 자체を公にすることを嫌い、能力使用を拒む者も現れはするが、そんな者は殆どいない。それでも能力を使おうが使えまいが、種晶が確認されればその時点で能力者の仲間入りとなる。そこから有能になるか無能になるかはその者に掛かつてくるだけである。

しかし、そんなことは雪哉には関係のないことだ。関係ないことだつた。それがもう理愛には関係あることになつてしまつた。

だから、今の雪哉に出来ることはそんな現実を話を逸らすことでも誤魔化すことだけだつた。

「昨日は先に帰つて理愛の帰りを待つたんだが……帰つてきたのが夕方を過ぎていたな」

「女の子が独りで出歩くのは感心しないね」

その通りだ。この町は都心から少し離れてはいるが、それでも夜になるまで外を出歩いているなんて雪哉としては心配でたまらなかつた。帰つてくるまで不安で押し潰されそうになつたが、いざ理愛が帰つて来た時はそんな不安消し飛んでいた。怒りも沸かなかつた。

「……俺は、ダメだな」

焦燥することしか出来ない自分の無力さに歯痒くなる。無能であることを恨んだことはなかつた。それでも理愛の為に何もしてやれ

ないことだけは死にたい気持ちすら覚えてします。

何もなくてよかつた。理愛も雪哉にも種晶は持たず、能力を持たず、ただの人間だった。たつた一つこうして変化を伴うだけで、兄妹の関係すらも変わってしまう。変化は恐怖だった。このまま全てが変わってしまいそうな

そんなのは嫌だ。まだ雪哉は理愛に何も聞いていない。理愛の言葉を耳にしていない。一人愚かに苦悩して何になる。行動しろ。そうでなければ、苦しいままだ。

いつの間にか雪哉は上を向き、天井を見つめた。失意に呑まれていたはずの瞳に色が灯った。いつかそこには意思が宿り、今にも行動しそう。

「ふふつ」

そんな雪哉を見て、切刃は微笑む。

「何を笑っている」

「いやね、いつもの雪哉に戻ったみたいで何よりかと」

「俺はいつも通りだ」

「そうだね」

そして会話は終了された。

ともかく雪哉がすべきことは見つかった。

「兄さんに、声を、掛けでない」

放課後の帰り、理愛はまた逃げるようにそそくさと学校を出いでた。今日も雪哉に顔を合わせることなく終了してしまった。朝、いつもより早く起き、学校へ行き、自分を殺し、放課後をむかえ、逃亡する。いつまでもこんなことをしてはいられないのだけれど、今はどうしても一人でいたかった。考えても答えは出ない。そもそも何を考えるというのだ。自虐的に笑い、理愛は家と正反対を歩いた。すぐ帰つてしまつては家でどうしても雪哉と顔を合わせることにな

つてしまつ。あの兄のことだ、すぐにでも駆けつけて来そうだ。

だからこそ余計に理愛は雪哉に顔を合わせずらいわけで。雪哉は氣を掛けて何か言つかもしない。そんなことをさせてしまつのが一番気に入らないのだ。

君の身体の中に、種晶が見つかつたよ。

たつた一言で反転した世界。下唇強く噛み締めれば噛み締める程に怨毒が滲み出るようだ。

種晶保有検査はいつものように種晶は確認されないとこの結果が出るはずだつた。それなのに、それなのに

「死ね」

それは誰に向けて放つた鬱憤だつたのか。眉間に皺を寄せ、舌打ちをするその仕草だけで十分に自分の魅力を損ねていることに理愛自身気づいていないようだ。

理由は、なかつた。

やるべき目的もない。

ただ同じ歩幅でこれまで歩いてこれたはずなのに、今はもう違つ。ギュッと制服のリボンを掴み、終点の無い道を歩き続ける。するどじうだらう、

「や、理愛。こんなところで何してゐの？」

会いたくないヤツがいた。理愛の目が更に釣り上がつた。爪先が今にも皮膚を突き破りそうなぐらいに強く握り締める。

夕焼けがゆつくりと夜空に搔き消されそうな夕方と夜の境界線の境、丑三つ時にはまだ早い。しかしそれはとても魔的に見える。厭な雰囲気だけ醸し出して、それはいる。

「用下、虹子……」

懷疑の眼差しを向けて、理愛は呼びたくない名前を口にする。その人の形をした魔性は二コリと笑い、三田用みたいに口を歪めて、目を細めてる虹子がそこにいた。

無言で一人は肩を並べ、歩いていた。とにかく立ち止まるわけにはいかなかつた。少しでも動き、声を掛ける暇すら与えない。しかし競歩は得意ではない。虹子より早く、虹子より遠くへ歩くことができれば、このまま逃げることができれば、なんて……そんなこと出来るわけもなくて、

「あれから、どう?」

それは何に対することなのか。

しかし、それが何かと聞いてはいけない。会話とは意思表示だ。疑問を傾けてしまえば、それだけで次の言葉が紡がれてしまう。ましてやこの女とは「コミュニケーションなんて行為を取りたくない」。理愛は口に栓をしたまま、自分からは声を出さないことを徹底した。「お兄さん、いたんだっけ? お兄さんは大丈夫だったんだっけ? ああ、なるほどね。それで、家とは正反対を歩いてるわけだ」心の中では言いたいことだらけだった。兄のことを口にするなど「うして家の場所を知っている。お前にわたしの何がわかる。けれど言葉を口にすることはしない。挑発に乗るわけにはいかない。

「お兄さんから逃げてるんだ、自分が変わってしまったことが怖くて、可哀想に。それなのにお兄さんは何やつてんのかね? 」ついして理愛は苦しんでいるのにね、ダメだね、ダメダメだね」「五月蠅い、死ね」

まるで化けの皮を剥がしたみたいに、理愛は自分の奥底に隠していた本性を曝け出した。

兄を過小に評価したことが許せなかつたから。そして兄が何もできなのは、妹である自分が逃げているだけだから、それをとやかく言われる筋合はない。

「いつも弱そうにしてるのに、やっぱそつちがホントの顔なのかな? 」
? こわいこわい

殺意を向ける理愛を見て、虹子は何も言わなくなつた。

それでも、虹子のことは本当のことだから。だから、その「死ね」はもしかした最初から自分に対して言つていたのかもしれない。

逃げてばかり。この一週間、たつた一週間だ。それでも永遠のような気がした。七日間の乖離でここまで理愛は苦悶していたのだ。それでも、まだ逃げることを選んでいた。

まだ、理愛の横にはしつこく虹子の姿があった。そんな虹子を見て、鬱陶しく思い、消え失せるとさえ思っていた。それでも、どれだけ敵意を向けても、消え去らない。

「種晶は見つかったみたいだけど、能力の方はどうなの？」

もちろん無言。返事はしない。

「わかんないんだろうねえ、いきなりだもん、でもさあ
「な、につ？」

虹子がいきなり理愛の手を握り、引っ張り出す。

理愛と変わらない小さな身体とは思えぬ程の力で引っ張られているようだ。いつの間にか成すがままに虹子に引き寄せられてしまう。振り解きたいのに、まるで手錠でもかけられたみたいに理愛の手首から腕が完全に拘束された。

「離して」

「ダメ、ついて来て」

そう言って、虹子は路地裏を通り抜け、交差点を越えて、辿り着いた先は公園だった。

大きな噴水の見える公園。だがその噴水からは水を噴出する」とはなく、水は枯れ果て、ベンチは転がり、遊具は錆付き、無人と成り果てたまさに廃墟だった。

駅から遠く離れたこの公園のように、人の集まらない場所はこうして終焉するしかない。そんな廢れた空間は、まるで世界から切り離されたよう。

虹子の目的地に到着したのか、理愛の手を離し、解放された。光の無い世界がそこにはあった。たつた一人、まるで世界に自分と虹子しかいないようだ。

「ほら、見てよ」

いきなり振り向いて、虹子は自分の制服をゆっくりとたくし上げ

る。綺麗な腹部が露わになつた。そんな行為を見て、理愛は自分の顔を手で隠し、視線を遮ろうとした。何をやつているんだこの子は、恥ずかしくないのか、羞恥心をどこへ置き去りにした。逆に羞恥した理愛だったが、そんなものはすぐに消えた。だつて、その目には虹子の腹部に結晶が映つたから。

「種、晶……？」

「綺麗でしょ。すじく、すじおく。これはねヒトを超えることが出来るものなの。そんな素晴らしいものを手にしたんだよ。」

種晶というものを見たことが無かつた理愛にとつて、それは透き通る透明な石と思っていただけだけに、虹子の腹部に埋まるそれが虹色に煌いでいるのを見て綺麗だと思つてしまつたのは事実だ。

「ねえ」

そんな輝きに魅せられた理愛を見て、虹子は満足そつこ一タリと氣色の悪い笑みを浮かべた。その表情を見せられて理愛は一步後ずさる。怖い。この前にいるのは、何だ。ニンゲン、なのか？

「ねえ、見せてくれないかな？ 理愛の、見せてくれないかな。理愛の、綺麗なヤツを」

胸ポケットから折り畳まれたナイフ。銀色の刀身が鏡のように反射する理愛の戦慄する顔が見えた。そんな刃先がゆっくりと理愛に向けられる。理愛は一步、また一步後ずさる。するとまた一步、虹子が鋭い切先を見せ付けて、理愛に近づいて来る。逃げればいい。今すぐにでも走ればよかったのに、それなのに背中を向けることだけはできなかつた。そんなことしてしまえば、本当にあの銀の刃が理愛の背中に突き刺さりそうな気がした。背を見せれば、殺される気がしたから。

「ああっ……」

背中に衝撃。振り向けば大きな一本の樹が理愛の退路を塞いでいた。どうして右に左に移動しない。一方通行じゃないはずなのに。どうして動けない。背中に伝わる樹の堅さ。空いた両手が震え上がり、震える身体と一緒に歯と歯が当たる。さつきの殺意はどこへい

つた。理愛が見せ付けた殺意は意味を成さなかつた。そしてもう目と鼻の先に虹子はいた。兇器が振り上げられる。銀の軌道が理愛の頬を掠めた。白い肌を伝う赤い血が顎先にまで滴つていた。

「殺さない、殺さないって。安心してよ理愛、私はね理愛の力が見たいだけなの。すごいんだううね、すごく綺麗なんだううねえ」

「や、いや……」

「さつきの冷たい目はどこへ行つたの？ 睨んだだけで人を殺せそうなあのおぞましい目はどこへ？ もしかしてこんな小さなナイフをチラつけただけで怖いの？ 委縮しちゃう？ どうしてえ？ 折角、手に入れたんだよ？ その能力を使って、状況を変えようよ。そうしないと死んじゃうかもね」

刀身は頬に宛がわられ、虹子の鼻先が理愛の首元に触れる。舌を這わせ、垂れた血を舐め取られた。

「ひや……！」

「理愛、可愛い」

扇情的な表情を浮かべ、そして虹子の刃が制服の胸元を切り開いた。布は裂け、理愛の黒の下着が露出した。裂けた衣類に手をかけて、曝け出された柔肌に刃物が向けられた。

「私ね、理愛のが欲しいわけなんだけど、どう？」

「わたし……を、殺す、の？」

理愛の身体には種晶は目には映らない。だつて身体の中にあるのだから。

「解剖しないと、ダメだから……そうするしかないのかな？ 悪いけどさつき殺さないって言つたのナシで」

麻酔をして、医者がメスを刺せばいいのではないか。なんて言葉は浮かばなかつた。そんな問題ではないのかもしれないけれど、とにかく今はただ向けられた畏怖の象徴を前に恐れを成して、かすれ声を出すことしかできない。

「とりあえず、痛いのは一瞬だけ、失敗したらごめんね」

「なんで、なんで、こんなこと……」

「ちょっといろいろコトワケあつてね、諦めてよ」

そんな都合で殺されるわけにはいかない。けれど反撃もできない。

助けて。

その言葉を発することができない。誰に助けを求めるところのだ。こんな人気のない場所に、一体誰が助けに来てくれるのだ。でも、そんな時にふと浮かんだ顔があつた。

兄さん。

理愛はそんな絶望の淵で兄の名を呼んだ。

けれど、そんなの卑怯じゃないか。自分が選択し、逃亡を続け、兄の接近を拒絶していた。そんな自分自身の行為は自業自得だ。その罪は死をもつて償われるのならば受け止めるしかない。

「どしたの？ 泣いてるの？」

「泣いて、なんか」

言われるまで気づかなかつた。目蓋にいっぱいの涙を浮かべ、今にも決壊しそうなぐらい溢れていた。慙愧の念に押し潰されそうになつて、もう我慢できなくなつていた。

「いいんぢやない、そうやって後悔しても」

理愛はもう何も言わなかつた。潔く罰を受ける為、目を閉じ、凶刃にその身を裂かれることから逃げることをやめた。死ぬのは怖いけれど、それが自分の起つた行為から繋がつことなのなら、もう受け入れるしかない。

「ごめんなさい、兄さん。

「待て」

その声に閉じられていた目を見開いてしまつ。振り下ろされずはずの凶刃もまた理愛の身体に届くことはなかつた。理愛も虹子もその声がした方へと視線を移す、そこには

「俺の妹に何をしている？」

理愛の兄である雪哉が左手で顔を隠しながら立つていた。そんな構えをしたまま突つ立つ雪哉を見て、虹子は刃先を理愛から雪哉に変えた。

「誰、アンタ？」

「その兄だ。その物騒なナイフは仕舞つてもらおつか」

どう見ても武装している虹子の方が、素手の雪哉以上に有利である。そんな戦闘力の差を見せ付けているにも関わらず雪哉は臆すことをなく立ち向かってくる。

「理愛、どうして劣情を煽るよつの格好をしている？　あまり外でそういう格好をするのは止めた方がいいぞ」

「ち、違います！　私がしたんじゃありません！」

そこで大声を荒げて雪哉に反論した。いつもよつの軽いノリで。でもそれがよかつた。戻つてこれた。こうやって軽口を叩けることに救われるのだ。何を逃げていたのか、兄はいつものようにそこにいたから。まるで自分がこれまで兄から逃げていたことが馬鹿らしく思えた。

「まあ、いい。ともかく、お前は理愛に危害を加えたといつこといいのか？」

「うーん、そういうことになるのかな。とりあえず面倒臭いし、アンタにも死んでもらおうかな」

ナイフの切つ先が雪哉に向けられたままゆっくりと雪哉に近付いて来た。雪哉は動かない。それどころか変なポーズをしている。

「兄さん、早く逃げて！」

「理愛、どこへ逃げると言つんだ。俺はお前を探しにここまできた。お前を家に連れて帰つて初めて、俺の願いは叶う。それ以外はできないな」

「なんだお前。氣色悪いヤツだなあ。これわかんない？　ナイフ、刺さると痛いよお」

雪哉のヘンテコなポーズとその口調がおかしくてたまらないのだろ？　虹子は笑いながらナイフを振り回した。それでも雪哉は恐れることなく左手で顔を隠し、左肘に右手を添えて立ち尽くした。

「知つていて。しかしそんな玩具でこの俺に一撃を加えられるとは到底思えない。その刃で障壁は貫けるのか？　防壁は崩せるのか？」

防護壁は侵せるのか？　出来るわけがない。人間の作ったモノではどうにもならんぞ？　少なくとも聖異物は携帯すべきだったな

「何いつてんだ、こいつ？」

どんな場所であつても、どんな状況であつても、雪哉は変わらない。そんな雪哉の言動を前に虹子は明らかな動搖を見せていた。不可解な言葉、不審な行動、その異様さにこの男が本当に能力を持たないただの人間なのかとさえ思わせる。

「ともかく、俺の妹に何をしていた？」

「わたしは種晶を手に入れて、新しい人類に進化して、素晴らしい能力を手に入れたかも知れない理愛に話をしてただけ。アンタ、理愛のお兄さんなんだつけ？　悪いんだけど今、大事なところなの。何の才能も持たないただの無能力者は帰つてくれない？」

そうやってナイフをチラつかせながら睨み、脅威を与えてくる。そんな敵視を向けられて尚、雪哉は構えを解くこと無く、怪しく微笑む。

「種晶か、人間が決めた才能がいつしか一つだけに括られた、だなんて悲しいな。それだけが能力だと、異能だと？　笑わせるなよ…」

： 小娘

「もう理愛とアンタにはどれだけもがいても届かないところまで来ちゃってるんだよ。とっくに違いが生じていることに、どうして気がつかないの？」

頑なにポーズを解かなかつた雪哉が、その言葉で初めて解除した。そして地面を踏み抜くほどに強く踏み締めた。土埃が舞い、そして左手を水平に薙いだ。

「何が、違ひだ。それはお前が決めることじゃ、ない！」

それは明らかに怒りだった。雪哉にはどうでもいいことだつたのだ。理愛の身体に種晶が見つかろうが、常識を超越する能力に芽生えようが、どんなことがあっても変わらない。変化なんてものは無縁なままでいい。この世界がどれだけ変わってしまっても、时任兄弟はずつと変わらないのだ。それを何も知らない部外者が、さもわ

かつたような口振りで間違つたことを、憶測だけで言い放つこの女が許せなかつた。

「だから、なんなんだよ。わたし、アンタのこと嫌いだわ。理愛のお兄さんじやなかつたら今すぐ殺してる」

「気が合つた、俺もお前が嫌いだ。この左腕の封印を解けば瞬く間に殺害している」

そう言つて、左腕に巻いた包帯を見せた。

「この包帯を外させるなよ、死にたくないければな」

「なに、それ？」

そんな雪哉の台詞に虹子は少なくとも警戒していた。能力は無いようだが、何を仕出かすかわからない言動に虹子はナイフを構え、殺意に満ちた眼差しを向ける。

「全てを制止させる、腕だ」

「お前の命を停止させてやりたい」

「どうか、だけど残念だったな。お前も、俺も」

「何を言つて」

遠くから聞こえる警報音。赤く灯された光が少しづつ大きくなつてくる。その光を見て、虹子はこれまでにない酷く歪んだ表情になつた。憤怒に塗れ、少女とは思えないおぞましい貌をしていゝ。

それでもその音と光は次第に大きさを増す。雪哉は携帯電話を開いた。

「俺の力を使うまでもない、お前は社会的に抹殺されろ」

雪哉は既にこの場所に到着して、理愛が虹子に襲っていたのを見ていたのだ。そしてすぐにこの国の行政機関に連絡していた。何の準備も無く、無計画のまま突進する気はない。ただ時間を稼いだけだ。雪哉はそれしかしていない。

「なるほど、ブラフってわけかあ。やるね……にしても理愛とよく似て冷酷な顔をしているね……キリ、こわいこわいナイフを折り畳み、そのまま雪哉に背中を向けた。

「……名前、教えてよ？」

「时任、雪哉だ」

教える必要なんてないのに、雪哉は名前を教えた。妹を襲つた敵に名を明かすのはどうかと思うが、それでももう虹子の人生はお終いだ。

「お前は？」

「月下虹子、じゃあねユキヤくん」

そのまま虹子は蜘蛛を散らすように逃亡した。追いかける気はなかつた。凶器を所持している危険者を追跡したところで何も得られない。それにもう顔は見たし、そもそも同じ学校の制服を来ている人間なのだ。どこへ逃げても無駄だ。そんなことよりも、だ。

「理愛、帰るぞ」

上着を脱ぎ、それを理愛にかけてやつた。服を破られて、下着が見えている。さすがの兄でも田のやり場に困る。そんな理愛は雪哉のブレザーを着込み、下を見たまま動かなかつた。

「なんで、ここに……」

「俺は、理愛をいつも見てる」

「変態です、兄さん」

「常態だが」

「…………死ね」

か細い声でそう言つた。雪哉の耳には届かなかつた。それにしても運がよかつた。雪哉はこうなるとわかつていてこの場所に到着できたわけではなかつた。これを理愛に伝えるかどうか迷つたが、やはりここは言わないのでおくことにした。

雪哉は、ストーキングしていたのだ。

誰よりも早く校門へ行き、理愛を待ち、正反対へ進む背中を見つけ、それを追いかけ、虹子と一緒に歩く姿も見て、いきなり走り出したのを確認したら、続いて走行。そしてここに辿り着いた。

「わたし、兄さんから逃げてました」

「そうだろうな」

「わたし、種晶が見つかって言われて、なんだか変わっちゃつ

た気がして、それが怖くて「

「そうだろうな」

「でも、そんなことなかつた、兄さんは助けに来てくれた」

そして理愛は手を取つた。小さな手は震えたまま、冷たくなつたその手が雪哉の包帯で巻かれた左手に添えられる。だから雪哉はその手を掴む。

「逃げるな、とは言わない。でも、逃げたくても、俺からは逃げるな」

自分を信用してくれなかつたことは辛かつた。理愛を見る目が変わることありえないのに。ありえないことが、ありえない。誰かの言葉、それだけは当てはまらない。それが雪哉の信念だ。「でも、だつて、もし、もし、もしも、わたし、おかしな力が、あつたら、兄さんが、にい、さんがあ……」

またそつやつて泣きしつつな顔をする。見たくない顔をする。だから雪哉は、

「阿呆」

理愛を叱咤する。理愛はそんな顔をして悲しそうな顔をする。でも、そんな顔を見て雪哉は首を横に振つた。

「兄妹、だろうが」

卑怯な手を使つたものの、ともかくそれ以外の言葉を用いることはなかつた。それ以上の言葉なんて雪哉には必要なかつた。そしてたつたそれだけで、理愛には伝わる。闇夜を伝う星空が駆け抜けた。そんな夜空の下で雪哉の顔を凝視して、理愛は涙を浮かべたまま、笑顔を見せる。

「はい」

だから、今はそれだけでいい。

常識からどれだけ離れてても、問題ない。

そんなもので、切り離されては困る。家族だから。

頭と目に銀の光沢を放つ少女。雪哉の妹。たつた一人だけの家族。だから、理愛を守るのは雪哉だけだ。こうして、雪哉は一層理愛を

守護すると誓つこととなつた。何があつても、何をしてでも守り通すということを。

だからいつだって銀の少女を救うのは、いつも、一人だ

1・6 無能なる者の敗戦

1・6 無能なる者の敗戦

「よかつたじゃないか」

朝、学校で切刃と話をした。

切刃からではない、雪哉からだ。あまりに珍しかったのか、切刃はいつもより機嫌良く、雪哉の話を聞いていた。雪哉から声を掛けることは殆どなかつたから、切刃は朝一番に開口する雪哉を見て、驚愕しているようにすら見て取れた。

「ああ、今日は理愛と一緒に登校した」

表情こそ変わらないが、いつもよりずっとその声は弾んでいた。

「能力だつて使えないままのようだ」

種晶こそ身体の奥底に眠っていても、異能の力が発動することはなく、そもそもどうやつたらそんなものが使えるのかわからないとまで言つていた。

種晶の所持を明かすのは義務だが、能力開発や能力習得は個人の自由だ。誰もが能力を手にしたいわけではないのだ。人を超えるといふことは人を止めると思う人もいる。人であり続けたいという想いから、種晶をその身に宿しても、異能はいらないと決断する。それは自由だ。もちろん、願いや想いだけで得られる力ではない。そう安々と道端に落ちた塵を拾うことで手にする代物ではないのだ。そんな中で理愛は種晶を身につけてもどうすればいいのか、どうやれば使えるのかわからないのである。

それがどうしたのだ。わからないならそれでいい。理愛がいつものように笑つてくれる。それだけでいい。もう何も恐れることはない。

「でも、気をつけなよ」

そんな幸福な気分に水を注すように、切刃はそんなどんでもない

ことを言つ。けれど切刃の表情は曇っていた。でもそれは本当に雪哉や理愛を心配してした顔ということだけは鈍い雪哉でも読み取れる。

「能力を手にする権利を持っているのに、能力持たない……能力を持つた人間らがそれを見れば、ただ無差別に侮蔑するつてことをね」

「……そう、だな。でも、」

才能を開花し、能力を覚醒させる者は圧倒的に有能者として称え、その逆として能力を持たない者は無能者として蔑まれる。これが『コーダー有能力者』と『ヌーフ無能力者』との差だ。ましてや最初から種晶を持たない為に能力が使えない、種晶を持っているのに能力が使えないとでは雲泥の差が生まれる。この世界にそんな蔑称が生まれ、差別される社会が生まれたのもまた事実だ。種晶を持たない無能力者の雪哉、種晶を持つ無能力者の理愛。この時点で分別され、受ける侮辱の大きささえも変わる。

「その時は、俺も一緒だ」

「ふふっ、そうだつたね。雪哉はおもしろいなあ」

「失礼なヤツだな」

「悪い意味じやないよ。羨ましいと、思つてね」

そう言つて切刃は雪哉を見ず、その後ろの窓に視線を向ける。桜の花はもう殆ど散つて緑色の花が生えていた。経過は変化。何もかも同じままなんて、ないのかも知れない。必衰の理を司ることの世界に、雪哉の思い描く理想は成就されることはないのかも知れない。それでも夢を見てもいいんじゃないだろうか。これからもずっと、理愛と一緒に……なんて、そんな考えを持つことは愚かなことなのだろうか。切刃の過去に興味はない。切刃もまた何かあって、ここにいる。雪哉は知つていたのだ。男の切刃が、女性のように髪を長く伸ばすその意味を。だって切刃の首に種晶が埋まっていたことを。それでも切刃は能力を開花していない。

切刃は無能力者なのだ。だからこそ雪哉の妹である理愛が種晶を持つていることを雪哉に教えられた時、我が子どのように不安そう

に、悲哀を帯びた目をして、雪哉の話を最後まで聞いてくれたのだ
らう。

能力を持たないことは恥ずべきことではない。それなのにこの世界はそれを許さない。能力を持たない人間が、まるで人ではないような、そんな人道から外れたような仕打ちを受けるわけではない。けれど、この世界はどこか異常だ。果たしてそれは、いつからそうなったのか……なんて、どうでもいいことか。

放課後、携帯電話を開くと妹が先に帰つて欲しいという内容のメールを送つてきた。前回のような逃亡とは違い、ちゃんとした文章でこうして送つてくれるだけでも十分助かる。気がついたらいななんて、そんなことされるよりかは遙かにマシだ。雪哉はわかつたとだけ書いて返信した。

一人で帰ることになつたものの、別に理愛と帰るか帰らないかの違いでどこか行く場所があるわけでもなく、どこかへ行こうなんて気も起きない。まっすぐ帰ることにした、のだが。

「よお、そこのお前、ちょっと待てや」

校門にて、雪哉はガラの悪い不良に絡まれることになつた。

しかしそれがただの不良ならば鼻で笑つて通り過ぎてやつてもよかつたのだが、そんなことはできなかつた。同じ制服、ボタンを外し、シャツは外に出し、耳にはピアス。おまけに金髪。なんというかまさに絵に描いたような悪人みたいな男が雪哉の行く手を遮つていた。

「……序列七位が、俺みたいなゴミに何の用ですか」

どれだけ風貌が悪党であつても、相手は学年上の先輩なのだ。敬うこと忘れたりはしない。そこまで常識知らずではない。自分の風貌は常識から完全に逸脱してはいるが。

序列。

それは能力の差を数字に表したものだ。

第一位から第四十七位まで存在し、数字が若ければ当然、優秀な能力を持っているということになる。とはいもののこの中に入れば十分であり、未来を有望視されるのは明らかだ。何故なら数割にしか満たない能力者とはいっても、何千何万はいるのだ。その中の四十七人の内に入れれば、その異能は高く評価された証明になる。

その第七位が、雪哉の通うこの学校にいる。それがこの月下雨弓つきしたあみである。誰もこの男には逆らえない。この町に君臨する能力者の中でも最強であろう雨弓に誰もが恐れ戦き、逆らうこともできない。そんな男に捕まってしまってはどうしようもできない。雪哉もまた何も言えずに押し黙ることしかできなかつた。相手はこの国でも十指に入る精銳、見た目だけで判断するのは愚か者のことだ。雨弓の実力は計り知れず、能力を持たぬ雪哉にとつては脅威以外の何者でもない。だけど、

「ちょっと付き合えよ」

「すみません、急いでいるんで」

用事はないが、どう考へても穏やかではない。自分から危険に足を踏み入れるわけにはいかない。この場から早急に脱出することが先決だ。しかし。雪哉が雨弓の横を通り過ぎると、雪哉のいる位置より少し横の地面が小さく抉れてた。

「今のは運がよかつたな、オレさノーコンなんだよ。たまたまハズれたからよかつたけど、ホントはお前の足狙つてたんだぜ」

雨弓が親指と中指を擦り合わせている。そうすることで何が発生したのかは雪哉には理解できるはずもない。しかし削れた地面を見て、もしそれが自分の足に接触したらどうなつていたのか。そう考えるだけで背筋に悪寒が流れた。歩くのを止め、雪哉は振り向く。

「場所を、変えませんか」

「当たり前だろ、ついて来いよ」

そして雪哉は捕獲された。狩られた獲物は狩人に連れ去られるだけだ。雪哉は黙つて、雨弓の後を追うことになつた。

あまりの出来事に周りの生徒らは臆病に自分たちは関係ないと無

視を決め込んでいる。それもそうだ、強力な能力を使う存在者の突然の登場に驚かないわけがない。そして何の力も持たない一生徒を連れ去る。はつきりとした上下関係の前に何もできない。そんな生徒らはチラチラと雪哉と雨弓を見ているのだが、雨弓に睨まれると一目散にと消えていく。取り残される雪哉。別に助けて欲しいとは思わないし、そもそも期待していない。どうにでもなれ……雪哉はそう自虐した。

到着した場所は、桟橋の下……これまた人気のないところをチョイスされた。

電車は通り抜けるけれども、真下で胸倉を掴まれている生徒がいるなんて誰にも気づいてはもらえないだろう。雪哉も同じ日に遭うのかと思うと嘆息を漏らすことしかできなかつた。

しかし雪哉は雨弓とこうして顔を合わせるのは初めてで、どうしていきなり声をかけられたのかもわかつていらない。だから雨弓が怒氣を浮かべ、敵意を向けてくる理由がわからないのだ。

もつといえば、こんなところに連れられて……第一声と同時に鼻の上を鈍器でおもいつきり殴られたはずなのにいつそんなことをされたのかわからない自分の状態がもつとわからない。

コンクリートの壁にもたれ、流れる鼻血を手で押さえた。何をされた？　何で血が流れてる？　痛い。とても痛い。でも痛くて声が出ない。

「お前にハメられたって、虹子が言つててよ、悪いんだけどお前死刑だわ」

そこで初めて合点がいった。

(やはり、あの小娘、「あの」月下の妹だったわけか)

雪哉は虹子が理愛を襲つていた日、名前を聞いた時から気にはなつていたのだ。月下の姓。雨弓のことは入学した時から知つていた。有名人だつたから。それもそうだ。国を代表する能力者の一人がこ

んな辺鄙な地でいればすぐにでも有名になる。勝手に耳にも目にも入つてくるものだ。そんな能力者の妹が虹子だつたというわけだ。

「でも、月下さんの妹は……俺の妹に、乱暴したでしょう」

「だけど反撃することは止めない。」

どんなに理不尽な一撃で襲われたとしても、信念を曲げるわけにはいかない。暴力で相手を捻じ伏せるような相手を前に、折れるわけにはいかなかつた。たとえ能力がなかつたとしても。

「お前、誰に口聞いてんの？　お前は虹子の顔に泥を塗つた、それだけで十分殺す理由にだろ？」

「……いい兄だ。妹の為にそこまで出来る、とても、いい兄だ……でもやり方が、おかしい、な」

敬うこととはやめた。一つ上なだけでそこまでする義理はない。鼻血まで出されて氣を使うなんてそこまで雪哉にマジヒストの素質はない。付け足すならこんなヤツに自分が劣つているなんて自殺ものである。能力一つで何でもできる、あたかも神にでもなつたような立ち振る舞いに心底反吐がでそうな気持ちだった。

「だったら、なんだ？　お前も妹がそんな目に遭つたりどうすんよ？」

「お前とは違う方法を用いる。お前のやつている暴力で、俺の選択肢を狭めるなよ」

そう言い切つた後に、雪哉の身体は吹き飛んだ。まだ見えない何かが雪哉の身体を蹂躪した。コンクリートに激突し、雪哉の身体がへの字に拉げる。そのまま数秒ほど空中に浮いたようで、気がつけば砂利の上に転がつていた。そして雨引の靴底が雪哉の顔面を潰す。

「無能力者のゴミが、なんで意見してんだ？」

雪哉は自分の顔が汚い靴で潰されることよりも、目の前の邪悪が人を別することに憤怒していた。同じ人間が、能力を持つているだけでこうも驕り高ぶるのかと思うと、余計にそんな狂つた力に関心など抱けるはずがないと思つた。

「なんだ包帯なんか巻きやがって」

「やめる、聖骸布には触れるな……死にたく、なかつたらな
この期に及んでまだそんなことを言つ。」

ボロ雑巾のようにな傷ついた雪哉だが、それでも瞳に灯つた光は消えていない。そんな強がりを見せ付ける雪哉を見て、『兩』は苛立ちを隠し切れない。

「なんだお前？ 妄言吐きのキチ いか？ おもしろすぎんだろ」「うる、さい……」

腹部を連續で蹴られ、顔は踏まれ、意識が朦朧とする。

このまま眠つてしまつた方がいいのかもしれない。痛いのは、やっぱりイヤだ。

「こんなのが兄貴だなんてお前の妹は可哀想だな。次はお前の妹を今のお前みたいにそつくりそのままのことしてやろうつか？」

ドクン。

雪哉の目が開かれる。

でも、それは幻想の未来でしかない。願えば力を得られたか？ 差し出せば全ては叶つたか？

この世界は、思い通りにはいかない世界なんだ。だから自分の大切なモノは独りでに消えて無くなつてしまつ。どんなに窮地に立たされたとしても、天から声は聞こえない。脳裏に音は響かない。覚醒なんてありえない。これは夢物語ではない。現実なのだ。

そんな現実を、雪哉は思い知らされる。こうして理愛に危害を加えようとしているのに、意識がこんなにもはつきりしているのに、手を握り締めるだけで精一杯じやないか。震え上がり、怒りの炎はこんなにも燃え上がつているのに、身体は言つことを聞いてくれない。思い通りの未来が構築されることはない。

無力。

力の無い者。能力の無い者。無能力者。それは雪哉だ。

能力を持つ者は思い通りに全てを手にし、全てを奪う。

そんな略奪者を前にしても、何もできない。

刃と語りだ力はどこへ。世界を壊し、創ることができるはずではなかつたのか。『図書館』なんてそんな組織、実在するはずもなく、世界はこんなにも異能で溢れてる。そんな溢れる世界の環から外れてしまつたままで、一体どうやって能力者と戦うというのだ。初めから、全ては決定していたのだ。能力を持つ者が勝利者で、持たぬ者は敗北者でしかないといふことが。なら、ここで願えば顯現するか？ここで吼えれば具現するか？ 何もできやしない。だから雪哉はゆつくりと、立ち上がり、そして額が砂利に擦れるまで下げるのことしかしない。

「妹に、手を出すのは、やめてくれま、せんか」

それは懇願だった。

自分はどうなつたつていい。どれだけ惨めでも無様でも、形などに拘つてはいられない。妹を守る為ならと、決意したはずだ。その誓いを早々に破るわけにはいかない。

「この通り、です」

だから、雪哉は頭を下げる。

雨弓が大声を上げて笑つていた。何か言つている。もう何も聞こえなかつた。だけど、こうするしか他に方法がない。何の力も無い自分にできるたつた一つの方法はこれしかなかつたのだ。

「お前、なんなんだよ、おもしろすぎんだろ。そこまでするかあ？いや、おもしろいもん見してもらつたわ。別にそこまでするかよ、オレだつて鬼畜じやねえし。そこまで頭下げられたら、オレも何も言えねえじゃん」

腹を抱えて笑う雨弓は何度も何度も携帯電話のカメラ機能を使って写真を撮つていた。雪哉のあまりにも無様な格好を保存しているのだろう。フラッシュの逆光が視界に入る。それでも雪哉は何もできなかつた。

悔しいとさえ、思わなかつた。

理愛に、手を出さない。それがわかつただけで安堵してしまつ。

「お前、ホント可哀想なヤツだな。無能つてどんな気持ち？ ねえ、どんな気持ちなんよ？ 可哀想すぎて、オレの今の罪悪感半端ないことになつてるわ」

頼むから日本語で話してくれとは言えず、機嫌を損なわぬように雪哉はともかく何も言わず、全てを受け入れることにした。夕焼けの空に笑声が響き渡る。雪哉にとつてはそれが不協和音にしか聞こえない。

「じゃあな、お前おもしろかつたわ。明日、学校楽しくなんぞ」そして、兩弓は雪哉の後頭部を蹴り、そのまま棧橋を後にした。頭に響く鈍痛で雪哉の身体がのたうち回る。最悪の気分だ。人としての威儀を全て崩落された。今、雪哉の人間としての株価は地の底にまで墜落していくことだらう。

「……よく耐えたな」

そうやつて自分の左腕の包帯を庇うように右手で押さえる。その行為は滑稽という言葉そのものだつたり。でも、やつすることでき自分を保つしかできなかつた。

本当に、無様だ。

全能たる結晶が集つ世界に、雪哉は何も持たない弱者でしかない。そつ、雪哉といつ人間そのものがこの結晶世界での無能力者なのだ。

だからこの日、时任雪哉は初めての敗北を喫すこととなつた。

1・7 有能なる者の敗戦

1・7 有能なる者の敗戦

兄妹の絆が深まり、数日が経過した。

桜花は枯れ、地面に落ちたはずの花びらは姿を消した。

虹子に襲われたあの日、早々と家に帰つてからというものの雪哉とは話をした。

身体の中に種晶が見つかったということは前に話したが、能力は発現していないことをまだ話していなかつた。それは嘘じやない。本当に何も変わらなかつたのだ。誰かが理愛の身体の中に種晶があると言つた。機械を使って、調べて、そう結果は出た。けれど、何もわからないのだ。

自分の身体を見ても、何もおかしいところなんてない。おかしいのは銀の髪と瞳だけ。それは生まれたころからずっとおかしいことだ。そんな異常は理愛にとっての正常なのだから、もうそんなことは気にならない。しても意味ない。

だけど、理愛の身体の中にあるその種晶をどうして虹子は欲しいと言つた？

そして、そんな疑問よりもわからないことは……月下虹子が飄々と学校にやつて來たことだ。

人一人殺そうとしたはずだ。雪哉は警察に一部始終話したはずなのに、顔も身元もはつきりしているのだ。見えない犯人ではないのだ。事件は起ころり早く、決着していくはずなのに、どうして何も言わない。教師はそんな虹子を見ていつものように出席を取つている。どうして？ 誰も何も言わないの？ そもそも虹子が理愛に何をしたのかさえ周囲は知らないけれど、別に理愛は虹子は殺人者だったなんて言い触らす気はなかつた。終わったことだと思つてい

たから。ただ単純に理愛がそんなことを言える相手がないということは言つてはならぬことだろうか。

それでも、今、目の前のこの奇怪な吐感がこみ上げてくる。

別の世界にでも迷い込んだ気分だ。

「ひさしぶり理愛、さみしかつた？」

理愛の横を通り最中、虹子はそう言つた。

理愛は下唇を噛み締め、無視を徹底した。なんだこれは、どうして、こうも笑つていられるのか。その神経を疑う。

「話があるなら、放課後……聞くよ」

耳元で小さくそう虹子は言つた。しかし相手の土俵に入り込む真似はしない。だから理愛は「なら屋上で」とそう返した。

授業のノートを出すものの、教師の声は頭に入らなかつた。何の授業をしたか、どんな内容だつたか。そんなことを気にかける余裕はない。この学校に、自分の憎む敵がいる。そんなのを前にしてよく平静を保つっていたものだと自分を褒めたいぐらいだつた。

筆箱からは取り出したのは何に使うかわからぬまま入れていたはずの使わない今まで新品だったカッターナイフ。それを手早くポケットに忍ばせる。護身として、身を守る武器は必要だ。相手はナイフを携帯していた殺人者。それを前に何も持たずに立ち向かうわけにはいかない。

放課後のチャイムが鳴り、授業は終わつた。

その音は戦いの鐘を鳴らしたかのようだつた。理愛はそそくさと屋上へ向かう。自分でも思い切つたことを言つたものである。何故なら理愛の通う学校の屋上は漫画のように開放されているわけではないのだから。屋上の侵入は禁じられており、それを破れば処断されるのだからそう近付いていい場所ではなかつた。そもそも新入生の分際で、屋上が頑なに施錠されていることを知つてゐるわけでもない。けれどいざ行つてみれば、錠前は両断され、扉は開いていた。この扉を開けば、戦いは始まる。もう逃げられない。準備は万端ではない。即席で装備を整えただけでどうにかできるとは思えない。

しかしやるしかない。逃げるわけにはいかない。兄を呼ぶべきだつたか？ それはダメだ。逃げない。一人でも、戦えることを兄に証明したい。理愛は兄にただ心配をかけさせるだけの存在にはなりたくないから。

「やつほお、来たね理愛」

「なんで、ここにいるんですか？」

「やだなあ、脱獄して来たわけじゃないよ？ ちゃんとポリ公には事情話したし、いろいろしてね、私はこうして釈放されたのでした」あり得ない。

そんな馬鹿げた話があつて堪るか。あの日、兄は警察に事情を話し、理愛も警察から話を聞かれたから、包み隠さず全部言った。それなのにどうしてこんなところに虹子がいる。

「ムリだよ

「何が……？」

「私をどうこうしたかつたら、力を見せないと」意味がわからない。理愛は十分、兄の不思議電波を受信させられているわけだから、相当おかしなことを言われても感受することは出来る。それでも、虹子の発言だけは理解しがたい。どうして能力を見せなければいけない。そんなもの使えるわけがないのに。

虹子の瞳は黒から白へ移り変わり、やがて金色に輝いている。そしていつぞやのように胸ポケットから折り畳んだナイフを見せ付ける。

「あなた、馬鹿なんですか？ こんなところでそんなもの見せて……わたしが悲鳴を上げたらおしまいですよ？」

「ふふっ、ホントにそう思う？ いいよ、悲鳴でもなんでも叫びなよ」

虹子は狼狽することもなく、むしろ理愛の行為を許可したのだ。おかしいのはどうしてそこまで自信を持つて、こんな狂った行為に及ぶことができるのかだ。理愛を襲ったあの日も、突然の出来事だった。この女は、本当に、どこか、壊れているようだ。

「ありや？ 叫んでもいいんだけど、どつたの？」

だから理愛は悲鳴を上げることはやめた。意味がない。あれだけのことをしておいて数日程で帰還されでは、何らかの力が働いているとしか思えない。兄の影響だろうか、妹の理愛までここ最近、おかしな思考が働くようになってしまった。

あれだけ兄の発言も行動も卑下していたくせに、なんて、兄妹なんだからこうなってしまつのは当然か。これだけ異常な状況でさえ、兄のことを思い浮かべると笑ってしまう自分がさらにおかしい。

「月下さん、これ以上、わたしに関わるのはやめてください」

だから、これは戦闘だ。兄のよく言う、戦争か、闘争か。

手にはカッターナイフが取り出され、刃先が伸びる。

種晶が見つかってから、こんなにも変わってしまつたのだろう。ましてや殺されるかもしない場面にすら遭遇するなんて、お陰で日常なんてとっくに壊れてしまつてゐる。銀の髪と瞳だけを恨むはずの世界に、憎悪がもう一つ、いや二つ加わるだけで、理愛の世界がおかしくなる。もう十分だろう。そんなに憎いのなら、壊し返してしまえ。わたしの世界から、消えてしまえと……理愛は刃を力ちりと引き伸ばす。

「え？ 何？ いきなり？ そんな突然？ 話は？ 何もないの？ 聞きたくないの？」

「興味、ありません。アナタのことなんか。だから、消えてくれますか？ わたしの前から消えてくれますか？ お願いです、わたしをこれ以上苦しめないでください。アナタを見ていると疲れるんです。憑かれたみたいに苦しくて、重くて、目障りなんです。死んで、くれますか？」

どうしたんだろう、自分は何を言つているんだろう。おかしくなつてるおかしくなつてるおかしく

なんで、身体が勝手に動ぐの。いつあるつてわかつてた？

リノリウムの床を強く蹴り、跳躍した。まるで自分の身体じゃないみたいに、強く跳ねる。きっとこれはもう決まっていたこと。自

分の前に現れた敵を、やつつけるためにする」とだ。

どうして？ なんでそんなことするの？ 身体は動く。止まらない。

「震えが止まり、雑いだ刃が虹子を襲う。

「ひやあ！ もつと驚くと思つてた！ 理愛を殺そうとした女が学校にやつて来ただなんて、普通おかしいでしょ？ それなのにさあ、じやがいも見るみたいに目の色一つ変えないんだもん。やっぱ理愛、理愛、理愛理愛理愛、アナタ、『本物』なんだつてえ、だからさあ、教えてよ。私に見せてよ。魅せてよお！」

何を持つて本物と言つのか。それならば贋物は何なのか。

理愛にはわからない。わからなくていい。虹子を倒せばそれでいい。こいつが理愛にとつての障碍ならば、それを押し留めるのは理愛でしかない。兄に頼るわけにはいかない。妹の問題は妹が解決する。攻撃されたのなら、迎撃するだけの話だ。なんでそれに気づかなかつた。

そう気づいただけで、身体はこんなに軽い。どうして？ どうして今から人一人殺すかもしないってのに、気持ちはこんなに晴々しいのか。その理由はすぐに気づいた。そうだ、兄を心配させることがなくなるからだ。不安を根底から断つことができる。素晴らしい。なんて素晴らしいのか、また元通りだ。こいつを終わらせれば、「すごい、速い、はやい！」

「死ね」

縦横無尽に突出する刃がぶつかり合い、火花を散らす。工作用のカッターナイフが携帯武器のバタフライナイフと互角に刃を重ねている。当たり所が悪ければ間違いなく致命傷だ。薄いカッターナイフの刃だつてきつと容易にへし折れるはずだ。それなのに理愛は銀の瞳でそんな紙一重の世界を直視する。

「なに、なになになに？ 隠してたの？ そんなの隠してたの？ なんであの時そうしなかったの？ もつと早く楽しめたのにい、びっくりしたよ、びっくりしたあ！」

刃と刃が重なる度に、虹子の狂った顔が見え隠れする。そんな顔

を冷酷な瞳で見つめる理愛。命を奪う銀の刃と同じ瞳の色で、虹子を一瞥し、再び跳躍。

「なつ……、速いい？」

そこで初めて興奮し続けた虹子の顔の色が変わった。瞳も赤から青へと変色している。だつて、理愛の小さな身体が半月を描き、宙を舞つていたから。そのまま墜落する理愛は逆手に持ち直したカッターナイフで虹子に切りかかる。

だが、間一髪か虹子はそれを前転し、回避する。それでも背中の制服の布がバツサリと切り裂かれていた。明確な殺意を持って、その刃は振り下ろされたのだ。もし何もせずにその場でいたのなら、脳髄と血液で屋上が水溜りを作り描いていたことだろう。

「殺す、殺すつもりだった……私を、殺す、つもりだったの？」

「ええ

掠れた声で眩く虹子に理愛は素つ氣無くそう言つた。

「そう、そうだよね、ここまでしてるんだ……覚悟、してるってわけだあ！」

理愛の身体を穿たんと尖鋭な刃が襲い掛かる。けれど、その刃はまるでバターでもくり貫いたみたいに綺麗に無くなつていた。肝心の刃先は地面上に転がり、ナイフとしての意味を失わされた。

「は、はは……すごいや、こりや勝てないかも」

「勝ち負けはいいです。だつてアナタが消えればもう終わりなんです」

「ふふ、おかしくなつたね理愛。もう認めたの？ 私たちと同類つてこと」

「一緒にしないで。兄さんがわたしを認めてくれるから、だから怖くないだけです」

こんなに早く、こんなに速く、これまでこんなにも素早く理愛は動けなかつた。

どうしてこんなことができたのかもわからない。

それはきっと常識を超えたのだけははつきりとわかる。

だから、おかしくなったというのは正しいのかもしない。それが嫌だった。そうはなりたくないが、それで救われているのだ。力が無い無能と呼ばれるそれに兄も分類されてしまつても、理愛にとつては有能以外の何者でもない。言葉一つで心を救うことができるそんな兄を、理愛は決して裏切らない。裏切れるわけがないのだ。だから、自分も戦つ。兄のように。

「ふふ、ふふ……」

そんな理愛を他所に虹子は笑っていた。武器を失った虹子にそんな余裕はないはずなのに、馬鹿にしたように笑う虹子が許せない。理愛はカッターナイフの刃先を向ける。

「何がおかしいの？ もう、アナタは何もできない」

「そうかもね、でも、理愛のお兄さんはどうなのかな？ あのいけ好かないクソ野郎。理愛はこいつやつて私をやつつける術がある。でもお兄さんはどうなるかな？」

「……死ね」

カッターナイフを持つ手に力が籠る。このま力を矛先を前に向ければ、虹子の人中を突き破ることぐらい容易く出来る。だが、それよりも兄の状況が気になつてしまつて思つようく刃の位置を固定できぬ、理愛の手が震えていたから。

「私にもさ兄貴がいてね、今頃、ボツコボツにされてんじゃないかな。ホント、あのチキン野郎。勝てないってわかつてて先にサツ呼んでるとかつまんねえことしやがってや」

理愛はその言葉に反応し、虹子に覆い被さつていた。

背中から思いつきり転がされたつていうのに、虹子は平気な顔のまま勝ち誇る。おかしい、確かにさつきまで勝つていたはずなのに。だからこの女に少しでも勝利の余韻を味わわせる気なんてない。そのまま圧し掛かり、刃に殺意を乗せる理愛は虹子に密着したままこう言つのだ。

「次、兄さんのことを口にしてみなさい……わたしは躊躇いもなく

アナタを殺すわ

「ひいーこわいこわい、なんだ、そっちの方があずつと綺麗。ずっとずっと死んだ魚みたいな目で怖かつたんだよ。感情が欠落してるのがなって。でもそうでもなかつたみたい」

押し付けられたカッターナイフの刃が虹子の頸動脈に当たられていた。それなのに虹子は汗一つ搔かずに煽りを止めない。

「その減らす口、引き裂きます」

「エラく強気だね理愛、どうしたの？ 何を焦つてるの？」
「何を言つて……」

パン。

そんな腑抜け音が屋上で鳴つた。虹子はやはり終始笑いを止めることがなかつた。青色だった瞳が黄色から緑色に変わり、また赤に戻り、そして銀色にと止まらぬ変色の瞳で理愛を見つめる。ほんの一瞬の出来事だった。理愛の手にしていたはずのカッターナイフの刃先が粉微塵に砕けていた。

何が起こつたのかわからず、そのまま後退。その後退は無意識の内にした防衛本能から行つたものだつた。今、この女、何をした？ 「すごくよかつた。初めてにしては、上手く動けてたんじゃないかな？」

その変わり続ける瞳が不気味に虹色を形成する。一色ではなく、複数の色を宿すその瞳で見透かされるだけで理愛の脳内に警鐘が鳴り響いていた。

「わからない？ 何をされたか？ 何が起こつたか？ わかるよ。理愛ならわかる。始まつたばかりの理愛の力じや、まだ経験不足でムリかもしれないけど、でも大丈夫。理愛の『特別製』なんだよ？ 問題ないって」

「何を言つて……」

虹子は笑う。不気味に、不吉に、道化師のようだ。そしてくるり

と一回転し、子供がはしゃぐようにステップを繰り返し、肩で小さく理愛に触れるか触れまいか微妙な力で接触する。

たつたそれだけの行為で、理愛の身体は途端に吹き飛び、屋上から落下を防ぐフェンスに叩きつけられたのだった。脳味噌を限りなくシェイクされたようだ。視界が揺らぎ、意識が途絶えそう。それでも必死になつて立ち上がる。そんな姿を見て、虹子は驚きを隠しきれない様子だった。

「手え抜いたから、そりやそうなんだうナド、立ち上がられると結構キツいね。私のだつてそりやもう『特別製』だからさ、そんじょそこらの力ス能力とは違うんだけど、まあ、たすが理愛なのかな」「はあ、はあ……はあ……」

荒く息を吐くことしかできない。けれど片手にはまだカッターナイフがしつかりと握られている。まだ戦える。武器があれば、戦える。さつきみたいにすごい勢いで近付いて、すごい勢いで攻撃すれば……なんて、すごい勢い？ それだけしかできないのか？ そのそれだけも、今はどうすれば出来たのかも覚えていない。

それでも立ち止まるわけにはいけない。屈服してはいけない。敵の前でうつ伏せで倒れていてどうする。自分の身体を叱咤して、無理矢理に立ち上がる。もう足がおぼつかないのか古時計の振り子のように左右に揺れ動いていた。

「でも、ちょっと熱すぎるのはおもしろくないかな。むしろ寒いつつーか、そのなんだ、そろそろ終わりにする？」

再び虹子の瞳が七色に染まる。

そして最大の暴力が今までに理愛に襲いかかろうとしている。

「ずっと、変わらないままなんて、ないんだから。だからさ、諦めなよ」

何を、どう諦めるといつのだ。そんなことできるはずがない。

「理愛、キミの未来は、もうずっと前から決まってたんだよ」

だから、自分の物語に他人が触れるなんてもつての他だ。これら未来までも、自分以外の何者かに線を引かれるだなんて、そん

な未来を誰が欲するといったのだ。

だから

「わたしの未来を、勝手に決めるな！」

だから、どれだけ力量に埋められぬ差があるとしても、曲げられない信念一つで、立ち向かう。

何の考えも持たず、何の技術も見せず、理愛は突きを繰り出す。それでも力の無いその刃では、敵の牙城は崩せない。見えない壁に遮られるように、コマ送りのようにスローで再生されるように、小さく砕け散る理愛の武器をただ啞然と見つめることしかできなくて、そして、破壊し尽くされると同時に理愛もまたその場でペタンと座り込むことしかできなかつた。

「決まるさ、アナタの未来は私が決めた。だからもつ理愛、おしまいなんだよ。一つ勘違いしてるかも知れないから言ひとくね」

小さな虹子の身体が理愛の前では巨大に見えた。あまりに圧倒的なその力が理愛の信念を崩壊させていく。

これが能力者としての能力を使用した姿だとするのなら、自分はとてもなく矮小であるということを思い知らされた。

「理愛の力が目覚めるまでの余興だよ、だから私はここにいるんだよ」

「アナタは、何者なの？」

「A「k」

「……え？」

聞き覚えの無い単語。

理愛は首を傾げる。

虹子はまた不敵に笑い、口元は三日月を描く。

何も知らぬ、解らぬ、そのままで、一体誰に勝つといふのだろう。立ち向かう」とで変化から逃れようとした。けれどそれは叶わなかつた。

だからこの日、时任理愛は初めての敗北を喫すこととなつた。

1 8 希望だけは、忘れたくないから

1 8 希望だけは、忘れたくないから

月下虹子に完膚なくまでに敗北した理愛ではあつたがどうやら命だけは奪われずに済んだようで、こうして今日も学校へ行くことができる。

どうして生かされたのか？

こうして五体満足でいられたのか？

何の気紛れで虹子は理愛に止めを刺さずに消えたのか。

それは虹子にしかわからない。どれだけ考えたところで答えに行き着くことなどできないのだから、考えることはすぐに止めた。

正直、学校へ行くような気分ではないし、当分行きたくないという気持ちが強くなる一方だつたが、ここで逃げてしまえば負けたような気がしてどうしてもその選択を選ぶことだけはできなかつた。逃げれば、虹子の全てを肯定してしまうような気がしたから、だからそれは嫌だ。

なんて昨日、人間を少し止めてしまつたわけだが、その代償として右手に裂傷を負つてしまつた。絆創膏一つでは足りなくなるほどの傷が理愛の手を穢していた。持つていたカッターナイフが何かの力でいきなり木つ端微塵になり、その破片で怪我をしたのだが、あの時はとにかく死に物狂いだつたせいか感覚も鈍くなつてしまつていたのだろう。痛みを全く感じなかつた。

それでもさすがにそのままにしておくわけにもいかないので、こうして右手に包帯を巻いているわけなのだが、これではまるで兄の真似をしているようだ。別にそんなつもりはないのに、それなのに雪哉はさつきから横目でチラチラと理愛の右手に視線を送つている。何か言いたげだったが、それを言わせてはいけない。きっと少しでもこの右手のこと話を題に上げれば、雪哉はきっとわけのわからな

い謎電波を発信し続ける有害電波塔に変貌するだろつ。

だから、理愛は自分からこの右手とは別のことを話せば大丈夫だろつと思つたわけだが、

「兄さん、その頬にへばりついてる大きなガーゼはなんですか？」「これは闇黒竜グラディヌエルダに受けた傷だ」と、ごらんの有様である。

理愛はもう何千回何万回と過言ではないほどに雪哉のこんな台詞を今日まで聞き続けてきた。それがもうこの兄のいつもの口調と思うと、本当に心配になつてくる。どこにそんな龍がいた。そもそもそんなのがこの町にいたら普通に歩かれただけで大事件だ。

それでも、そんな架空の幻想種が世界を飛んでいると思つてているこの頭の中が万年妄想の兄のことでも理愛が知つていいことがあるた。

「あの龍の吐息には呪詛の属性が付加しているからな、さすがの俺でもよく耐えられたと思う。状態異常として、生命の再生力を停止させる力が宿つてゐる。負つた傷が治らないとは厄介だ。早くこの呪いと解かねば俺の身体は忽ち壊死することだろつ」

「なら、学校に行く場合じやないでしょ。そつそとの謎ドリゴンを討伐しにいってくださいよ。でないとこの町どころか世界もピンチですし」

「ふむ、そうしたいところなのだがな……残念なことに俺はまだ『グルヌギニアス』を手に入れていない。あれが無ければヤツの纏つた呪詛が破れない

「兄さん」「なんだ？」

「何か誤魔化したい時ほど、そつやつて謎言語、話すのやめません？」

理愛の言葉に雪哉は一蹴された。完全に思考を読まれている。

理愛は知つてゐる。雪哉が何かを隠してゐる時ほどにこつやつて造語を並び立てることを。それを捲くし立てるようになつて聞いてもいな

いのにしつこく言つ時こそ兄の癖がよく見える。

バレている。だから雪哉もそれ以上は謎電波の送信は止め、ゴホンと一つ咳をして理愛に話しかける。

「昨日はすまなかつた」

「やめてください、すまないなんていう高校生いますか普通」ともかく堅いというかどこかズレているといつか、そんな雪哉の言動に理愛は苛立ちを覚えていた。それもそうだ、昨日いざ虹子にズタボロにされた理愛はなんとか家に帰ることが出来たが、いざ家に帰つてみれば雪哉の姿は見えず、そんな雪哉は自分の部屋の中から「今日は疲れたからもう寝る」なんて、まだ夜にもなつていないのでそんなことを言つて部屋から出てこなかつた。

そして今日の朝、いつもより少し遅れて部屋から出でてきた雪哉は頬に大きめのガーゼと小さな絆創膏を貼つて出てきたというわけだ。

理愛も右手に包帯だが、怪我の大きさは雪哉の方が大きそつだ。もしかしたら服の下も酷いことになつてているのかもしぬれない。それなのに雪哉は何も言わずにいつものように学校へ行こうと理愛と一緒に家を後にしたというわけだ。

まるで数日前の理愛のような立ち回りに理愛自身立腹だった。

理愛を助けてに来てくれた時のあの勇敢な姿はどこへいった。今はとても小さくなつてしまつたようだ、あの時の兄はどこかへ行つてしまつたようだ。

「昨日、いろいろあつてな

「そうですか、わたしもです

兄妹のそろつて敗北した昨日。

傷を手当したというのがはつきりわかる包帯やガーゼはまさに証明のようなものだ。だから一人は言及しない。互いに傷を負つてしまつたのだが、その傷を互いに舐め合つような愚かなことはできない。何故なら、徹底的に敗戦したものの心底負けを認めたくないのだ。兄妹揃つて負けず嫌い。命のやり取りが行われていても、負けを認めることがだけはしたくない。

「もしかして……理愛、その包帯は右手に巻かれているな？」

「いや、そんなの見ればわかるでしょ」

「俺とは対なる方、左ではなく右……神の力とは相反するのは一つ。理愛よ、まさかとは思うが俺の力に嫉妬し、神とは真逆となる魔の力に手を出したのであるまいな？」

「あの、ホント度々お願いしますけど日本語で喋つてくれませんか？」

「だから、俺の左腕とは真逆に包帯を巻いているだろ？　それは神の左腕ではない……悪魔の、右腕なんだ」

「よくそんなこと真面目な顔で言えますね、兄さん」

ふざけるのではなく、それがいつもの兄の姿であることを理愛は知っている。

しかしこいつまでたつてもその言葉の意味は何一つ理解できていな
いまだ。いや、理解する必要などないのだろうけれども。

「あれ、あれあれあれ？　そこにいるのは出来損ないの時任くんじ
やないか？」

校門を抜け、校内に入った途端にそんな声が聞こえた。

雪哉と理愛が立ち止まる、玄関前には月下雨弓^{ムツヅクニノヒカリ}が立っていた。
しかし一人ではなく取り巻き連中を引き連れての登場だ。理愛は無
意識の内に目先の威圧感に圧倒され、雪哉の後ろに。背の高い雪哉
の後ろに隠れるだけで、理愛の姿は殆ど見えなくなる。元々、人と
の接触が苦行な理愛にとって異性はさらに苦手意識を強くする。

「マジで来やがった。お前、頭大丈夫か？」

「別に異常は」

いたつて平常だと、雪哉は言つ。

それを聞いて雨弓とその取り巻きは大声を上げて笑う。不快な声
だと雪哉は思つた。朝からこんな不協和音を聞かされる」こちらの身
にもなつて欲しい。

「な？　こいつおかしいだろ。昨日、あんなことがあったのに平氣
な顔してやがる。オレなら自殺もんだぜ」

雨引は自分の携帯電話を取り出し、それを開くとディスプレイが光る。そこには雪哉が土下座した姿が映し出されている。昨日、何度もフラッシュショットをかれていたのは知っている。やはり写真を撮らっていたようだ。そんなことはわかつてこる。どうせそうやって晒し者にして嘲笑することも知っているそれがどうした。雪哉にほどうでもいいことだった。

「兄さん……」

理愛にもそんな不細工な体勢をする雪哉の写真を見て、悲哀の目を浮かべていた。

「理愛、こんな俺を軽蔑するか？」

それだけは雪哉にとつての不安だった。

だが、理愛は力強く首を横に振り、それを否定する。それだけは本当に救いだつた。では、もうこの刹那的な苦悩は瞬滅したわけだ。まさしく、どうでもいいことになつた。

「ここまで来て、遅刻したくないんで」

だから、雪哉はそのまま理愛の手を取り雨引の集団を横切りつつとした。

折角、校門まで抜けたといつのにこんなところでこんなつまらない連中に付き合つて遅刻するだなんて愚かすぎる。何を言われようが、何を思われようが雪哉にとつて瑣末なことにすぎない。

「つたぐ、つまんねえヤツだな……お前は頭パーくつて妹は気持ち悪い髪してるしな、変態兄妹め」

「……ちつ

雪哉の頭の中で何かが切れたような音がした。

玄関に入ることを止め、理愛の手を離し、振り向いて猪突の如き勢いで取り巻きの合間を潜り抜け雨引に接近した。そして逡巡することなく暴力に走つた。しかしそれは右拳によるただの正拳突きだった。なんの力も無い、ただの拳は雨引の手の平に包まれていた。

「まあ、そう怒るなよシスコンちゃんよお」

「撤回しろ、でないと殺す」

「うつせ、お前を殺すぞマゾ野郎」

「どれだけ力を籠めても、雪哉の拳は雨に握られたまま。周囲の空気が一気に下がる。嫌な予感がする。この感じ昨日と同じ。それでも雪哉は逃げようとしない。この拳を顔面に叩き込むまでは、妹を侮辱した罪を償わせる為にも。能力を使いたければ使いいい。むしろ使つてしまえ。

「お前、有能力者に勝てると思つてんの？」

「思つてない。ならなんだ？ 能力を使うか？ 使えばいい。それでお前は社会の屑の仲間入りだ。とっくに法律も改正してるだろう？ 能力者は、能力を使って一般人を傷つけてはいけない、知つてるだろ？」

能力を使用した犯罪や暴力行為はとても重い罪だと、前に言った。雪哉にとって最大の防御とは、自分が能力を使えないことを利用することだ。

有能力者による能力行使での無能力者への攻撃は重罪だ。立派な犯罪で確実に法で裁かれる。

昨日も散々能力で痛めつけられたのだろうが何分それを証明する手立てがない。だから黙殺を決め込んでいたが、今は違う。今は立派な程に人が集まっている。しかも学校だ。能力で危害を加えればその時点で雪哉の勝利だ。

そんな雪哉はただ殴つただけだ。それでも十分過激な行為だ。だが、能力者ほどじやない。

どうなつたつていい、ただ今だけは理髪を卑下したこいつが許せなかつた。勝てないことは重々理解しているつもりだ。そもそも、もし戦うとしてもそんなわかりきつた戦力差の前で何ができるといふのだ。戦闘が開始されて、ものの数秒でケリが着く。そんな世界だ。それでも、能力が無いから、戦うことができないから、それで自分の世界を、理想を穢されるのに耐えるというのか？ そんな地獄、雪哉はいらない。この世界はとっくに獄中だ。ならこの檻の中で出来ることは何か？ 逃げぬ、ことだ。

ここで逃げたら、諦めたら、それこそ能力を持つ者の世界が大きなものに構築されていくだけだ。いつかもう無能力者は人間としての威儀そのものも奪われてしまいそうな気がして、同じ人間だろうに、たかだか空が飛べて火を噴けばそれで満足な人類がそもそもの気狂いだ。雪哉にとつて本当にこの世界はおかしいものでしかないのだ。だからこそ妹がいてくれるだけでいい。一人でただ生きていければ、それを邪魔立てする輩を前に黙止を続けることなんて出来やしない。報復しろ、反撃しろ。そうでなければ、兄妹の世界は明らかに変化する。それを止める為に、雪哉は戦うのだ。だから

「お前はいつか裁かれる、いつかきっと、足搔く俺たちに負かされる」

「はいはい、氣色悪い病氣患つてるヤツはひとつとと去ねや」

だからこの宣戦布告は、覚悟だ。

希望だけは、忘れたくないから。

それを願うことさえも失えば、きっと終わってしまうから。

まだ諦めるわけにはいかない。好機はきっとある。だからそう信じて

「はいはーい、やめやめー喧嘩はやめてー」

そんな決意と意思だけを武器に、強大な敵に立ち向かおうとした雪哉を制止するように割り込む男が一人。

白装束、無精髭、眼鏡、なんともまあ、胡散臭いという言葉がよく似合う男が現れる。一触即発、むしろもう爆発していたはずのそんな空気が消散し、雪哉と雨乃はその男を睨み付けることしか出来なくかつた。

「おーこわつ、視線で人が殺せるならあなんて言葉聞いたことがあるけどさ、それと今、同じかもお。でもでもお、死因が視線なんて、親不孝すぎ！」

どれだけ怪しい風貌であつたとしても、雪哉も雨乃も手は出せない。だってこの男は雪哉たちが通う学校の教員の一人なのだから。

「そこを、どけてください瀧乃曜嗣先生^{たきのようじ}」

「雪哉くん、人をフルネームで呼ばないでくれないかな。先生、今ね、とおおつても怒つていいわけだ」

そこで氣色の悪い声を上げて、一回転。そのまま一指し。

「はーい、雪哉くん指導おー。今から図書館清掃してきなさい」「なんで……俺は……」

「行けよ」

それまで腑抜けたような声を上げていたくせに、いきなり声のトーンが変わり、眼鏡の奥底に見える眼光。雪哉は無意識の内に図書館の方へ向かう。理愛は玄関の前で立ち尽くしたままだったが、理愛には何の罪もない。雪哉は理愛に何も言わずにそのまま玄関とは逆を歩く。

そしてその場から消えた時任兄妹をジッと見つめる雨乃は獲物を逃げられたことへの苛立ちを曜嗣に向けた。それでも曜嗣はへラへラと笑つたまま他人の神経を逆撫するような口調で、

「月下くうん、お願ひだからこんな人気のある場所で堂々と力見せ付けないでくださいねえ。すごいパワーを持つてるんだからあまり見せ付けられて怖がるだけですぜえ」

「……わかってるよ」

「それに、あまり表立つて動くと、やり難いでしょ？」

「何が言いたい」

曜嗣の言葉に雨乃は反応し、つい言葉を返してしまった。

「なああんにもつ、なああんにもつ、ないですよお？　ないですともお。ああ、雪哉くんがちゃんとお掃除してるか見に行かなないと」

曜嗣はグルグルと腕を回しながら玄関から消えた。

こうして騒動は收まり、誰もがいつものように登校する学校の姿に戻るのだった。

曜嗣は図書館へ向かう。眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、

「おもしろくない。なあんにも、おもしろくない。雪哉くん、さつさと行動しないと、手遅れになるよお？」

その言葉が何を意味しているのか。それは曜嗣にしかわからない

ことだつた。

1 9 騒う白衣

不満を抱きつつも雪哉は図書館の整理整頓、及び清掃に励んでいた。

今更こんな古い建物。本などという紙媒体は今や過去のモノだ。全てデータ化され、書籍も全て今や機械を用いて閲覧することが可能となっている。今や片手で持ち運ぶ情報端末でいくらでも落とすことができる。図書館はとつゝの昔にその役目を終えてしまった。今ではまるでお化け屋敷だ。埃を被り、陰気な人の近付かぬ場所になってしまった。雪哉もまた学校へ入学してから一度も足を踏み込んだことがなかつた。

一冊一冊、本を取り出し、正しい順番に並べていく。読まれることのなくなった書物らの埃を取り落とし、再び直す。それでもこの町でも一番大きかつた図書館だったこの場所を一人で全てどうにかできるとは思えない。一日では明らかに無理だつた。最初の一時間ほどは眞面目に取り組んでいた雪哉も気がつけば机の埃を綺麗にしそこに座りこんで携帯電話のディスプレイを眺めていた。

「こんなの一人が出来るわけがないだろ?」

本の量や、部屋の広さから一人で綺麗に出来るわけがない雪哉は椅子に座り込んで恨み言を呟いた。しかし自分のした行為の大きさを考えればこれで済んだのなら安いものなのかもしれない。自分が暴力を振るつたことに変わりない。自分のした行為に後悔はないけれども。

「はあ……」

どれだけ嘆息を撒き散らしても、状況が一変するわけがない。さつさと掃除を始めたことにした。ここで腐つても何も始まらないのだから。

「雪哉くん、なにやつてるんですか？ こんな一人でやつて終わるわけないじゃありませんか。そんなのはやめて、一緒に喋りしませんかい？」

「……！」

「いつ、そこにいた？」

椅子から立つと、それはそこにいた。

「先生、まるで次元跳躍したみたいに現れるのはやめてくれないか？」

「そんなおもしろい」としてないですよ、オラチンはちゃんと入口から、階段を上がって、雪哉くんの前に座つただけだよお？

そんなわけないがあるか。

老朽化した玄関の入口は錆付いて金属が擦れるような厭な音がするはずだ。そんな音もせずにやつて来た。しかも自分の前に立つているのなら視界に入つて当然のはずなのに、瞬きした後に現象のように唐突に出現した。それが普通なら、相当この世界はファンタジーだ。

そんな普通ではない現れ方をした男は、瀧乃曜嗣たきのようしだった。

カードのような束を何度もシャツフルし、かき混ぜた後に古びた机の上に並べている。雪哉はそれを黙つて見ていることしか出来なかつた。曜嗣はタロットカードを机の上に並べ、一枚だけその中の中伏せられたカードを捲る。そこには足を縛られ逆さに吊るされた男が記された絵柄のカードが雪哉の目に映つた。

「雪哉くんは今の試練の時なのですよ、耐えなさい。ずっと耐えてなさい。いかが良い方向に変わるためにも」

「はあ……」

雪哉はタロットカードの絵柄が複数あることは知つてゐるが、一枚一枚に込められた意味まではさすがに知らない。試練だの耐えろだの言わてもピンと来ない。相手にするのも面倒なので雪哉は瀧乃を放置して本棚に向かつ。

「いいんですか？ もう一時間目始まつてますけど」

「なにそれ皮肉う？ オラチンただの校務員。先生って呼ばれてるけど授業とかしないから、そこそこ勘違いしないでよね」

皮肉だ。雪哉は心の中で吐き捨てるように言った。

瀧乃曜嗣。雪哉の通う学校の校務員を務めている。先生と呼ばれる所以は単純に白衣を常を羽織っているだけの理由で、生徒らが勝手につけたあだ名でしかない。それでも担当教師が突然休んだ場合の穴埋めとして曜嗣が教壇に立つことがある。しかも全科目可能。

どの授業でも教えることが出来る辺りは博学多才であるといえよう。

しかしそんな博識な曜嗣に雪哉が頭が上がらない理由があった。

「今年であいつが死んで六年目があ、お空の向こうでもいろいろ難しいこと言つてそうだ」

「……そうですかね」

雪哉の父と曜嗣は古い友人だったそうだ。

あの六年前の事故で両親を失った时任兄妹を引き取ってくれたのは、この胡散臭い白衣の男だつたのである。とはいっても放任され、それ以上のことはしてくれなかつた。それでも雪哉は恩人である曜嗣にいつか恩を返そうと思つてゐる。この人がいなければ、今頃どうなつていたかなんて考へるだけでもおぞましい。そんなこともあつてか感謝するだけでは返しきれない借りを作つた雪哉は曜嗣の前ではいつものような調子で話すこともできないというわけだ。

「随分、変わっちゃつたね」

「はい？」

「雪哉くんと理愛ちゃん、理愛ちゃんは不思議結晶が見つかちゃつて色々あつたんぢやない？」

「それは

無いと、言い切れなかつた。

理愛の身体の中に種晶があると知つたその日から、まだ一ヶ月も経つていなければ、これまで変わらずに一定を保つていた日常が、いとも簡単に崩れてしまつたから。本当に、一瞬の出来事のように、たつた一つ違ひがあるだけで現実が離れてしまう。

「まあ、それせわつと理髪ちゃん溢み聞きは感心しないぞー。つてか授業サボつていじつなどいに来るのはもつともーつと感心しませんなあ」

十一

図書館を支える柱の一つに向かつて曜嗣が声を上げた。

するとそんな柱の向こうから小さな影が見え、理愛が転がり込んできた。雪哉は顔に手を当てて、肩を落とした。何をやっているんだ。曜嗣の言つた通り、今は授業中だ。学生としての仕事である学業を疎かにして、図書館に潜入している妹を見て雪哉は呆れてしまつた。

「理愛」

「それは嬉しいが授業はどうした？」

「そ、その、えーっと、お、おなかが痛くなつたつて……」

どう見ても頭を押さえている。それだと腹痛ではなく頭痛だ。寧ろそんなジェスチャーをしている理愛を見て、雪哉の頭が痛くなつた。

「もう、ダメだなあ理愛ちゃんは。お兄ちゃんのことになつたらイケないことも平然としちゃうんだね」

「でも兄さんわたしのせいでも……」ん
なことになつたから

一氣にするな理愛 僕はあいこの言葉が譲せないからこそ、じただけ
で何も後悔はない。だから授業を受けて來い

新編 金瓶梅 卷之三

羅翫はこいつのふうにせりしに笑みを浮かべて椅子を引く。そこに座れという意味だろう。理愛はそのままその椅子に座る。雪哉

「このダメダメ兄妹。仕方ない、理愛ちゃんは後でオラチンが誤魔化しどとか。まつ、いつかな。これの方が話しがしやすいだろうし」

そうして曜嗣は一人納得し、ポケットから小さな封筒を一つ取り出す。

そのまま投げ捨てるよつにして、机の上に滑らせた。それを無言のまま指差し、理愛と雪哉はその封筒まじまじと見つめる。開けるということなのだろうか。雪哉はその封筒を手に取り、ゆっくりと封を開く。

「なんだこれは？」

封筒の中には『Ark』と記されており、そこに理愛の種晶を研究したいという文章を長々と小難しい言い回しで書かれている内容の手紙が入っていた。

「保護者はオラチンだしね、オラチン宛てで来たんだあ。なんでも理愛ちゃんの種晶とやらは他とは違うらしいんだよね。それを『Ark』が直々に研究の為に招待してくれたってわけだ」

Ark 六年前のあの日、結晶が降り注いだ夜、人が異能という新たな才能に目覚めるという世界が構築された日、突然、その名前を翳し現れた。種晶を研究し、様々な能力を発掘し、種晶というものをたつた六年で世界の一部に組み込んだ巨大な組織である。そんな常識を遥かに超越した叡智を人間の科学で調査できたのは奇跡だが、この組織はそれをやつてのけた。

もはやこの世界のブランドの一つといつてもいいだろつ。種晶に関するではシェア100%。種晶を検査する為の装置もこの『Ark』が開発したものだ。犯罪に手を染める有能力者たちを捕らえる為の戦闘に特化した軍隊のような集団も『Ark』内部には存在する。能力による暴力が世界を跋扈しない理由は『Ark』の活動の賜物だそうだ。確かに、能力を行使すれば過去の警察や自衛隊など無力だらう。

そんな有能力者が能力を使い、世界を支えることのできる万能の力を開発する為に日夜動きを見せてているのだが、組織自体は公にされておらず、どういった研究をしているのかは一般の人間が知ることはない。

そんな謎の組織が、理愛の種晶に注目している。当然、研究に協力すればそれ相応の報酬が用意されているそうなのだが、そこまで雪哉は読んでいなかつた。ただ理愛を自分らの研究の為だけに利用しようとするその考えが気に入らなかつた。

「ふざけてるのか？ 理愛はなんだ？ ここからすれば理愛はモルモットだと言つているようなものだらう？」

雪哉の口調が荒々しいものに変わつていた。今にも便箋を引き裂いてしまいそうな剣幕だつた。それでも曜嗣はふざけたような顔をして、

「でも、選ぶのは理愛ちゃんだ。つてことで理愛ちゃん、どうする？」

「嫌に決まつてるでしょ」

即答だつた。

全くの他人に身体を調べられるなんてどうかしてる。あつぱりと拒否した理愛を見て曜嗣は笑う。

そしてその封筒を丸いと搔つ攫つて、ぐちやぐちやに丸めて「!!」箱に捨てる。

「この話はおしまーい」

そして指差し、

「行きなよ」

「いや、何言つてるんですか……まだ授業終わつてな」

雪哉はどうでもいいが、理愛はまだ授業がある。だが曜嗣は首を横に振る。

「理愛ちゃんも授業サボつてこんなところ来たから同罪。帰つて大人しくしててね

理愛は反論せずに素直に頷いた。

「同罪つて……」

「雪哉くん、罪に大きいも小さいもないのだ。悪いことをした人は平等に裁く。それがオラチンのポリシー、おつけですか？」

雪哉も何も言わなくなつた。

曜嗣は何を言つても無駄なのだ。この男は自分の世界を中心に事を進めるから、雪哉がどれだけ奔走したところで何も変えられないのだ。

「でも、俺は図書館の掃除をしろって

「意味ないよ。ないない。なあんにも、ないよ。ないんちい。ちよつとしたオラチンからの罰だねこりや」

久々だろう、あんぐりとしたまま目も口も開けっぴろげて馬鹿っぽい表情をしたのは、だがそうなるのも無理はない。罰として掃除をしろと言わされたから言われた通りしてみれば、一時間も経たない内に終了した。

「さつきも言つたでしょ？ 一人でこんな終わるわけないっしょお？」

「そりや そりや かもしけないが……」

「はい、じゃあさつさと早退。雪哉くんは暴力沙汰起こしたことは変わりないから一週間ほど謹慎の方向で」

「謀つたな」

図書館の掃除なんて、最初からわせる気がなかつたのだ。

それでも、理愛に宛てられた手紙を見せる為の口実だと良い方に考えたから、まだそれほど怒りが沸かなかつたのかもしれない。

「その通り！ 今更気づいても遅すぎ、遅すぎすぎ！ 残念でしたあまた来週う！」

「……酷い人だ、仕方ない理愛……帰るぞ」

「え、ええ……すぐ帰ることになるとは思いませんでしたけど」

「仕方がない、俺もお前も規則を破つたのだ。罪は償わねばな」

「そう、ですね」

登校して一時間で下校だなんてふざけてる。

しかし、悪いことをしたことに変わりはない。

雪哉はこれ以上文句を言つことはなく、曜嗣に挨拶し帰ろうとした。

「雪哉くん、じめん。さつきのタロットカードの占いなんだけどさ」

「はい？」

出て行こうとした時、いきなり呼び止められてつい氣の抜けた返事を曜嗣にしてしまった。すると曜嗣はカードを見せながら、「逆位置だわ、ごめんねえ」

吊るされていた男の絵柄を逆に持てば、まるで重力に逆らつているように宙に浮いているように見えた。だが正位置であろうが逆位置であろうがどのような違いがあるのかわかつていらない雪哉にとつては曜嗣に謝られたとしてもどう反応していいのか困るだけだ。

「あの、帰つていいですか？」

「ああ、そうだね。帰れって言つて呼び止めるのも悪いよね、オラチン失態い！　じゃあね、ばいばーい、一生ばいばーい！」

「……そつなつたらどれだけ楽か」

と、出ると同時に雪哉は憎まれ口を叩き、図書館を出た。

雪哉らが図書館を後にすると、図書館全体に静寂が漂い、曜嗣は一人になる。そして鎧付いたパイプ椅子にどっしりと腰掛け机に足を乗せて座る。胸ポケットから煙草を取り出したが中身は空だつた。残念そうに溜息を吐き、その空箱を握り潰し胸ポケットに戻す。眼鏡の位置を正し、天井を見上げた。

「全く、家族揃つて戦いたがるかね……『^{ときどり}时任』の姓が付くヤツは本当に救いようがない」

椅子にもたれ天井を見つめる曜嗣は呆れているように見えた。だが、その口元は歪み、悦に漫るように妖しく微笑んでいた。

「まつ、見守りますか。どうなるかね、無能力者が全能結晶にどう立ち向かうか、おもしろいじゃない。これ異能バトルモンだと熱いところだらしが、もうすぐなんだろうなあ。もつすぐ始まるんだろうなあ」

そして、曜嗣は誰もいない図書館で一人子供のようにはしゃいでいた。

「なあ、时任。お前の息子なら、お前の願いを叶えるかもな？」
誰もいないはずの空間の中で一人、曜嗣は呟く。

うがひき返事が返ってないことはなかつた。

1 - 10 全能結晶の無能力者（1）

1 - 10 全能結晶の無能力者（1）

「本当に瀧乃さんは酷い人です」

午前の通学路、制服を着た生徒が歩いているわけがなく、たつた一人。そんな道を时任兄妹が歩いている。

雪哉の横で理愛は不満げに曜嗣を非難していた。だが曜嗣のしたことは当然のことであると雪哉は自分の良心を咎め、曜嗣の言つ通りに家に帰るのだけだった。

「先生は俺らのこと思つてしてくれたんだ。それ以上、誰ののはやめろ」

「先生、先生つて、家にも殆ど帰つて来ないあの放任さんのことを見つて言つことをやめてください兄さん」

雪哉は曜嗣のことを先生と呼んでいる。

これは引き取られてからずっと曜嗣が雪哉にそう呼べと強要していたせいか、もう癖のようになつていて。だから雪哉は学校以外でも曜嗣のことを先生と呼んでしまう。治したいのだが、六年もそう呼ばれて続けたのだ。今更、この癖を治療することは不可能に近いだろう。

「先生は俺たちの恩人だろ？ そんな言い方はないだろ？」

「それは、そうですけど……」

雪哉の説得に理愛は不満はあるが、一応は納得してくれた。

確かに曜嗣は両親を喪つたあの日から保護者として二人を迎えてくれたが、何かしてくれたといえばそれだけだ。兄妹を常に放任してただ生活の支援をしてくれただけに過ぎない。でもそれが普通だろう。全くの赤の他人であった曜嗣と邂逅を果たすなんて、両親が生きていればきっとなかつたはずだ。

だからこそそんな雪哉や理愛にとつては何の接点もなかつた曜嗣

が嫌な顔一つせずに、二人を引き取つてくれたことだけは本当に感謝しているのだ。

「なんで来たんだ」

それはともかく雪哉には問い合わせなくてはいけないことがある。立ち止まり雪哉は静かなに怒りの火を灯し、理愛を見詰めた。

「お陰でお前まで俺と同じになってしまった」

「そんなの、兄さんがわたしのためにしてくれたことで兄さんだけ裁かれるわけにはいかないでしょう」

確かに雪哉の暴力行為は理愛のために行つたことだが、それで理愛まで同じように一週間の自宅謹慎になつてしまつては意味がない。しかし事実こうなつてしまつた。

雪哉も考えが甘かつた。たとえ肉親であつても他人は他人。自分以外の心の中など見えるはずもなく、読めるわけもなく、それでも雪哉は理愛のことがわかる。自分と同じように動くのだ。まるで合わせ鏡の対なる方。自分が動けば、理愛も動く。そんなことずっと前からわかっていたのに。

「はあ、入学して早々に裁かれてどうする。周囲も氣になるだらう？」

「なるなら勝手にしてればいいです。わたしには関係ないです」「そして周囲の目を気にせず、独りで行動しようとするのも相変わらず。

どうにかして少しでも周りに溶け込めるようにして欲しいのだが、どうしてもそれだけは叶わないようだ。どうすればいいのかもわからず、改善策も見つからないままここまで来てしまつたのは兄の責任だろうか。

「そんなことより、なんなんですかあの男……わたしならいぞ知らず、兄さんのことまで……なんて、下品な男」

理愛の目が鋭く、その瞳には憎悪にも近い黒い感情が籠められていた。

そんな顔はしないで欲しいと雪哉は思つたが、それを口にするこ

とはできなかつた。何故なら雪哉もまた同じような顔で月下旬弓を睨んでいたのだから。

「能力者って、そんなに偉いんですか？」

「世界がそうさせたんだ、仕方がないことだらう」「そう

仕方がないことだ。

それは誰が決めた理か。もし神がそうしたのなら、横っ面を全身全靈を籠めて殴つてやりたい程だ。そんな世界になつたせいで、誰もが異常を受け入れている。それでもこの世界では能力を持つ者こそが特別で、偉い。

そんな世界を雪哉は受け入れていない。

能力が無いことを悲しんでいるわけではない。ただ、どうしてそんな差別的な世界が生まれたのかを考察し続ける内に、いつしかこの世界自体が間違っているのだと思つてしまつたからだ。

「何がおかしいのかわかりません。能力が有つても無くとも、いいじゃないですか」

そしてそんな雪哉の横で理愛は不満を並べ、世界を蔑んでいた。何も無い兄を侮辱する世界に対し怒りを抱いてくれるのは兄としてはありがたい。

でも、雪哉だけが能力を持たない低脳なのがといえばそうじゃない。

「理愛、この世界は一つに分けられているのは知つてるな？」

「え、ええ……有能と無能ですよね」

「そうだ。俺は無能だ。それを笑うのは有能だけだ。無能は一緒に笑えない。なぜだ？」

「……笑うことは、自分を笑うことと同じ、だから

「さすが俺の妹だ。なら、納得できるな？」

「…………できません」

「どうして？」

「兄が笑われてるのを我慢できる妹なんていません」

刹那、時間が止まつたような

「ありがとう」

でも、すぐにその停止は再生され、雪哉はすかさず感謝した。
理愛は怒りを露わにし、そんな憤りを見せる理愛を見て雪哉は思つた。

幸せだと。

自分が笑い者になつてゐるといふのに、そんな兄が無様に妹の前で恥辱を受けてゐるのに、それに怒りを抱き、ギュッと手を握つてくれる理愛。兄としての株価は窮屈的なまでに暴落しているというのに、捨て置けばいいのに、それをしようとする。

だから雪哉は思った、主人公にもなることなどあり得ない分際でありながら、もし自分が主人公ならばなんて絵空事を描いた上で呟く言葉　「負けるものか」 そつ、小さく、強く

それでも終わりが始まろうとしている。

それは日常が終わる道標。

いや、それはもしかしたら狼煙だつたか。

歩行者用の信号が赤になり、一人は歩くことを止め、ジット前を見つめていた。

何台もの車が通り過ぎる中、雪哉はどうしてそんなことをしたのかもわからなかつた。自分がどうして理愛を突き飛ばしたのか。

雪哉の強襲に理愛は転ぶ。

しかし、理愛は無事だつた。理愛は、無事だつた。

「ごふつ……」

喉奥から真っ赤な血流が逆流し、地面を鮮血で染める。

雪哉の右腹から抉るに不可視が貫く。

膝が地に着き、前のめりでゆつくりと倒れる。

何か、そう何かが腹部を貫通したのだけはわかつた。痛みは無か

つた。しかしそれと同時に雪哉の身体は容易く蹂躪され、生の権利を剥奪されたかのように、そのまま一切の行動を停止させた。

それでも残りわずかな余力を振り絞り顔を見上げた。

理愛が泣いている。

やめろ、泣くな、泣かないでいい、どうして、そんな顔が見たくないから

小さな手と制服は血で滲んでいる。

それでも、それでも雪哉はそれ以上理愛の顔を見るることはできなかつた。

小さな理愛の身体の合間から見えた、敵影。

「悪いな、时任。お前さ、邪魔なんだわ。だからよ、そこで死んでるや」

口元が動いていた。

遠くで小さく咳いでいるのはわかるが雪哉の耳に届くはずがない。そして小さな道路の向こう側、信号は赤から青へ。その影は消えていく。だが、はつきりとわかった。完全に雪哉と理愛を狙っていた。理愛は無事だった。涙を流して雪哉の身体に触れる様子を見ていると大丈夫そうだ。それがわかつただけでも僥倖だ。

「月下、雨、弓い……！」

だが、それでも怨嗟は消えない。

呪詛を込めたように、振り絞りその名を呼んだ。道路の向こう側に、雨弓が消えていく後ろ姿が見える。だが理愛は気づかない。主犯が前方にいることよりも、兄が凶弾で倒れたということで頭の中が真っ白にされてしまったのだ。

声が出ない。

逃げる。俺を置いてさつさと逃げる。
けれどその言葉は届かない。

声が出ないのなら、届くわけがない。
意識が朦朧とする。死ぬ？ 死ぬのは怖い。死にたくない。雪哉

は懇願する。それでもやはりそこで何かが覚醒するわけもなく、都

合よく傷が癒えるわけもなく、いつものように設定で塗り固めた自分がどこへ行つた。ただ出来たことは理愛の腕を強く握るだけだった。

死ぬのは、怖い。

でも、でも、理愛を一人にしてしまうことが、もつと怖い。
そんな切望する雪哉を無視し、視界は闇黒に塗り潰される。

そして雪哉の意識が途絶えたと同時に、終にこの無駄に長いだけだった序章の終極が始まるのである。

1 - 1 - 1 全能結晶の無能力者（2）

1 - 1 - 1 全能結晶の無能力者（2）

それは奇跡と呼ぶことだけは、了承するだろ。」

雪哉の眠る病室に備え付けられた椅子に座り理愛はそう思つた。あれから丁度、一週間が経過したことになる。

曜嗣に言われた謹慎の期限の最終日だ。

だが、そんなことよりも肝心の雪哉が目を覚まさないのでは意味がない。

雪哉が倒れた日、何があった？

理愛は雪哉に押し倒され何をするのだと文句を言おうとしたら、血を吐いて倒れた。

最初、吐血したものだから何事かと思つたが、腹部からも出血していた。原因はその腹部の傷であり、鋭利な何かを突き刺したような痕があつたそうだ。それが何かはわからなかつた。

凶器は見つからず、雪哉が倒れたあの時、信号の前で立ち止まつたとき車が通り過ぎただけで、そもそも朝の十時以降、平日で人気は疎らだつた。雪哉に近付いて襲い掛かった人影などどこにもなかつた。

だから、そんな雪哉にいきなり致命的な一撃を「与える方法は一つしかない。

それは「能力」でしか不可能だ。

理愛は思った。あの時、いきなり自分を押したのは底う為のものだつた。

そして雪哉は倒れた。

意識はあるが目を覚まさないだけだ。

どうしてこんなことになってしまったのだろう。いつも通り毎日
くて堪らなかつた。

ふと、考えが過ぎる。

理愛の身体に「種晶」^{シード}なんていう不可思議が発見されてからだ。
わけのわからない輩に襲われ、拳勺には自分も壊れたように戦い出
し、やがて兄が負傷し、倒れた。

もしも自分の身体の中にこんなものが見つかならなかつたら、こん
なことにはならなかつたんじやなかつたのかつて

そんなことを考えるだけで、胸を何かが込み上げていく。それは
嘔吐感だけではなく、負の感情も一緒だつた。

眠りから覚めぬ兄の前で、理愛は涙の粒が落ちる。
それだけは言つてはいけなかつたのに。

それだけを言わぬために戦つたはずなのに。
なのに、

「兄さん、わたし、いない方が、いいの、かなあ……」
そんな心にも無いことを言つてしまつ自分が憎かつた。

「わたし、こんなことなら死んだ方が、いいのかも」

そんな出来もしないことを口走つてしまつ自分が憎たらしかつた。
これは事実を知つて一番最初に思つたことだつた。

兄とは違つ。

異能とやらを手にする権利。

兄には無い権利。

そんなものいらないのに、押し付けられた力。
いらない。

そんなものは、いらない。

だから、わたしも、いらない。

理愛はそう思つてしまつたのだ。

だけど、その言葉は

「そうか、なら死ね」

だけど、そんな自分自身を恨む理愛を叱り付けるより、雪哉は閉じたままだつたはずの田蓋を開き、そう叫んだのだった。

「死にたいのなら、死ね。止めはしない」

「そんな、兄さん……」

目を覚ました雪哉を見て驚愕し、理愛の震えが更に強くなる。

「死にたいなどと、ふざけたことを」

雪哉は身体を横に向けて、窓の方を見つめる。理愛の顔を見ないようにして、

「死ぬなら勝手に死ねばいい。だが、お前が死んだら俺もすぐに死ぬぞ。どうして独りにされなければいけない。俺は嫌だぞ。孤独を選ぶなら死んででもお前を追いかける」

それが、雪哉の願いだ。

孤独が雪哉の死に直結している。

あの日、全て消失した夜。雪哉の側にいたのは理愛だけだった。だから理愛まで失えば、どうなるか。兄妹という関係を超えているのかもしれない。それでも雪哉にとつては半身に近い。

だから、理愛の消失は雪哉自身の消滅に他ならない。

「ごめんなさい、わたしどうかしてました……ははっ、ちょっと風にでも当たりますね」

田蓋に溜まる涙を拭つて、作り笑顔をしたまま理愛は病室を飛び出した。雪哉はそんな小さな理愛の背中を黙つて見て居ることしかできなかつた。それでも、自分のいつた言葉に嘘偽りは無い。本当に、理愛が目の前から消えて無くなつたら、きっと自分も同じようにな消えて無くなるはずだらうから。それだけは本当だから。

雪哉の田覚めと言葉に理愛自身の感情が滅茶苦茶に搔き回され、理愛は病室から逃亡するように飛び出した。病室の扉にもたれて、小さく溜息。たつた一枚の扉の向こうに兄がいるはずなのに、こん

な扉が今は頑丈で強固な開かずの扉のように感じられて、理愛はその扉をもう一度開いて、雪哉の元へ向かうことができなかつた。自分から逃げ出しておいて、卑怯者だと思うだけで余計に辛くなつた。あれだけ自分から消えていなくなつてしまいたいなんて馬鹿げたことを抜かしておきながら、雪哉の言葉を聞いて舞い上がりてしまつた自分が情けない。

だからこの逃亡は自分を戒める為にしたことだ。あのままいればきっと泣き出して感謝し、雪哉に抱きついていたとさえ思つ。それまでに雪哉の言葉が嬉しくて堪らなかつたから。

だけど、本当に済んでしまいたいなどと、そんなことを思つてしまつたことは最低である。そんな最悪を抱いた自分に対する罰なのだ。これ以上、兄の前にいはいけない。

結局は、慰められたかつただけなのかもしれない。

「」の一週間、家には殆ど帰らずに雪哉の病室にいた。どうして血を吐き倒れたのかその原因などに微塵の興味も持たず、ただこのまま雪哉が永遠と田を覚まさぬままならどうしようとだけ思つていた。もしとうならどうすれば……きっと、同じように田覚めることのないよう自分を傷つけていたかもしれない。

本当に、兄妹揃つて愚か。この兄妹は純粹故にどこか、壊れている。

どれだけの悲しみが待つていたとしても一人ならば、なんて思つてる。

だけど、

「ここかあ？ 死に損ないが寝てる病室はよ？」

理愛の田の前に用下痢」、そして虹子が立つてゐる」とこ氣がついた。

そしてそれまでの悲哀を投げ捨てて、感情を憎悪に切り替える。こんなところに何をしに来たなんて、もっとも見たくない顔を見せ

られればそう思うのも無理はない。

だがそんな怨恨を前に、厭らしく笑う雨引が理愛の前に立つ。明らかな身長差、理愛は見上げなければその憎たらしい表情を窺うことすら叶わないだろう。雨引は理愛を見ることなく雪哉のいる病室に入ろうとした。だが理愛は扉を守護するようにその矮躯で立ち塞がり、月下兄妹の侵入を許さない。

「だけよ、今はお前に用はねえ」

「どきません」

雨引の敵意に動じることなく手を広げて、その場から動こうしない。

「何しに来たんですか」

「そっちこそ……」
「うつちからの誘い、断つたろ？」

「何のことですか？」

雨引は封筒を取り出し、理愛に渡す。

理愛はそんな雨引の手に触れたくもないのか、封筒の端を摘要みで汚物にでも触れたような酷い顔をしてその封筒を奪つよう取つた。

そしてその内容を見れば、それは朝に曜嗣が見せてくれた「Ark」からのものと一言一句同じ内容のものだった。

「どうして……」

「そりやオレらがそれの一員だから。『査定局』^{イグザミナ}って言つてもわからんだろうけどな、オレらはお前のいつか開花する能力に期待している。だから、その手紙を送つたんだけどな」

査定局　「Ark」の中にある組織の一つであり、主に戦闘に特化した集団である。いつかいつこの世界に能力を持つ人間の犯罪を取り締まっている組織と言つていいいだろう。そしてそれはただ暴力から人々を守るだけでなく、高い能力を持った、または新しい能力を手に入れる可能性のある人間を選定し、協力を要請することもしている。協力などと、人間を研究する時点でそれはきっと間違っているのだけれど。

そんな名前を出されても理愛は知らない。雪哉と同じように世界を真つ直ぐに見ていない理愛にとって「Arck」も「査定局」も気に掛けず生きてきたのだから。

「わたしはアナタたちに協力する気は、ないです。だから……とつと帰つてください。わたしにも、兄にも近付かないでください」そのまま手紙を雨引に押し付け、背中を向ける。

そんな理愛を見て雨引は鼻で笑い、虹子は黙つたままけれど薄気味悪く口元を歪める。

「理愛、そんなに兄アレが大事?」

理愛の背中に冷笑した虹子が問う。

くだらない。

理愛は舌を打ち、キツと虹子を睨む。

しかしそんな虹子は理愛の前に立ち、凝視していた。黄色の瞳が紫色に変わり滲み出す。多彩なその瞳はまるで虹子の感情そのものだった。氣味の悪いその瞳で見つめられる度に重圧を掛けられたかのように理愛の身体は硬直する。

「邪魔だよね、ホント。そいつがいなかつたら……理愛だって、すぐには「こっち」にこられたのに」

「ふざけたことを、言わないでください」

続けて挑発する虹子に畏縮していたはずに理愛の瞳に光が灯り、銀の眼差しで反撃する。

刃のような煌きを放つ瞳が虹子を呑み込む。

ああ

理愛はわかつてしまつた。

もう、戦闘は開始されている。

やり方こそ違うけれど、戦いはもう始まつていたのだ。兄が、穿たれたあの日から。

「理愛、私はね、理愛にもつと知つてもらいたいんだ。自分のこと。だからさ、」

虹子は手を差し出す。

それは誘つようにして悪魔は囁く。

「一緒に行こうよ、もつと楽しくなる。世界が輝くはず。兄のこと
は忘れなよ。再三言いつね。理愛、キミはもう兄と同じ未来を進めな
い」

未来はすでに決定している。

能力を持たぬ兄と能力を持つ妹。

能力こそわからないが、それでも確実に無能な者以上のモノを理
愛は手に入れている。

あとはどう考え、どう動くかだけで更なる能力が解放される。

どうして他人が未来を決めることができるのだろう。

理愛にはどうしてもそれだけが理解できなかつた。

「私は理愛に来て欲しいな。これ以上、理愛のお兄さんが傷つくの
見たくないならそうした方がいい。傷つくならまだいいけど、で
も傷だけじゃ済まなくなつたら？」

少しだけ屈んで、虹子は見上げるように理愛を見つめる。理愛は
声を出すことができなかつた。

「兄さんが、倒れたのは……」

「おお、オレがやつた。ノーコンなんだわオレ。でも、まあ、運よ
かつたな。もし頭にでも当たつてたらそれこそお釈迦だつたらうに。
運いいなアイツ」

事実を知り、理愛はただ下唇を噛み締めることしかできなかつた。
赤く染まり、唇が切れてしまつ程に噛み締めることしか。

敵。

この兄妹は敵だ。

それでも、

「アナタたちについて行けば

理愛は選択をする。

ゆづくじと頭の中で考えをまとめ、一つ一つ言葉を選んでいく。

「兄さんはもう、手を、出しませんか？」

その言葉を聞いて、

「「もちろん」」

一人は声を揃えてそう言った。

「わかり、ました」

理愛は深々と頭を下げる。

「それじゃあ理愛、早速だけど場所を変えたいんだけどいいかな？」「え、ええ……その前に、兄さんに声を掛けてからでも、いいですか？」

そんな理愛の切実な願いを前に、虹子と雨弓は顔を見合させて、「いいよ、お別れしてきなよ」

虹子がそう言った。

「おー、オレら先に行くからよ……番号教えろや」

雨弓が携帯電話を開き、そこに電話番号が表示される。

他人に番号を教えるのは気が引けたが、理愛は渋々自分の番号を表示して雨弓に教えた。雨弓もまた自分の携帯電話の画面に表示された電話番号を理愛に見せてくる。それをさつやと登録して、ポケットに直した。

今はそんなことより兄の元へ戻りたい。

雨弓が理愛の番号を登録したことがわかると、理愛は再び頭を下げ、すぐに兄のいる病室に戻る。

後ろから一人の声が聞こえたが無視した。あれほどもう兄の病室に戻ることは出来ないなんて言っておきながら、もう兄の元へ戻るなんて腑抜けもいいところだ。

やつぱり、雪哉がいないと駄目だ。

理愛はそう思つた。そう思つたからこそ、理愛は決意していた。

「兄さん、わたし帰りますね」

「そうか、気をつけてな」

突然帰るという妹を前にそこは少しでも寂しそうな仕草なりなり見せて欲しかったが、雪哉にそんなことを求めるのは酷なことだろうと理愛は納得し、病室を出ようとする。長くいればそれだけで迷うから。きっと助けを求めてしまったから。今から単身で敵地に赴くなんてとてもじやないが言えなかつた。

「じゃ、じゃあね兄さん

「理愛」

その場から逃げようとした理愛に雪哉は声をかける。

立ち止まるな、早く立ち去れ。それが出来ない。

「さっき病室の前で誰と話してた？」

「だ、誰と？ わたしが？ わたし、風に当たつてぐるつて言いましたよね？ ははっ、兄さんおもしろいこと言いますね。わたしは外にいましたよ」

嘘を吐いた。

「そうか？ …… そうなのか？ 扇越しの影は理愛に似ていたのだが

「それならドッペルさん何かですね、ははは」

言葉だけでなく表情まで嘘で塗り固め、自分を偽り続ける。自分に嘘を吐くことはとてもいい気分ではない。心に棘が刺されるような、ただ胸が痛い。大切な兄に嘘を吐く自分を前に、ただ今はとても辛い気持ちでいっぱいだった。

「ドッペル？ ああ、ドッペルゲンガー（自己像幻視体）のことか……ふふっ、理愛よ。お前もまさかそういうことを言つとはな」

雪哉がそうやって笑う度に理愛は自分の中に必死に押し留めている気持ちを止めることができなくなつた。

「わ、わたしだって兄さんの横で変なことばっか言われてたから伝うつちやつたんですよ、バカ……わたしもう行きまますね！」

「そうだな、そうだつたな……すまない

「だから高校生の謝る言葉がすまないってなんですか、ふざけてるんですか……」

最後はやけに自分でも言葉に力が無かつた。

いつもの朝のような会話。そんな会話をしながら学校へ。いつものように夜は一緒に。でも、もうそれもできないなんて。辛い。

「ははっ」

理愛は笑った。それはとても自虐的な笑みだった。自分を隠し、殺し、やるべき事を見つければそれはとても過酷だった。

理愛は自分の親指の爪を噛んだ。

塞き止めた感情が溢れる前に雪哉を見ることなく飛び出す。

「兄さん……さよなら……」

きっと聞こえていないだろ。本当に自分の口から出たのかと疑う程に小さな、小さな声でそう言ったから。そして、理愛は自宅を目指す。場所が変わる。なら、その場所で、全て

だから、これで最期だ。
全て終わらせる為の。

漆黒が世界に宵を落とす。

一人、街路樹を歩く理愛の瞳には銀ではない鈍い色で溢れていた。光が消え、糸の切れた人形のように揺れる。

自宅に到着し、携帯電話を取り出す。そこには兩引の電話番号が記されている。名前を記入せずに登録したので、未登録リストに登録されているが一度と使うことはないのだ。だから修正する必要はない。

集合場所を聞き、「はい」とだけ返し、通話は終了する。受話器のボタンを押した途端、まるで電源を入れたように理愛の瞳に光が灯る。この間、本当に感情の無い機械のように動いていた。そして全てを変える為に、覚悟してやつと理愛は人間味を帯び、目的の為に行動する。

(「ロロス）

理愛は自分の部屋の鏡を見つめたまま、そんなおぞましい一言を心の内で念じる。

もう兄の前で散々、自分を偽ったのだ。自分自身の全て、心までも偽って、全てぬ無しにする為に理愛は笑う。

(「ロロス、ロロスロロスロロスロロス）

外に飛び出す。

獵人の如く、ただ獲物を見つける為だけに生きるようじ、それ以外を全て忘れて。

もうそこにはいつものように可憐で華奢な妹の姿は無く、ただの復讐者に成り下がつた別物が歩いていた。

(兄さん、あいつらロロスね。さっさとロロスよ。兄さんに酷いことをしたアイツらロロスから。そしたらまた前みたいに、いつものようだに、一緒に、一緒にいられるね。だから、ロロスよ。ロロシティヤル）

理愛が最初から敵に身を捧げることなど毛頭無かつた。

いや、それでもここまで歪んだ感情を抱くことは無かつたはずだ。それがここまで理愛の感情を捻じ曲げたのは、月下旬兄妹が雪哉を傷つけたという事実を知ってしまったからだろう。

許せない。

許すわけにはいかない。

世界が変わり出した中でこれ程まで理愛を憤怒させたことは無い。そんな怒りを鎮めるには、殺すしかないのだ。そんな結論に行き着いてしまう時点で充分理愛はおかしくなつていい。

力が、理愛を変えたとするならばきっとそうなのだろう。

そうでなければこんなことするはずがない。異能とやらを手にするかもしれないなんて、そんな権利を得た時から理愛は変わってしまっていたのだ。

変わらないことなんてない、なんて……それこそがあり得ないのだろう。

だから、理愛は敵を抹殺する。罪悪なんでものはそこにはなかつ

た。
そして

1・1・2 全能結晶の無能力者（3）

1・1・2 全能結晶の無能力者（3）

到着した。

敵が待つ場所に、辿り着いた。

理愛と雪哉が通う学校の裏山。

どうしてこんなところに、なんてことは思わなかつた。滾る。感情が強く、湧き上がる。

終わりの刻だ。^{とき}

樹木が密集し、よく目を凝らさなければ月下兄妹を見つけることはできない。二人は樹木の間に立ち、理愛を待つていた。

「待つてたよ、理愛」

虹子がゆっくりと理愛の元に近づいてくる。

その後ろには雨の姿が見える。まだ、まだ動くな。殺意を隠し、平静を装い理愛は一人が攻撃が有効な範囲に近づくまで静止を決め込む。

「突然、電話して来たのは驚いたよ。まさかいきなり能力について調べて欲しいなんて、本当に協力してくれるんだね」

理愛は頷く。

それは嘘。月下兄妹を誘き寄せる為の嘘。

研究とやらがどのように行うものかわからないが、ともかく協力はするがその場合は月下兄妹でなければ協力しないと付け足した。確実に月下兄妹を誘う為に。

ここまで計画通り、ここからが本番だ

「さて、理愛」

まだ遠い。

理愛は目を細め、眉を深めた。

虹子は中々理愛の射程圏内に入つてこない。焦らされているようだ……だがこちらから動いてはいけない。相手は完全な能力者だ。少しでもおかしな行為を見せてしまえば、兄のように倒れるだけだ。そんな焦燥を必死に包み隠す理愛を前に、虹子は今から始まる遊戯を待ち望んでいた子供のように楽しそうに笑みを浮かべ、腹部に手を当てて理愛を見つめた。

「研究を、始めようか。理愛の異能あがねは世界にどうどうするのかを調べよう」

射程圏内に、入つた。

「――！」

同時、

「ほり、始まつたよ。どうする？ どうやって切り抜ける？」

理愛の描いた攻撃有効範囲圏内に入り込んだ途端、影だけが放置され、理愛の鼻に触れる程に近く虹子の顔が見えた。

銀光。

横一直線に薙いだそれが、理愛に襲い掛かる。そんな急襲はなんとか屈み込むことで回避することができた。しかし、それと同時に理愛の視界には雨弓の全身が映り込んだ。

危険。

動け、跳べ、離れる。

ともかく脳が行動しようと駆り立てた。すかさず地面を蹴り上げ跳躍。理愛がいた地面が大きく穿たれる。削れる地面。不可視が理愛を襲い、理愛は動くことを止めない。立ち止まれば、待っているのは確実な死。

「ひょお！ すっげえ、躲かわしたぞ！ 虹子お、こいつすげえな！」

「言つたでしょ。理愛は私と「同じ」なんだから、舐めてかかったら痛い目見るよ」

「そうか、そうか、OKわかった。あんな忍者みてえに動かれちゃさすがにノーハンのまんまじゃ上手く当てねえな、仕方ねえな、

アレ使うか！」

嘲るよに身体を大きく震わせたまま笑い続ける雨「が、上着を捲り、そこから何かを取り出した。理愛は逃げ続け、樹の裏に身を隠す。

「明らか殺そうとしてきた……」

何が研究に協力しろ、だ。

理愛が「殺す」よりも早く虹子が「殺し」に来た。

理愛はもたれる樹を小さく小突き、包丁を取り出す。

前回はカッターナイフだった。威力を向上する為に家にあつたものを利用した。魚を解体する為の出刃包丁をまさか人間を解体する為に使用するなんて雪哉に知られたら何と言われるか、なんてそんなこと兄に知られるわけにはいかないから……、

轟音が響いた。

暴風が通り過ぎ、土に根を張る樹木が吹き飛んだ。そして理愛が隠れていた大木までも、まるで砲弾でも直撃したように木つ端微塵に砕け散る。

「何が……？」

明らかな危機が理愛に襲い掛かっている。

停滞は死だ。逃げなければいけない。でも、どうして？　どうしてこんな破壊を

「避けるよ、时任妹お！　当たると痛いじゃ済まねえぜえ！」

銀と黒の色に染まる銃器を持った雨「が、舌を出して笑いながら引鉄を引く。

その銃口は理愛に向けられていた。理愛はすぐに照準から逃れるように草むらに逃げ込む。通り過ぎた不可視が、生え並ぶ樹木を再び抉り飛ばしていく。

「原型はよお、『S&W M500』って言つんだけじょお…」

引鉄を引く度に周囲がその火力の前に吹き飛ばされていく。

しかし銃口からは硝煙は上がらず、ましてや爆発音すら出せず、無音のまま。だが撃鉄が落ちる音は聞こえる。そして「咄！」の腕は射撃する度にその反動で腕が揺れている。

「見てくれよ、これ。こんな口径の銃なんてよ、漫画みてえに片手で水平に構えちゃってよ！ そんなカツ！」つけて撃つてみろよ！ 肩外れて使いもんにならなくなつちまうんだよなあ！ だからこれはよ、人類が手を出すにはまだ早い代物だよなあ！」

理愛には銃の知識は無い。

だから、それがどれだけの代物なのかはわからない。

やけに長く伸びた銃身も、装弾数も何も理愛が知ることはない。

それでも自分と変わらない高校生がまるで大砲のような歪な形をした銃を片腕で撃ち出すという光景だけは異景であるといふことはわかつた。

「なんなの、アレ……」

忌々しく暴力的なフォルムを見せ付けた兵器を見つめる。
引鉄が引かれれば破壊は繰り返される。

おかしい。

さすがの理愛でもそれはわかつた。

銃というのは弾があつて初めて武器として使用できる。しかしどうだらうか、雨弓は数発撃ち出した後、シリンドラーを見せるだけで、そこには薬莢も何も無い。空っぽだけが見えた。そんな筒を回すだけの行為。それだけで再び暴力が開始される。

「あれが兄貴の能力だよ」

身を隠す理愛の背中に立つ虹子。

気がつき、振り向けば瞳には虹子の持つナイフの刃が見えた。間一髪、避けるが左頬を刃が掠め血が迸る。
「すごおい、今のも躲す？」

「能力、なの？」

「兄貴の？ そうねえ、そうだよ」

「虹子お！ ネタ晴らしすんじゃねえよ！」

耳を劈く破碎音が理愛と虹子の距離を離す。雨弓は虹子がいたにも関わらず、射撃したのだ。だが虹子は恐れることなく理愛から離れていく。それどころか虹子は雨弓の向ける銃口を背に理愛だけを見詰めている。当たれば間違なく死ぬ。怖くないのか。そんなこと聞く気もないけれども。

「时任妹、お前も虹子と同じなら……そろそろ本気出さねえと死ぬぞ？」

「わたしは、そんな

」

戦う為の能力が無い。あつたとしても使い方がわからない今までは、どうしようもない。

使えないのならば、無いのと同じだ。それでも本当に、能力とやらを使わなければ間違いなくこの一人に殺される。殺してやると誓ったはずだ。それなのに何も出来ぬままに無惨に殺されるなんて、それこそ嫌だ。理愛は一人を睨みつけ、隠し持つた包丁を取り出す。逆手に持たれたそれで、敵こそ無惨な肉片に変えてやるのだと。

「あの出来損ないのお兄ちゃんと一緒ににしてやるからよ、そこ動くなよ」

「ふざけたことを

気持ち悪いことを言つた、吐き気がする。だから疾駆する。その口で一度とふざけたことを言えぬように舌を斬り裂いてやる為に。

「私を無視して、兄貴の相手？ 余裕だね、理愛

「どいてください」

逆手のまま振り払つた刃が虹子の刃で受け止められる。

一体一。しかも相手は能力を自由に操れる。その時点で十分、差があるがそれを理由に逃げるわけにはいかない。それに、これだけ隣接していれば雨弓も理愛だけを狙い撃つことは難しいだろう。

「へえ、鶴競り合つて私を盾代わりにするわけだ。エラいね

「アナタの兄の凶弾はこれで届かない」

しかしそんな理愛の言葉を嘲笑うように、虹子の持つ刃に力が籠められていく。離れようとはせず凶刃が理愛の刃と重なっている。

「兄貴、撃つて」

「わかつてる」

躊躇無く、虹子の言葉が撃鉄を落とす。大口径から放たれる不可視が虹子と理愛を襲つた。

妹諸共に平然と撃ち出すなんてどうかしている。だが、鳩尾に虹子の蹴りを受け転ぶことでそれは回避された。

「びっくりした？」

巨大な大木さえも木つ端微塵にする威力だ。その見えぬ力が直撃すれば理愛の身体など粉微塵になることなんて目に見えてる。

しかしそんなことよりも今は転がり、そのまま鳩尾に受けた衝撃と痛覚の前に意識が消えてしまいそうだつた。何度も咳き込み、呼吸を整える。それでも、そんな余裕があるわけもなく。

地面の上を転がる理愛が空を見上げれば、見下ろす虹子が刃を墜落させて来たのだ。

「この……！」

反射した神経が無意識のままに首を振り、それは理愛の額に刃が刺さることはなく地面を突き刺していた。そしてそのままかさず立ち上がり、朦朧としながらも真横に刃を薙ぐ。

「へえ、その状態でここまで出来るのにね……どうして上を目指せないの？」

限界というものが、理愛にわからなかつた。

人より早くは動ける。人より高く飛べる。人より強く戦える。

それでも、常人を相手にした場合でしかない。

目の前にいるのは何だ？ 有能力者だ。目に見えぬ何かを頭の中で作り、まるでプログラムでも構築し、その開発が完了すれば、能力として扱うことができる。それをどうすれば、どのように考えれば組み立てることが出来るのか？ 出来る出来ないが才能の分かれ道だ。

理愛にはそれが出来ない。しかしあつてることがある。何を持つて難しいというのかはわからない。頭の中で能力を構築し、發

動させるなどといわれてもわかるわけがない。だけど、理愛が常人を超える瞬間はいつだって、殺意や覚悟、信念。感情一つでスイッチを入れ替えることが出来るのだけははつきりしている。

「おかしいなあ、第一界層かいそうは確實に踏んでる。だけどそれ以上を曰指せない。何がいけないのかなあ、わからないなあ……」

虹子の言葉の意味は理愛にわかるはずがない。

雪哉のような変な言葉を使うなど理愛は苛立たしく虹子を憎む。「なあ、虹子お……もうつまんねえわ」

倒れたままの理愛を見下ろすのは虹子だけではない。

そう、敵はもう一人いる。雨乃が銃口を理愛の眉間に押し当てる。「これがお前の言つてた『同じ』なら、どうしてお前みてえに『データメ見せてくれねえんだ? こんななんならまだ普通の有能力者と殺り合つてる方がよっぽどいいだろ」「ダメだよ、兄貴。もうちょっとだけ待つて

「もういいだろつて」「もういいだろつて」

「待つて」

虹子の瞳はいつまでも変色を遂げる。そんな色の中でもっとも冷たい氷のような色で雨乃を見据える。兄妹に向ける視線では、なかつた。そんな視線を向けられた雨乃はゆっくり銃口を上げ、理愛から離れていく。

そして虹子はいつものようなふざけたような顔をして、瞳の色が今度は灰色になっていた。

「理愛が選ばれた理由、わかる?」「わからぬ。

もうずっと、わからぬままだ。

何一つわかつたことなんてない。

能力を持つ人間なんて溢れる程に存在する世界で、厳選された理由などわかるはずもない。そもそも自分自身が如何なる能力を持しているのかさえわからぬといいうのに。だから理愛は無言のまま、首を横に振ることしか出来なかつた。

「理愛のその結晶が欲しいの。異能を超えた異能。種晶を超越した、紛い物ではない本当の結晶」

「そんなの……」

「知らないだけ。理愛が、人々が、世界が、知らないだけ。無知は罪だよ。とてつもない力を秘めた結晶を保有しているのに、何も知らないなんて、何もしようとしないなんて」

そんなの勝手じゃないか。理愛は不満げな眼差しを虹子に向ける。たとえ自分の中に秘めた結晶が種晶よりずっと強大な力を持つていたとしても、力を手に入れたとしても、その力を振り翳さなければいけないと誰が決めた。能力があれば、その能力を使わなければいけないのだろうか。否定しろ、しなければいけない。そうしなければ虹子の価値観に呑まれるだけだ。

「つと、まだ抵抗するの？」

地面上に手を置き、身を屈め、逆手に刃。

戦わなければ。

本物であろうが、躰物であろうが、そんなものに興味はない。今はただ、それだけの理由で自分の世界を壊そうとしている敵を倒さなければ。

「いいよ、わかった。わかったよ。来なよ……戦おう。攻撃しなよ。そうしないと、私はずっと理愛を追い続けるから」

その言葉が起爆剤だった。

そうだ、この追跡者を排除しなければ理愛の世界は守れない。だから、全速で駆け抜ける。全力で突き破る。

虹子を殺さなければ、日常は帰つて来ない。

「ああああああああああ！」

躊躇いも、恐怖も誤魔化すように理愛は咆哮し、全ての力を刃に内包した。

その刃は確かに虹子の心臓を狙っていた。

だけど、

「言つたでしよう、上を指さない限り……理愛の世界は変えられ

ないよ？」

刃の先端は、虹子の心臓に届かない。刃先が見えない膜に刺さつていつた。そんな障壁が虹子を守護している。そして、やはり理愛の武器は粉々に砕け散る。

まだ

あの初めての敗北の日。あの時だって、理愛の刃は無常にも微塵になつた。

そして無防備となつた理愛に虹子の裏拳が左肩に直撃した。それと同時に、理愛の身体はまるで車にでも轢かれたみたいに大きく浮いた。錐揉み回転しながら素つ飛び、樹に背中を強く叩き付けられる。同じだ。既視感デジャヴュを見た。何もできず、抵抗は意味を成さず、ただ圧倒的な力の前に寂滅という結末だけを押し付けられる。

そして物理的にも押し付けられた圧迫の力。吹き飛ばされ、踏み潰され、樹木に理愛の身体が埋もれている。頭から血を流し、左肩は上がらない。折れたか、それとも砕けたか。満身創痍もいいところだ。明らかに力の前に支配されている。何もできない。何もやり遂げられない。

「おいおい……虹子お、さすがに死んだだろ、それ」

瞳には光が抜け、ピクピクと血を流し痙攣する理愛を見て、さすがの雨弓も同情しているよう銃口を下ろし、理愛の頭を銃のグリップで小突いている。理愛は、もう動けない。

「はあ……」こんなで終わりなの？ そうなの？」

だが雨弓の声を聞くことなく、虹子は失望したように、さつきまで楽しんでいたはずの玩具で遊ぶのに飽きた子供のように興味を示すことを止めて理愛の骸と変わり果てた身体を見下した。

「理愛、そんなに力が要らないなら頂戴よ。私に頂戴。それでいいの」

理愛はもう声を出すことすら出来なかつた。

動くことも、喋ることも出来ない程に衰弱していた。それでも、虹子の言葉は止まらない。

「欲しいの、私達はね。その理愛の内に秘めた「花晶」をさ

「……れ、花晶？」

「そう、その結晶が選ばれた者の証。でもそれは理愛が選ばれたんじゃない、理愛が、選んだんだけれどね」

そこでやつと瞳に光が灯り出し、理愛は再起動する。

ここでこのまま落ちてはいけない。

自分のことがわからない。それなのに他人が知っているなんてふざけてる。

新しい言葉を聞き、その意味を知るまではまだ終われない。

そう、終われない。

理愛は立ち上がる。まだ何も知っていない。まだ何も果たせていない。

だから、理愛は、

「おいおい、ゾンビがこいつは？」

ダラリと腕を垂らし、口元からは涎と血を滴り落とし、弱い銀の光を灯した瞳で月下兄妹を一瞥する。

「お前にわたしの何がワカル」

「おっ？ なになに？」

原理なんてわからない。どうすればいいのかなんて知っているわけもない。

それでも、戦うのだけは止めてはいけない。

胸が痛い。心臓に棘が刺さっているように、胸が苦しい。

肩が痛い。砕けた肩はもう使えない。だから、どうした。まだ右腕がある。腕一本あれば、いや、生きていれば何度だって、幾度となく、終わりなく戦い続けることが出来る。

「わたしの中の結晶、そんなの知らない。知りたくない」

血を流しながら。猛禽類のような獰猛な瞳で虹子を見し、胸を押さえる。頭の中で何かが浮かび上がる。輪郭は浮かび上がつて形が不確定で、それが何かはわからない。

でも、はっきりと理愛の頭の中で構成されている。これが能力な

のか、と理愛は笑う。

銀の瞳が発光し、銀の髪もまた光を放ち、大気が揺れたような気がした。異常を孕み続ける理愛を前に虹子は高揚し、はしゃぎ出す。この時を待ち侘びていたように、大きく手を広げて笑っている。

「やつとかあ、やつとなのお、理愛！ はやく、はやくはやくはやく、はやくう！ その異能を見せてよお！」

銀の光を纏う理愛に狂喜する虹子。

そして理愛はただ手を翳し、力を放出する。

「……え、？」

だが、力が顕現することはなかつた。光が具現することはなかつた。

情けない声を上げて、理愛は棒立ちのまま手を下ろした。力強く溢れていた光は電池切れを起こした懐中電灯のように、もう一度と光り輝くことはなかつた。

「ははつ、虹子よ、やつぱこいつも無能力者なんだつてよ、あの出来損ないで土下座しかできねえ口だけ时任の妹だぜ？ 所詮、力を使う権利を得られても、肝心の力は使いきれない。わかりやすくていいじやねえか、こういうのはクズつて言つんだぜ」

能力が、発動しない。

理愛の手が震える。どうして？ もうあと一步だったのに、きっとその銀の光が外出すれば目先の敵を屠ることなど容易なはずだつたのに、それなの光を出すことしかできなかつた。これではどんな能力なのか把握することもできない。辺りを照らす光でも、闇が大きければ呑み込まれる。理愛の光は闇に喰い潰された。

「理愛、つまんないよ。やつぱり理愛の持つそれ、私が貰うよ」

理愛に向けられていた関心は皆無となり、虹子はつまらなさそうに失望し、そんな能力を発動できない理愛に絶望し、手に持つ小さな刃を輝かせ、振り下ろした。

1・1・3 全能結晶の無能力者（4）

1・1・3 全能結晶の無能力者（4）

病室で雪哉は黙つて空を見ていた。

数え切れぬ星が空を瞬く。小さな箱庭に閉じ込められてしまつた
雪哉は何も出来ず、この白い箱の中で身動きが取れないでいた。

一週間。

そう、それだけの間、雪哉は眠り続けていた。

田を覚ませば、理愛がふざけたことを言つていたことを思い出す。
どうして理愛がそんなことを言つ。死ねばいいのかなんて

ドスン。

雪哉は無言のまま、ベットを叩く。

物に当たつても、何も変わらないのだけれど、今はそうすること
しか出来なかつた。そしてそんなことしか出来ない自分を呪つた。

「そんなイライラしてたら嫌われちゃいますよ」

誰もいなかつた病室の中でいきなり声が聞こえた。

すぐ声をした方を見ると、そこには瀧乃曜嗣の姿があつた。

病室の扉が開く音はしなかつた。

それなのに、その男はそこにいた。それどころか余裕綽々にリン
ゴの皮を果物ナイフで丁寧に剥いでいるのだ。

「ほい」

綺麗に剥かれたリンゴが皿に並べられ雪哉に渡された。

ウサギの形に切り剥かれたリンゴ。器用に切られたそれを雪哉は
受け取つて、そのまま机の上に置いた。いきなりこんなものを渡さ

れてもとてもじゃないが食べられない。食べる気分ではなかつた。

折角、剥いてもらつたのは悪いが雪哉は一口もつけることなく放置する。それを見て曜嗣は自分の剥いたリンゴを一つ口の中に放り込んだ。

「いやいや、リンゴ食べてくださいよ！ 食べ物を粗末にしたら殺されるよ。一斉にお百姓さんにボロされてもオラチン知らないよおー。オラチンはちやーんと、ちやーんと食べますんで、雪哉くんもさつと食べるであつんす」

そう言つて一つリンゴを摘んでは雪哉の口に無理やり押し当つてきた。あまりにも鬱陶しかつたので仕方なしに口を開けた。可愛い女の子にされるならまだしも、眼鏡をかけた白衣の胡散臭い男にこんなことされてもちつとも嬉しくなかつた。

「驚かせないでくださいよ」

さつやとつんぐを咀嚼し、腹の中へ運び終えた雪哉は恨めしそうにやう言つた。

潜むよひしゃつて来て、気がついたら田の前にゐなんて心臓に悪い。

入ってきたことに気つかなかつた。本当に不気味な男である。「なんで普通に入つて来ただけだつてのに、そんな言われ方しないといけないわけ！ ふんふん！」

氣色悪い、しかしそんなことは言えるはずもなく、

「もう面会の時間だつて終わつてるんですけど

「堅いねえ、ホント雪哉くんはお堅いです。堅すぎて肩凝らない？」「凝るかよ……」

曜嗣の減らず口に付き合つてこる方が肩が凝りそつだ。だから雪哉は挑発にも似た曜嗣の言葉に出来るだけ反応せず、だんまりを決め込むことにした。

皿の上にあつたリンゴが全て無くなり、雪哉はベットの上で静かにしていた。曜嗣もまたいつものようにふざけることなくジッときりんぐを剥いた果物ナイフの刀身を見つめているだけだつた。

理愛の様子がおかしかった。

はつきりとわかる。

病室を抜け、突然戻ってきたと思えば何か焦つていて見えた。

病室の向こうで誰かと喋っていたのもわかる。だつて理愛は風に当たるなどといいながら、そこから一歩も動いていなかつたから。そこまではわかつていた。しかし何をしていたかまではわからない。それでも、嫌な予感しかしなかつた。

何故なら理愛は親指を「噛んで」いたから。

いつだつてそれは悪いことが起こる予兆だつた。

理愛の親指を噛むという癖は幼い頃から知つてゐるものだつた。

しかし、それはただ噛んでいるわけではない。思い詰めている時こそよくする行為だ。そして決

まってよくないことが後から起つてゐる。理愛自身は気がついていないかもしぬれないが、雪哉に別れを切り出した時、思いつきり親指を噛んでいたのが見えた。出て行くときも、何かを呟いていた。

「どうして、こんなところで腐つてるんだい？」

考え込む雪哉に、曜嗣の声が聞こえる。

動かないのは何故か？

何も、出来ないからだ。

理愛がそうやつて何か思い詰めていたのがわかつていいながら、雪哉は何もしてやれなかつた。何も出来ず傷つき、倒れ、こうして病室のベットの上で眠つていた。

「理愛ちゃんはホントいい子だよね、雪哉くん倒れた時なんてずっと泣いてたんだあー、可哀想に、可哀想にい」

そんなこと思つてもいいくせに、曜嗣は笑いながらそんなことを言つ。

曜嗣は雪哉や理愛にとつて保護者でしかない。保護者であつて家

族ではない。雪哉が倒れた日だって曜嗣は病院の病室を一つ借りる手配をしただけにすぎない。それでもいい。何もしてくれないよりは余程いい。

例え感情が籠められていても、嘘は吐かない人だつた。

理愛が泣いていたのはきっと本当だつたろう。そこから聞いてもいないのに曜嗣は語りだす。理愛が泣いていたことを。後悔を、懺悔を。

能力を手にしてしまうという種晶とやらが見つかったあの日からずっと悩んでいたことを。あれだけ曜嗣のことを批判していた割に、そんな悩みの数々は兄ではなく曜嗣に相談していたのだ。

悔しかつた。

頼りにならないのだろうか。それは能力がないから? それだけの理由なら、本当に悔しくて堪らない。

ギュッと潰れるぐらいために左腕を握り締める。

包帯を巻いたその腕を。

包帯を巻くというのは、傷を隠すという行為。雪哉のその腕は何を隠しているのか。

ただ作り描いた設定。言葉も、身体も嘘だらけ。

聞き慣れぬ単語も、そう使うことの無い言葉も、全部、雪哉の嘘でしかない。

「その左腕でさつと理愛ちゃん守つてあげなよ

「何を……」これは……

ただ巻かれた包帯を指差し、曜嗣は笑う。

これは幼き頃に自分がした、愚かな行為。

力を持たず、無能のまま、雪哉が全て失つたあの日から行い続ける終わらぬ行為。

「キミが倒れて、理愛ちゃん泣いて、外飛び出して、さて……今は何をしているやう

「どういう……意味ですか?」

聞き捨てならない台詞だつた。

何を？

もう夜だ。真っ暗な闇が広がっているこの世界で、外を、飛び出す？

「理愛ちゃん、「Ark」に協力するってさ。電話あつてね、そう言つてたよ」

眼窩から眼球が零れ落ちてしまうんじゃないかつてぐらいに、大きく見開かれた瞳。

わけが、わからなかつた。

協力は拒絶していた筈だ。図書館で、曜嗣が見せた手紙を前にきつぱりと、はつきりと断つっていたはずなのに。それなのにどうしてその選択が覆されているのか、雪哉にはわからなかつた。

「え？ えつ？ ええつ！ 何なの、その何もわかつてなさそな感じのアホ面は？」

曜嗣のその呆れた顔と声は雪哉のあまりの無知さに嘆いているようだつた。

それでも雪哉にはわからない。理愛がどうして一人で行つてしまつたのか。

「雪哉くんさ、理愛ちゃんと二人っきりになつてからもう六年になるよね」

「まあ……」
六年。

全てを壊され失つたあの日から、雪哉と理愛は一人になつてしまつた。

「オラチンはさ、キミの両親にいろいろ世話になつたからね、まあ、恩返し的な意味も込めて保護者してるけど、それでも他人は他人だ。それはきっとキミがよく知つてる

それは既知だ。

どれだけ近くにいたとしても、曜嗣は他人でしかない。生活する場所も、環境も何もかもを用意してくれたとしても、それに対して感謝は出来ても、家族にはなれない。それは絶対だ。雪

哉の家族はとうくに崩壊してゐる。落ちた飛行機と一緒に、全壊した。

「キミはある六年前、オラチンに何を言つた?」

「理愛は、理愛だけは……最期まで、守り抜く」

喪失し、曜嗣との邂逅を果たしたあの日、幼きあの日から左腕に誓つた。

包帯は誓約。虚栄は利剣。作られた設定は自分を偽るため。妹を守るために。敵の視点を自分に移すためにしたことにはすぎない。

銀の髪と瞳を侮辱する者の前に立ち、自らが正義と語りいつだつて立ち向かつて来た。幼い頃、そりやつて自分は異世界から来ただの、世界を守る為に選ばれただの、そんな虚像を作り出したのは妹を守る為だつた。幼く、どうすればわからなかつた雪哉が取つた行為がそれだつた。お陰で誰もが时任雪哉はおかしな奴と認識し、敵意は雪哉へと向けられる事となる。しかし雪哉の思惑通りに理愛が蔑視する数が極端に減少した。それでも零になることは無く、雪哉は目的を果たすことはできなかつた。力は無かつた。弾圧することもできず、少なくとも理愛を軽侮する者を全て止めることは未だに叶つていらない。

「雪哉くん、キミが、ホントに理愛ちゃん守つてるつもり?」

その言葉は雪哉にとつては侮辱でしかない。

喻え相手が恩人であつても、許すことはできない。

だから、ありつたけの憎悪を込めた視線を曜嗣に向けても彼は動じない。

そして尚、言葉は続く。

「逆だよ、ぎやや、ぐ。全くの逆。反対。逆転してることにこなつてと氣づけよ」

前のめりになつて、雪哉の顔に近づきながら鋭い眼光で雪哉を射抜く。それだけで増大していた憎悪は萎縮し、曜嗣を直視することができるなくなる。

「今は雪哉くんが理愛ちゃんに守られてる。格好悪いねえ、ダサすぎて鳥肌モンだよ！　吐き氣で窒息死しそう！　なんか頑張つて

臭い台詞言つて、誓つてたあの頃のキミはとっくに死んでしまったのかなあ？ どうなのかなあ？ どうなんだ？」

そんな辛辣が雪哉を際限なく襲つ。

そして振り返れば、雪哉は理愛を悲しませていた。大切な妹に悲哀を抱かせている時点で守り通せていない。

わからされた。たつた数分で、雪哉の価値観は破滅的なものとなる。

そんな頭を垂れる雪哉に曜嗣は指を差す。

「行きなよ、理愛ちゃんは学校の裏山だよ」

「本当に理愛は」

「そこで何もせずに結末を見届けるならうつあるところよ、でもやんなのオラチン許さないよ」

「どうして、アナタは……」

曜嗣は鼻で笑つた。どうしてそんなことを聞くと馬鹿にしたようだ。

「つまらないじやん」

「は？」

「いや、その、つまんないし。最初つから勝敗わかってる話見せられて喜ぶヤツとかいんの？ そんなクソシナリオみたい？ クソゲーすぎ！ おもんねえつまんねえくだらねえ、だからオラチンはキミらに紹介を焼くよ。そうしないと浮かばれないヤツもいるしね」

曜嗣の真意がわからない。

両親を喪つたあの日だって、まるで粗い済ましたように現れた。

ただ、生きる為の支援をしてくれたそれだけで救われた。だから、曜嗣が何者かだなんて氣にも留めていなかつたはずなのに、今はとても恐ろしく感じた。

それでも、今はやるべきことがある。

自分の誓いが嘘のまま終わつてしまつ前で、理愛を守る。
雪哉は往く。

「往きます、敵を討ちます」

「いいねえ、いつもの気持ち悪い雪哉くんだ。いつてきな、オラチ
ンは紹介しか出来ない。でも、キミらの側にはいてやれる」
会釈し、牢獄のような白箱から飛び出す。

それでも腹部に風穴を空けられ重症を負つたまま。
ズキリと痛みが走るが唇を噛み締めてただ耐える。

種晶は人々だけでなく世界も進化させている。医療科学も遙かに
進み、種晶の力によつて傷口を塞ぐことも可能になつた。それでも
治癒を早めるだけで、完治には至つていない。それが雪哉の傷。
だが、そんな傷ぐらいで雪哉の歩が止まるわけがない。

理愛が戦つている。雪哉を守る為に。
きっと有能力者と戦えるのは自分だけだと、そう思つたからこそ
何も言わずに行つてしまつた。

歯痒い。

何もできないのは力が無いからではない。
何かを成し遂げようと、その覚悟が足らなかつただけに過ぎない。
きつと何処かで諦めていただけだ。

理愛を取り巻く脅威を全て排除できない力不足から生まれた苦惱。
自分一人では何も出来ない。
違う。

自分一人だから何も出来ない。
だから、
それは

雪哉は走り出す。

たつた一人、大切な家族を守る為に。

1 - 14 全能結晶の無能力者（5）

1 - 14 全能結晶の無能力者（5）

力は発動されることはなかつた。

絶望する理愛に失望した虹子の凶刃が振り下ろされた。
肩口から腹部に掛けて切り裂かれ、血が溢れた。

「あ、ああ……」

切先で裂かれたのは皮膚だけだつた。

それでも十分理愛な恐怖を与えることができた。

理愛は逃げる。殺される。このままだと間違いなく殺される。

（どうして……っ）

逃げる。逃げる。逃げる。

生きる。生きる。生きる。

たつた二つ。それだけ念じ続ける。

光が生まれ、輝きを放ち、力が生まれるはずだつた。

もう、そこまできていた筈なのに、それなのに、力は形を描くことはなかつた。

裂けて見えた下着を隠すことなく走り続けた。

痛い。でも立ち止まればもっと痛いことになる。

勇ましかつた姿はそこにはなく、今はただ映画のように殺人犯から怯え逃げ惑う被害者のよう。

そしてそんな加害者が後方から追いかけて来る。
死にたく、ない。

自分は有能力者ではなかつたのか？ 身体の中にその権利がある
はずなのに、力は理愛を助けてはくれない。

「理愛あ！ 逃げちゃダメだよ、もう終わりなんだから諦めて殺さ
れてよお！」

耳に響く、おぞましい言葉。

きっと捕まれば殺される。

両手をギュッと握り締めただ走る。力は應えてくれない。

漫画のように、小説のように、都合よく覺醒を見せてはくれない。

涙が、毀れる。

何も出来てない。

何も、何も

兄である雪哉を傷つけた悪い奴を倒すつもりで、その覚悟でここに来たのに、自分で選択して歩んだはずだ。

それなのに、今は、とても怖い。

死ぬのが怖い。

どうして？

兄と、離れ離れになる。

「いやあ！ そんなの、ヤダあ！」

走る。

死から遠ざかる為にひたすら走る。

疲労する身体と精神を無理矢理動かせる為に叫ぶ。

まだ走れる。止まるな。走れ。

「はあ、はあ、はあ、わたし、わたし……」

どれだけの覚悟も信念も敵に通用しなかつた。敵わなかつた。初めての敗北でさえ、心が折れることはなく、何度も立ち向かえた。雪哉が凶弾で倒れ、その弾を撃つた敵を見つけた時は胸が高鳴つた程だ。戦えた。何度だって戦うことだけは止めなかつた。

それでも、自分の刃は届かない。
どれだけ、願つても力は出ない。

理愛の心を壊すには十分な理由だ。
何をやっても敵わない相手を前にどうすればいい。そんな相手を倒すことが可能なのか？

見えない弾で理愛を暴行した雨弓の力。
見えない壁で理愛を蹂躪した虹子の力。

そんな不可視の前ではやはり何も出来ない。それでも、そんな力の前でもあれだけ勇敢に立ち向かえたはずなのに。今はもう、それも出来ない。

「きやつ！」

躊躇転び、泥だらけになってしまつ。

そして、もう逃げ切ることは叶わなくなつた。仰向けのまま真上を見れば、そこには虹子が立ち廻くし、睥睨したまま理愛を威圧している。動けない。少しでもここで抵抗の素振りを見せてしまえば手に持つ刃が喉奥に突き刺さる光景しか見えない。

「本当に、理愛つて面白いよね。□□□□表情も感情も変わつて、なんだか私のこの眼みたい」

樹の陰影の下に立たれてしまつては虹子の顔を見たとしても表情まではわからない。けれど、樹と樹の合間から漏れる月光が暗がりを照らし、虹子の瞳が赤く染まるのが見えた。色を変える虹子の瞳。そんなすぐには色を変える虹子の瞳のように、理愛もまた憤怒や悲哀といった様々な感情を表現する。

殺してやりたかった。でもそれが出来ないのなら諦めるしかない。だから苦しんで悲しんでいるのに、そんなことを言われても嬉しくない。

理愛は何も言わずに虹子から視線を逸らすが、虹子はそれを許さない。理愛に圧し掛かり、持っていたナイフを捨てて両腕を押さえ拘束する。

「や、やめて！」

「やめるわけ、ないでしょ」

どれだけもがいても虹子の拘束を解くことは出来なかつた。

虹子はただ愉しげに理愛の身体の上で踊る。

涙を浮かべ、悔しげに顔を歪める理愛を見て虹子の嗜虐心が刺激されたのか理愛の両手を片手で掴み、荒い息を吐きながら口元を吊り上げたまま理愛の胸元を擦り始める。

「な、にをつ……」

「何つてえ、理愛が自分の身体の中にある花晶^{ルームニア}が、見えないままなんて可哀想だなって思つてわ」

そして丁度、胸の間に手は置かれ、ゆっくりと虹色の光を放ちながら理愛は自分の身体から何かが込み上げて来るのを感じた。胸が焼けそうに熱い。息も苦しい。声が出ない。そして、光が消え、理愛の胸元には銀色に輝く大きな玉の形をした結晶が姿を現した。

「そ、そんな……」

自分の胸元に埋まつたその結晶を見て、理愛の身体にその異能を与える結晶が本当に存在していたことを理解してしまつた。こんなものがあるせいで、自分も雪哉も、この世界も、何もかもが変わつてしまつただなんて、そう思うだけで悲しみで押し潰されそうになる。

「泣いてるの？ 理愛……ふふつ、でも、大丈夫。理愛だけがそんな大きな結晶を身体に埋め込んでいるわけじゃないんだから」

そう言って、服を捲り上げれば、

「私もなんだから」

白い腹部が露わになる。それは前。理愛に見せた虹色の結晶。腹部に埋め込まれたその結晶が幾つもの輝きを放ち、煌き続ける。しかし前見せた時、その結晶は小さいものだった。だが今は理愛の胸に埋没する自分の拳ほどに肥大したモノへと変わり果てていた。

「理愛の見てたら、興奮しちゃつた……」

「ひつ……！」

身体が竦む。一層大きくなる震え。止まらない。

それでも、声は出た。

「わたしは、何な、の……」

どうしてそこまでして追い詰める。

特別な力なんてあるわけがない。だって、力が使えないのに何の意味があるんだ。

だから、そんな疑問を投げかける。虹子の身体はピクリと止まり、そしてゆっくりと顔を近付けてこう言つのだ。

「種晶はね、視野の狭い愚か者が手に入れて悦ぶただの嗜好品。力？ そうかもしれないね、人より優れていればそれだけでいいのかかもしれないね」

種晶は人に能力を与える、異能という才能を開花させる。火を放つことも出来れば、空を翔ることだって出来る。

たつた一つ、それは人間を超越させるには十分な力を与えてくれる。そんな常識を逸脱する代物が、嗜好品などとそんな呼び方で虹子は括る。

「花晶は違う。これは「本物」なの。世界をどうこうするなんて簡単なぐらい、おぞましい力を秘めている。わからないの？」

わからないからこうして怯えているんだ。

どれだけ嘆いても叫んでも何も変わらないから恐れているのだ。

「だから、さつさと黙つてテメエの能力を見せろって言つてんのに、お前はクズだな时任妹」

そしてはだけた服から白い肌を晒す理愛に向けられた銃口。

「雨弓」の持つ銀黒の銃身が不気味に輝き、銃口からは黒い底の見えぬ深淵が理愛を見つめている。

「わたしに、力なんて無いって……言つてるでしょう。わたしの身体に埋まつたこんな結晶、要らないって、何度も」

身体の奥底に存在していた結晶が、自分の世界を狂わせているのならさつさと消えて無くなつて欲しかった。もうしつこいほどにそう言つていた。

けれど、そうはならなかつた。

ただ理愛の身体に佇み、時間をかけて理愛を壊していく。

「埋まつてる？ ハハツ、虹子、ホントにこいつ何もわかつてない

んだな。こりや傑作だわ。自分が化物だつてことに気づかずに入間ごっこを楽しんでたつてか？」

「ば、け、もの？」

「雨弓」の言葉を反芻しても、その言葉の意味はなんだつたろ？
おかしい、その言葉は聞いたことがある。けど、自分に向けられて言われたとなれば話は別だ。ばけもの？ 誰が？ 理愛はそこ言葉を脳内で調べる。どこに化物がいるんだ。この腕も脚も、身体だつて、正真正銘の人の子だ。どこも化かしてはいない。人を恐れさせようと、悪巧みも考えていない。恐ろしい姿も形もしていないと、いうのに、雨弓は理愛を化物だと決め付ける。

「そうだよ、バケモノ」

「わたしは普通の、人間です！」

我慢ならない。

いきなり人をバケモノ呼ばわりするこの男が許せない。

どれだけ辛く、苦しくとも、逃げたいはずなのに、その言葉だけは撤回させなければいけない。

けれど理愛の叫びは届かない。雨弓は笑いながら地団駄を踏み、言つ事を聞かない子供に苛立つ大人のように腹を立てていた。

「聞き分けろよ、お前は人間じゃねえの！ 普通？ お前が言うなよ、お前みてえな人間知るかよ」

音が爆ぜ、理愛の近くにあつた樹を撃ち抜く。

コルク栓のように綺麗に切り抜かれた円形の弾痕。

その威力の前に理愛は強制的に口を閉ざされる。

理愛の意見は全て否定され、雨弓の価値ばかりが前に押し出される。

「普通の人間が髪の毛が銀色なわけねえだろバカが！ どこの外国から来たんだよウケるわ！」

銀の髪と瞳。

それは確かに東洋人とは言い難い変色。

そしてその二つの要素はこれまで理愛を苦しめてきたものだつ

た。

だから、普通ではないと言われても強い意志を込めて否定することができない。

普通じゃない。

そう、普通ではないのだ。

人間の髪、瞳の色ではない。

刃のような、氷のような、結晶のよつた白銀。

その色は例え美しい輝きを放っていたとしても、人と異なつた色ならば異常と見なされても仕方がない。

「理愛、花晶が種晶を遙かに超えた力があるのは何故だと思ひ?」

消沈する理愛に掛けられた虹子の言葉。

理愛はもう何も答えることができない。

「結晶そのものだからさ、髪も色も血も肉も、全部、全部で一つなの」

その言葉が決定打だった。

種晶は結晶の断片でしかない。小さな結晶を身に埋めることで得られる異能。

けれど、花晶は違う。

それは種ではなく、花。

花開くそれは異能を超えた窮極。

出鱈目もいい所である。種をその身に植え、花を咲かせることで能力を得るような、だから種晶なんて名前だと、そう理愛は思つていた。

でも、別に「花」の名を冠した結晶が存在しているのならば種の結晶は所詮、「花」には勝てない。

そしてその結晶は生きているのだ。人一人、そのままが結晶。身体に埋まっているそれは一部でしかない。血肉から髪の毛一本全てが結晶なのだ。そんなものの種晶の比ではなく巨大。

「そんな、そんな……そんな、それじや、それじや、わたしは……」

「化物、化け物、ばけもの、バケモノオ！　お前は人間なんかじゃ

ねえ、ただのお化けだ。」

お化け。一番しつくり来ることだらう。

人の形に化けた結晶。

そう、花晶は「人」を形成した結晶だつた。

小さな、本当に小さな結晶で、人に異能を与えるとするのなら、理愛のような矮躯であつたとしても種晶のよつに小さなモノと比べれば何十倍、何百倍の質量となる。

種晶もサイズによつて得られる能力が強大なものになるとされている。では理愛そのものが結晶だとするのなら、得られる能力は如何なものか？

「わたし、にんげんじや、ない？」

それでも能力の大小だと、今の理愛が知りたいことではない。
人間ではない。

結晶。

人間の形をした

結晶

「じゃあ、わたし、わたしはあ……」

壊れる。自壊する。崩れてしまつ。

理愛を繋ぐ心の最後の一本の糸も、縛れたまま、たつたもう一度衝撃を与えればブツリと切れて落ちてしまいそう。

「时任雪哉はお前の本当のお兄さんではありません、残念だつたなあ時任妹お。ギャハハハハッ、今までずっと勘違いして生きてたわけだあ！」

それでもまだ認めるわけにはいかない。

泣くな、ここで泣いたら、兄との関係にまで終止符を打つことになる。

理愛は耐える。あと一撃受ければ壊れてしまうギリギリまで耐え抜く。

「結晶が落ちてきたのは六年前……わたしは、六年以上前からここにいる！だから」

「理愛、それは公になつただけ。結晶はね、ずっと前からあつたん

だ。一千年前から、もうこの世界にあつたんだよ。それを気づかず、に生きてきた人類が馬鹿なだけ、アナタはずつと前からもう結晶の形をしたままどこか暗い穴の底で動けずに停止してただけ

「そ、んな……」

六年前、この世界に結晶が降り注ぎ、人々は「異能」^{おがい}を手に入れた。

それは違つた。

結晶そのものは既にこの世界に現存していたのだ。それに気づかなかつただけに過ぎない。

「私達、「Ark」はずつと前から存在してる。ずっとじずっと昔、遙か過去、結晶が超常を与えてくれたことなんてとっくに気づいてる。隠すさ、隠すに決まってる。大きな力は隠すに限る。でもそれが出来なくなつた」

六年前、公になつた結晶落下。

あの事件を境に結晶を隠蔽する意味はなくなつた。

そして世界に組み込むことで、異能の異常性を限りなく正常に近付けた。

そんな中で、

「種晶なら構わない。どんな力だって、才能だって、問題ないの。でもね「花晶」は別。あれはもう何かわからないの。私だってわからぬ。だつて」

理愛の首を掴み、力を込める。

片腕一本で理愛の身体を持ち上げる。虹子の短躯からは想像も付かない力だった。息が出来ない。酸素が頭に回らない。

人間じゃないなら、どうして人間らしいの。

理愛は自分が殺されそうになる中、そんなことを思つてしまつた。心臓の鼓動が聞こえる。生きていると実感できる。

目は見通す。声は伝達する。耳は聴取する。心は感情を、描き、

理愛はまだ、自分を「人間」だと信じている。

ここで認めては、「兄妹」はどうなつてしまつ。

人間ではないモノが「妹」を名乗れるのか。

そんなの、嫌だ。

虹子の手に更に力が籠る。

無意識に涙を流し、呼吸することだけしか考えられないせいか口元から涎が漏れ続いていることにも気がつかない。目がゆっくりと上を向いていく。このまま白目を剥いてしまえば、それは生命活動の停止を意味する。死ぬ？ 死にたく、ない。

「理愛、安心して、私が理愛を救済つて上げる。何もできない理愛、可哀想な理愛、だから理愛の結晶は私の中に入るだけだよ」

「だか、ら、アナタ、も……」

ただひたすらに精一杯に声を出した。

理愛を執拗に追跡し、追い詰めてきたのは、虹子も「同じ」だつたからだ。

ただの人間が、七色を超える無限色の瞳を持つわけが無い。

数多の色を保有する虹子の瞳。それは名前通り。虹の子だった。

そして虹子もまた理愛と同じ「花晶」の子。

ヒトガタ
人形の結晶者。虹子もまた人間ではないのだ。

赤から水へ、黄から緑へ、黒から白へ、やがて金から銀へ。虹子は理愛を見つめる。理愛のように純粹な銀ではなく、不純物でも混じったような鈍い銀の瞳で理愛を見つめる。頬を赤く染めて、興奮し、紅潮したまま理愛の首を絞める、絞める、絞める。

世界が閉まる。ゆっくりと閉鎖されていく理愛の感覚。それでも、まだ、

「力を上手くコントロールできねえヤツは化物以下だよな、でもまあ、もうすぐ終わるわけだ。虹子、さっさと終わらせてくれよ。こんなクソ、自分の力を使うこともできやしねえ木偶だ。木偶が力を得る権利なんて手に入れてんじゃねえよ」

「ふざ、けるな……」

だから、理愛は声を上げる。

最期の最期まで抵抗し続ける。やつぱりおかしいんだろう。

虹子の言つように、彼女の瞳の色のように「ロロロ」と変わる感情。あれだけ怖かつた、逃げ出したくて堪らなかつたのに、絞殺される手前でまだ反感の意思を見せるなんて、どうかして。

「あれだけ、バケモノ呼ばわりして、おいて、この子、も、そんなんでしょう、それなら、どうして、酷い、兄ね……アナタ

「兄妹の定義、それは家族であること。

血など関係はなく、想いだけでどうとでもなる。

理愛は自分をずっと雪哉の妹であると思い続けてきた。それだけで兄妹なのだ。

だから、構わない。人間でなくとも、このことを雪哉が知つて距離を置かれたとしても、家族が崩壊したとしても、理愛はこれからも永遠に雪哉の妹であると、言い切れる。

短い時間だつたとしても、それでも理愛をあの大きな背中で虚栄と虚像だけで守護してくれた兄の為に理愛は妹であり続けたいのだ。だからこそ、「雨引」のこれまで理愛に向けられた言葉がまるで虹子に向けられているように感じてならなかつた。妹をバケモノ呼ばわりする兄。雪哉にそんなことを言われたと思うと、想像もしたくなかつた。

「はあ？ 虹子もバケモノだぜ？ 人間じゃねえんだからな、結晶の塊とか怖すぎんだろ」

「そ、れで、も……この、子は、アナタの妹、なんでしょう？ わたしを侮辱、することは、アナタは、アナタの妹まで、侮辱してることに、なる……のに」

まるでそれは触れてはいけない「雨引」の逆鱗に触れてしまつたようだつた。

銃口がいきなり理愛の額に押し当てられる。

そして「雨引」はこれまでに無い怒りの形相を浮かべて

「お前に何がわかるよ？ 知つてもらおうとも思つちゃいねえ、けど、減らねえ口なら黙らせるぞ、ああ？」

そして理愛は何も言えなくなつた。

引鉄が今にも引かれそうだった。だが無言のまま制止する虹子のお陰で、事無きを得た。いや、今まさに絞殺しようとしている相手を前にそんなこと、間違っているのかも知れないと。

「ともかくだ……虹子は別だ、本当の化物はな、テメエみてえなことを言つんだよ。能力が使えない、ド低脳のことを言つんだよ。理解してくれなんていわねえ、だから一つだけ知つとけ、虹子が一番なんだよ」

妹を巣廻した姿だけは雪哉に似ているようにも思えた。

「だから化物は二人もいらねえんだよ。例えどれだけ種晶を超越た「本物」でもテメエは虹子の「偽物」でしかねえ。及ばねえのに前に立つな、歩くな、ここから消えろ！」

水平に構えられた銃口が理愛の眉間に狙つている。

この至近距離、理愛の首には虹子の手。

逃げることは出来ない。待つてているのは確実な死。

死にたく、なかつた。

「虹子、さつさとその胸の「核」でもぶっこ抜いて殺してしまえよ、見ててイライラするわ。後はオレが脳天ヘッドショットって消し炭にしてやる

「そういうわけで、理愛、短い間だつたけど楽しかったよ」
そつと胸元に添えられた虹子の手は冷たかった。

そして理愛の意識は風前の灯にも等しい、消失の手前。「虹子と雨」の会話も聞こえなかつた。

音が、死んだ。

ああ、もう終わりだ。
終わってしまう。

それでも、最期に、最期に、

「た、」

消え入りそうな声で、理愛は言葉を紡ぐ。

頭の中はもう空っぽのようだ、自分が何をしているのかさえわからぬ。

「た、す……」

どれだけ辛く、悲しい時でも、そう呟くだけで救われる……あの言葉だけを、口にしようとした。もうそれに縋ることしか理愛には出来ない。死に直面して尚、浮かぶのはたった一つ。

「なんだこいつ？ まだ生きてんのか？ マジでゾンビみてえなヤツだな。おい、虹子どけ、死骸にしてからゆづくら調べろや」

もう何も聞こえない。

もう何も感じないのに、

それなのに、今はただ、あの顔が見たい。声が、聞きたい。

「た、す……け、」

だから、もうその言葉だけが今の理愛を生かしていた。

「雨引」は巨大な銃器を理愛に向けて構える。虹子は手を離す。全ての力を失った理愛はぐつたりとなつたまま、涙を流しながら、グチヤグチヤのまま、倒れていく。倒れる、倒れる、ゆづくら、そのまま地面に落ちて、

「た、す……け、て……」

消えていく感覚。失われる意識。

それでも最期まで、あの顔を、声を、忘れようとしなかった。

それが忘却するということは、本当の化物になってしまふような、そんな気がしたから。

「終わりだ、死ねよバケモノ……やつせとオレらの力になっちまつ

な

引鉄が引かれ、撃鉄が落す、凶弾が、

「何を、やつてこる？」

凶弾が射出される。だが、それは逸れる。理愛に直撃することなく、通り過ぎる。

「 がつ！」

雨弓は引鉄を引くと同時に声のした方へ。

そして声がした方を覗けば、雨弓に視界はブラックアウトした。いきなりの衝撃に、吹き飛んだ樹木と同じように雨弓は苦悶の声を上げながら回転しながら飛び跳ねた。

「あ、ああ……」

凶弾は理愛に当たることはなく、真横の樹木をまとめて吹き飛ばしだけだった。倒れこむ理愛は五体満足のまま存在している。

そして薄れゆく意識の中、大きな影が理愛を呑む。

でもその影はとても優しい。

枯れる程に流し尽くした筈の涙が再び生成される。どうして、この人は と、理愛は驚愕し、そして感謝する。そこには強大な敵を前にして、震えることなく、臆すことなく立ち向かう正義がいた。そんなたつた一人の正義は手を払い、怒号を放つ。

そうだ、この人を、待っていたのだ。

どれだけ勇気を抱いても、どこかに見え隠れする不安の塊がたつた一人の存在で一瞬で消散する。

そして、その人はやはり立ち向かうのだ。

怨敵を、討ち滅ぼさんと誓いを立て、巻かれた左腕の包帯。そんな腕を前へ、翳し

「お前たち、俺の妹に何してる 」

向けるは敵意の眼差し。

大切なものを傷つけた者に対する殺意。

だから、増大に膨れ上がるその想いは真っ直ぐ敵に向けられる。

「殺すぞ」

その肥大する憎悪の中心に、時任雪哉の姿が見えた。

1 - 15 全能結晶の無能力者（6）

1 - 15 全能結晶の無能力者（6）

月下、闇黒の淵に顯現われたのは、理愛のたつた一人の正義の味方だった。

しかしその正義が抱くのは憎悪と敵意。

憎しみを胸に、理愛に背中を向け、雨弓と虹子を睨む。

そんな憎惡の塊は雪哉自身。

一切の能力も持たず、異能も知らぬまま生きてきた男が、そんな能力者を前に卒倒することなく胸を張り、ただ立ち向かう。

「ふざけやがってえ！ オレの、オレの、オレの、オレの、オレの、ふざけやがって、殺す殺すコロスウウウウウウ！」

起き上がる雨弓は顔を押さえたまま、目を見開き、怒りに奮えていた。額からは血管が浮き上がり、口から煙でも出る程に荒れた息を吐き散らす。。

そんな人の形をした獰猛な獣の顔面に雪哉は膝蹴りを浴びせてしまったのだ。

しかし雪哉にとつてはそれがどれほど危険な存在であつても、強く跳び、顔面を破碎してやろうと思い膝蹴りした。

だつて、それは理愛に殺しの武器を突き立てて、今にも撃ち抜かんとしていたから。大きな脅威が理愛に襲い掛かる前に早く、速く、排除しようと思つただけに過ぎない。

だから、雪哉は戦うのだ。一度の敗北で、何が失われるというのだ。

威信がどれだけ損なわれたとて、そんな自尊心、今はいらない。

雨弓に苦汁を舐めさせられたことが何だ、どれだけ悔られ、罵られたとしても、それで何が失われるのだ。だから雪哉は大丈夫だつた。理愛がいるのなら。

「来い、貴様の能力が如何なる存在であつたとしても、その力で、俺を止められるものか」

力は弱くとも、心は強く、虚栄を張れ、自分を偽れ。大きな嘘で心を強化しろ。

絶対なる力の前で、刹那的な終焉を迎える為にも、今はただ生きる選択を。

「ふざけやがつてえ、时任お……テメエ、死んだぞ」

黒き銀の銃身が不気味に煌き、真つ暗な銃口が向けられる。

まだだ、まだ早い。

内心は焦慮し、恐怖していた。

吊り上っているこの皿蓋さえ憂惧していることを認めてしまえば、情けないモノへと変わり果ててしまつことだろう。だからこそ虚像を描く、言葉を用い、嘘を構築しろ。それしかできないのなら、それだけをすればいい。

「いいのか？ もうすぐ、俺の呼びつけた精銳が駆け付けて来るぞ」「アナタ、また同じ手を使つたの？」

雪哉が携帯電話をチラ付かせてみれば、虹子が忌々しげな顔をしては鋭い眼光を雪哉に放つ。だが、雪哉は答えを返すことはしない。前に一度、理愛を襲つた虹子を警察に突き出したわけだが、どんな手を使つたのか咎めは無く、飄々と姿を見せていた。それを雪哉は知らない。それでも、こうして目の前にいるのなら、その時点でおかしいと気づくことは容易だ。

だから同じ手は通用しないのはわかっている。だつて敵は未知なのだから。背後には「Ark」という見えない敵が聳え立つ。無尽蔵たる未知を前に法的な手段が有効とは思えない。

だから今はただ虹子でも雨弓でもどちらでもいい。とにかく挑発を繰り返し、標的を自分に向け、照準を変えさせればそれでいい。それだけで解決する。

「言っておくけど、ムリよ。来ないよ。私たちがどういう存在か、わかつていのいの？」

「知つてゐるさ暴行者、俺の妹に穢れを与える悪しき敵……俺の世界を狂わせる憎き敵。お前は敵だ。お前も敵だ」

虹子に人差し指を、雨弓にも人差し指を向け、そして指は突き立てたまま動じない。

「私が？　暴行？　違う、違うよ、何いつてんの？　わけわからぬい言葉並べ立てて、まるで病人。おもしろくない、理愛と違つてやっぱ全然おもしろくないよ、アンタ」

虹子は呆れ返るように、雪哉を見るだけで倦怠感でも生まれるのかだるそうに首を傾け、そのまま頭を搔いている。理愛から雪哉に対象が変われば一番いい。それが無理でも、時間が稼げるのならそれでもいい。だから、雪哉は不快感を露わにする虹子を見て、口撃を再開する。

「お前たち有能力者が、複数で能力を持たぬ者を蔑ろにする　ただの暴力じゃないか。傑作だ、これは傑作だよ。お前たちが能力を開発し、未来を開拓している「あの」素晴らしい「A・r・k」だとはな、いや、俺はまた事実に近付けて心底幸福なんだ。やっぱりお前たち力があるものは、おぞましいなって、再確認できたのだからな」大袈裟に両手を広げ、高らかに笑う。

小馬鹿にしたようなそんな笑い声は月下兄妹の神経を逆撫であるには十分すぎた。

だが雪哉の言葉は本心だつた。

表舞台では「能力」を開発し、それを世界の為だと……振興させている。

しかし今まさに裏を垣間見ている雪哉にとつては、「A・r・k」が世界を歪ませる闇そのものにしか思えない。たつた一人、妹を殺そうとしたそんな連中が、未来を明るい方へと導くとは信じられない。けれどその行く末に興味は無かつた。何が待つっていても、世界が滅んでも、そんなことは重要ではない。大事なのは理愛の存在。雪哉は理愛が蔑まれていたところを見ていた。バケモノだと罵られていたのも見ていた。それを見て、走り出し、そして武力を行使した。

人を怪物呼ぱわりしただけでは飽き足らず、殺害しようとしたんて、そんなこと許されるわけがない。それを平然と、躊躇つことも無く遂行しようとしたことが許せない。

協力はそこにはなく、一方的な虐殺を試みようとした。

月下兄妹は「Ark」の一員。

だからやはり戦うしかないのだ。世界をいくら大きく変えたとしても、能力が世界を新しいものに作り変えることができたとしても、それで誰かが死ぬのなら世界に挑まなくてはいけない。だから雪哉は逃げることを選ばない。

大きすぎる敵の前に、雪哉の存在はちっぽけだ。

足掻いても、届かない。

しかし結論が見えているから、それで諦めてしまえと　だれが決めた。

目先の暴力はまさにそう言つてゐるようだった。

銃口から放たれる不可視は、雪哉の側らを簡単に吹き飛ばし、その力が雪哉に触れば瞬く間に消えて無くなりそう……だからもう止める、諦めろだなんて、そんなことだから雪哉は前を見てしまうのだ。

「俺は、負けない　理愛だけ守る、それだけでいい！　お前に、俺が、殺せるか！」

「ふざけんなよ、生かしてやつてんのわかんねえのか？　お前みて

えなクソが吠えてんじゃねえよ。負け犬すぎで、笑えてくるわ」

「やめる、俺のこの左腕の聖骸布を解けば……それはお前たちを敵と認識したことになるぞ」

「はあ？　氣色悪いんだよ！　日本語喋れやゴラア！」

顔を摩り、鼻血を拭い、銃口が水平にしたまま雪哉を狙う。

そうなのかもしれない。生かされているだけなのかもしれない。

力が有る者の同情か？　そんな情けはいらぬ。おぞましい力の前に、雪哉の成す術など歯が立たないのかもしれない。

それでも、

「させない。理愛だつて、殺させない……」

理愛の肩を、足に手を。

胸元に抱え、走り出す。

それは逃亡なのかもしれない。

あれだけ啖呵を切つておきながら、最後に選ばれたのは早々たる逃走。

覚悟が、その想いだけで戦えるのならば、最初からやつてこる。否、やつていた。

それでも敵わない。

だから、生きる為の戦いだ。

敵に打ち勝つことが勝利ではない。敵の脅威を振り切ることこれが本当の勝利。

無能力者らしい、勝利と言えよつ。

「誰が逃がすかよ！」

射撃。

雪哉は右へ跳ぶ。手の中で理愛が震えている。一撃でも受けてしまえば兄妹諸共に肉塊に成り下がる。それでも、もづ、今は何も考えず走ることしかできない。

戦いの知識が、生きる為の術が雪哉にはない。臆病であろうとも、逃げるという選択肢を迷い無く選び抜くことしか今の雪哉には出来ない。

その迷いの無い動きが功を成したのか螺旋を描く目に見えぬ死の弾が雪哉がいた場所を呑み込んで抉り砕いていた。すかさず走行し、後ろは絶対に見ない。無心で走る。背中ががら空きになつても、的にしか見えなくても雪哉は走る。迷いだけ捨てて、疾走する。

「おいおい、運良過ぎんだろおー 時任ちゃんよおー！」

狙いを絞らずに射撃したことが命中しなかつた理由だったのだろう。

う。

雪哉が立っていた場所を夢中になって撃つだけだ。だから、雪哉の身体を呑み込むことなく弾が地面と樹木を食い潰しただけだ。だから驚きながらも三連続と兩弓は暴力を放出する。水平に構えたままの大口径の巨大な銃から噴出した爆音。それでもマズルフラッシュも見えせず、反動など一切無い不可思議な銃器。そんな幻想を銃の形に模した武器から放たれた見えぬ弾丸が雪哉の背中目掛けで撃ち出される。

「兄さん！」

けたたましい音が耳に響き、脅威が迫っていることを嫌でも判られる。

「勝てない戦は、好きじゃないんだ」

「そんなこと、言つてる場合じゃ！」

逃げることを非難しているわけではない。

ただ自分を置いて逃げろと言いたいのに、それなのに言葉が続かない。

そして放たれた三発の弾丸が雪哉に襲い掛かる。

「こっちだ……」

雪哉が小さくそう呟く。

左へ曲がる。それと同時に大木が死角になり、雪哉を呑み込むことはなく巻き込まれるのは樹木だけだった。あまりの強運の前にさすがの雨弓も首を傾げるにしか出来なかつた。

「なんだ、アイツ？　ふざけすぎだろ……後ろも見ずにバカの一つ覚えみてえに走り出したくせに、なんだかちつとも当たらねえ」

空のままの回転弾倉シリンドラを回しながら、撃ち放つた弾丸が雪哉に直撃しないことに違和感を感じていた。そしてその横で虹子が眉を顰めながら考え込んでいた。

「虹子お、何してんだ？　つたく、妹の方まで取り逃がしまつたぜ」

「いや……もう、いいの」

「はあ？」

あれだけ固執していた虹子がやけに冷静にそんな物言いをするも

のだから雨口】は怪訝そうな顔で虹子を横目で見てしまつた。そんな異質な視線を向けられているといつのに、ただ考察を繰り返す虹子はそんな視線に気づかない。手を開いたり、閉じたりを繰り返し、雨口】の耳に届かないほどに小さな消え入る声で何かを呟いている。

「まさか、ね……」

なんて思い詰めたように、虹子の中で出たその答えは否定される。だから何を考えていたのかなんて口にすることもなく、押し黙ることにした。

「兄貴、さつあと殺しこいくよ」

「わかつてゐつて、逃がすかよ、オレの顔面に膝蹴りかましやがつたアイツはぜつてえロロス」

「それは単純に兄貴が悪い、油断しそぎ」

「うつせえ、お前はいいよな……チートだしな、羨ましいぜ」

「それでも、不便は不便よ。『触れれば壊れる』なんて、何がいいのさ……」

そんなやり取りをしながら、暴れ続けたせいで廃れ死んでいく山の中を下兄妹は歩く。標的を発見し、逃亡を阻止する為にも。

1・16 全能結晶の無能力者（7）

なんとか追撃から逃れた雪哉と理愛だったが
「あほ」
「すまない」

理愛の機嫌悪く雪哉に悪口を言ひ。

「なんで登っちゃったんですか、これじゃあ家に帰れないです」

「無我夢中だつた、許せ」

理愛を抱ぎ、走り出したのはいいが山を降るのではなく登つてしまつたのだ。

しかしそれも仕方がないことだ。敵の追撃を振り切ることは出来なかつた。ましてや破壊の弾丸が飛んでくる。まるで砲座のようにな鎮座する「雨弓」に接近し、回避しながら下山するなど不可能に近い。距離を離し、敵の命中精度を下げるには山を駆け登るしかなかつた。しかしそれを何の考えも無しにした雪哉は本当に運がいいといえよう。とにかく逃げるといつ選択を一切の迷いもなく選び続けた結果が、こうして一人とも生きていふといふことである。

「あほ、あほ……あほ」

「言ひ過ぎだろ？」「う

いつもして助かつたんだ。

それなのに理愛の誹謗は止まらない。雪哉の腕の中で小さく丸まつたまま、小動物のように震えたままの理愛。どんな罵詈雑言でも今は耐えよう。理愛はずつと耐えていたのだ。戦い続け、耐え抜いた。そんな小さな少女の勇気を評価し、雪哉はただ黙つて理愛の言葉を受け止める。

「なんで、来たんですか

」「

「妹の危機を兄が救つては、いけないのか？」

今までに殺されるかもしれないなんて、それだけは阻止しなくてはいけなかつた。

だから雪哉は雨引に一撃を『えたのだ。あれほど綺麗に決まつてしまつたのだけはさすがの雪哉も驚きを隠せなかつたのだけれども。

「わたし、なんて……助かつても、」

「やめる」

自虐を紡ぐ唇にそつと人差し指。

そうやって心を自傷しても、何かが失われていくだけに過ぎない。雪哉はそんなことをする理愛を叱り付けるように黙らせる。

それでも助かつたとしても、良い事ばかりではない。その先の末

来に待ち受けは試練。そう、雪哉は知つていた

「だつてわたし、わたしは……にんげんじや、ない、から……」

理愛は人ではなく、結晶。

人を模つた偽者。

だから、なんだと、言つのだ。

雪哉はあまりにくだらなさすぎて、それ以上理愛が喋るのを止めたくて仕方がなかつた。

「それがどうした」

「それつて……そんな言い方！」

雪哉の冷たい言葉に理愛は憤りを感じていた。

それでも理愛が怒つていっても雪哉からすれば瑣末でしかない。その事實は理愛の世界では大事なことなのかもしれない。しかし雪哉にとつては些々たる問題でしかない。むしろそれが問題とさえ感じなかつた。だからそんなことで怒る理愛を見て雪哉は首を傾けてしまうのだ。そしてそんな怒りを払拭する為にも雪哉は口を開く。

「俺はお前を守る、そう誓つていい。理愛を守る。それだけだ。人間ではない？ 結晶？ そうか、それはよかつたな。だが、お前はこうしてここにいる。それだけで、いいんだ」

「わたしの目も髪だつて、全部、全部結晶なんですよ？ 気持ち悪

いじやないですか……それなのに、わたし、兄さんに守られたって、

「意味がないと、そう思つか？ だが、それはお前の結論だ。俺じゃない。俺の結末はお前じや決められない。それだけは、俺が決める」

それだけはたとえ妹であるいつも、家族であつたとしても譲れない想いだった。

守護することが、雪哉の使命。

勝手に決め付けた自分の信念。

何も無い、無能な存在であつたとしても、それだけは忘れてはいけない。それだけを忘れぬように生きてきた。それを遂げたかどうかと尋ねられれば、きっと完遂できず、何度も何度も失敗してきたのかもしれない。だからこそ、今、この瞬間、生きてきた時間の中で最上級の危機を前に雪哉は理愛を守り抜かねばならない。

だからこそこれまでだつて自分を偽つて来たのだ。何も無い分際で身の程を弁えることなく、生きて來たのだ。今だつてしつかりと虚偽を完全武装している。竜を屠る剣を持たず、ふざけた名前の組織など何処にもいない。なのに、雪哉は思い込んでいる。自分は狙われている。自分にはとてもない力が隠されている。そつやつて、自分を創造りながら、この状況下ですら、困惑することなく理愛を抱きしめる。

「だから勝手に守られている、お前が嫌でも、お前は諦めていても、俺まで一緒に巻き込むな」

ギュッと抱きしめるその腕が強くなる。

この手を離したら、もう一度と掴めない。そんな気がしたから。山頂を目指しても意味はない。山を降りなければ未来は潰える。

今はただ理愛と口論する氣はなかつた、生きる為だけに意識はそこに向かっている。

「兄さんは……わたしなんて、何も、ないのに」「

何もない。

何もないなら、雪哉はここにはこない。

価値の無いものに意味はないのか？それを決めるのは誰か？

「黙つて、俺の手の中でおつかなびっくり怯えている 帰還るぞ」

今は何を言つてもきっと理愛は納得しない。

だからこれ以上何も言わない。不毛な会話こそ意味がない。恐怖したまだ価値を見出す無様な妹の姿を見たくない。

抱いたまま、山を降りる。

このまま何事も無く なんてことはきっとないだらう。敵と遭遇することなく、家に無事帰れたらなんて夢物語もいいところだ。雪哉も理愛も一言も喋らずに降りる。手の中に理愛がいるのに、こんなにも近いのに、今はとてもなく遠く、届かない。

人ではなく、別物であるという事実。

雪哉にはそれさえも気にはならないといふのに、理愛は絶望し、恐怖している。

その感覚が雪哉に理解できるはずもない。人間ではない、化物に近いそんな存在だったという事実は理愛を狂わせるには十分すぎる。それでも発狂せず、押し黙り、雪哉の手の中で震えているだけなんて、理愛の精神力の耐久性は計り知れないモノがある。身体の中でなく、身体全体が結晶だなんて、もうその時点で人間としては終焉している。

なのに、こんなにも人肌を感じる。温かく、鼓動さえ聞こえてきそうな、そんな身体を結晶だと雪哉は信じられなかつた。小さく震え、怯え、恐怖するといつその感情はどこから来た？ 心は、身体は……全てが透明の石ころだとするのなら、雪哉の手の中にあるこれは、何だ？ くだらない、どれだけ自問したところで答えは出ない。今、自分の中にあるこの結晶が生きているからなんだ、声を出し、感情を見せてるのが人間ではなく結晶だといふのなら、それがどうしたとしか言えない。

雪哉の抱きしめるそれは、雪哉の妹、雪哉の家族、雪哉のたつた一つの救いの象徴。それを手放すわけにはいかない。どのような存

在であるうとも、そんなもの知らない。ただ理愛が消えて無くなるのだけは御免だつた。

「よお」「

雪哉の足が止まり、そこに立つ「雨弓」が視界に入る。全身が強張り、嫌な汗が背中を伝づ。どれだけ虚偽で塗り固めていても、力有る者を前にすれば自覚の無いまま後退してしまつ。雪哉はそつと理愛を下ろす。

「逃げる」

「そんな……！」

「俺も逃げる、必ずな」

「おいおい、この前みたいに妹の前でカッコつけようぜ！ そんなんじや、ダセえまんま終わっちゃうぜ？」

これ以上の逃走を阻止するように大砲のような拳銃を見せ付ける。格好の良い悪いの問題ではない。生きるか死ぬかの問題だらつ。「じゃあさつさとオレの「ARK」の前で、終わっちゃえよ。」「……」「ARK」だと？

それは組織の名ではないのか。

「雨弓」は銃を構えたままそんなことを言つ。

「お前、「ARK」知らねえのか？」

雪哉がそれを知るわけがなかつた。能力を持つ者が装備することで初めて意味が生まれる装置を無能力の人間が持つてゐるわけがないのだから。

「ARK」 それは「Artifac t・Radical・Kn ows」の頭文字を取つた略称である。

結晶が力を与える、そんなことは誰でも知つてゐる。しかし、その能力を更に格段に強化増強を可能とした装置がある。それが「ARK」 「雨弓」の持つその銃も「ARK」である。

当然、能力開発の研究に携わる「Ark」が開発した代物だ。そ

してそれは同じ聖櫃の名を冠し、その兵器はやがて命を刈り取る。

能力を使はし、暴力や犯罪に手を染める能力者を鎮圧する為に開発したとされている。よつて「ARK」のみが携帯を許されている。この装備の有無だけで勝敗が決まるほどである。現に雨弓の力は通常の能力者の力を超越している。マッチ棒から火を出す程度、少し早く走れたり、旋風を巻き起こす程度しか見たことがなかつた雪哉にとつて、暴風のような狂氣の力を見せ付けられてはその装備がおぞましいものであることを嫌でも理解させられる。

だが、「ARK」の知識など雪哉には必要はないだろう。知つても知らなくても状況が変わるわけがない。そう、能力を持たぬ者にその装備自体が意味を成さない。

「引鉄を引くだけで行われる暴力……能力者は本当に、恐ろしいな」「それだけわかつてんなら抵抗すんなよ、な？ 利口になりや、もうちょっとだけ長生きできるぞ？」

力は脅威。絶対なる暴力の前で、無力は何も出来ない。

そんなこと、始まる前から理解していた。それでも諦めきれないものがある、だから抵抗はやめない。悪意から逃れ、生き抜くには、戦うしかないと再三呴いてきた。

「ムカツクなお前、そこまでわかつててなんで諦めねえ？」

「お前みたいに、力で捻じ伏せるというやり方が気に入らないだけだ」

「正義の味方氣取りつすかあ？ カツコいいねえ、カツコよすぎだわ、お前」

そして今度こそ、銃口が雪哉に額へ向けられた。

「種晶は確かに花晶に劣つているのかもしれない。それでも、強けりや問題なえ、何にも怖くねえ、お前の妹がはつきり教えてくれたわ。結局、何の力もないなら、普通にぶつ殺せれるつてなあ！」

「理愛は殺させない、俺だつて……お前みたいな奴に殺されるわけには、いかない」

「おお、いいぜえ、いいぜその威勢、それだけは認めてやんよ！」

テメエみたいなおもじろいのは初めてだわ、何も無いくせに、何もできねえくせに、御託ばつか並べておもじろおかしく格好だけ一丁前、だから最初にテメエをぶっ殺してやんよ…」

「雨引の敵意が全て雪哉に注がれる。これでいい、これがいいのだ。

雪哉は真つ直ぐ雨引に視線を、雨引は堂々と銃口を雪哉へ。

「だめ、ダメエ！ 兄さん、逃げて！」

「お前が逃げる、逃げてくれ……理愛、そうじやないと、俺の誓いは果たされない」

「そんなの、兄さんの価値観の押し付けじゃないですか！ わたしは嫌です、兄さんも」

「理愛つー！」

その叫びは、まるで全てを失った六年前に似た慟哭だった。

聞き分けの無い子供を叱るように、そして懇願するように、大切な人の名を叫ぶ。

「頼む」

「…………は、い」

そしてその願いが届き、雪哉は安堵する。そして、「出て来い……理愛は殺させないと、言つたはずだ」

その言葉に、木の影から現れた虹子。

「バレた？」

「バレるも何ぞ、さつきまで雨引といただろう……急に消えたなんておかしい」

そう指摘すると「そりやそうだ」と虹子は笑う。そして笑みは消え、雨引ほどに奮えてはいないが、向けられた敵意は雨引のものと同等、いやそれ以上のものだった。

「安心して、理愛……こいつ殺したらすぐに行くからね、私の邪魔を、邪魔ばかりする、異物。死んでよ、それで私はやっと落ち着いて理愛の相手が出来る」

虹子が卑下した視線を浮かべ、理愛を見る。だが理愛の前に立ち、虹子の視界には理愛が映らなくなる。そうやって邪魔ばかりする雪

哉を生かすことなど虹子は出来ない。確殺することだけを決意し、虹子は笑う。そして雨弓は銃撃を放つ。

理愛は走る。最後まで雪哉を心配し、走る。雪哉も面と向かって勝負する気など毛頭無い。有力と無力では出来ることなど限られていて。

「さて、やつとこをネタバレだ。オレの能力教えてやるよ」
教えてくれなくて結構。雪哉は構える。その構えは戦う為ではなく、逃げる為。まずはどれだけ時間が稼げるかだ。理愛を出来るだけ遠くへ、遠くへ逃がし、十分時間を稼げたならば自分も逃げる。どこかで破綻するのは目に見えているがやるしかない。やらないうま終わってしまうのだけは絶対に避けなければならない。

雨弓は銃口を地面へ、そして手を軽く振り払う。無風だった世界に突風が舞い込む。吹き飛ばされそうになりながらも、雪哉は地に足が埋没するほどに強く踏み締める。風が強すぎて前がよく見えない。

「しょぼい能力だろ？ オレのは「風」しか起こせない。風を使うことしか出来ないんだ」

かなり離れていたはずの距離が瞬きを一度しただけで埋まっていた。

そして気がついた頃には遅すぎた。

右拳が雪哉の頬に撃ち込まれる。衝撃と共に雪哉の身体は地面を転がる。何が、起こった？ 地面の上を転がり、そして止まった時には雨弓は雪哉を見下したまま、

「これがオレの種晶の能力、呼応風塵（ゲイル・ヘイル）だ」

人々が手にした異能には名が生まれる。

それは能力を手にした瞬間に、聞かされてもいないのに無自覚のままに理解できるのだ。

そしてその異能が人を更に上の段階へと進化させる。

雨弓の能力、呼応風塵（ゲイル・ヘイル） それはただ風を操る力。風だけなのだ。

それでも、その自然現象を思うがままに操ることが出来る雨弓。そ

の力が序列という、数値化された評価の中でも上から七番目の座につく所以。

瞬間に間合いを詰めたのも、自らの風でその身を飛ばしたからだ。自分自身をまるで弾丸のようにして、跳躍したのだ。そしてその速度のまま拳で殴りつけられれば、意識の一いつや二一つ根こそぎ刈り取ることも造作無い。

それでも、

「風、などで、俺を、俺を……！」

意識は途絶えず、ただ堪える。

「親切にしてやつたんだぜ？ テメエ、オレの顔面蹴り飛ばしたら

？ だから一発ブン殴つてやつたんだぜ？」

そして再び腰元のベルトに刺さっていた巨大拳銃を手に取る。

「折角、格好つけたんだ一瞬で終わつたら可哀想だと思つてよ」

「そりやありがたい、ことだな……感謝する」

「余裕ぶつこいてんじゃねえよ」

余裕など持ち合わせていない。

顔面を思いつきり鉛器で殴られたようなものだ、今すぐに泣き出してしまいたいぐらいだった。それでもそんなことは出来ない。理愛を守りきるまでは、どんな逆境も耐え切ると覚悟している。ここで終わつてしまつては、これまで受けた屈辱に耐えた理愛に申し訳がない。

「兄貴」

「虹子か」

倒れたままの雪哉を今までに撃たんとする雨弓に虹子の声。

その声が引鉄にかかった指を離した。雪哉は雨弓から虹子に視線を移す。そこにはまるで人ではない、何か別のモノを見る不快感だけを象った異質な視線を見せる虹子がいた。

「さつさと死になさいよ」

「五月蠅い、理愛を貶めるお前に殺されてたまるか」

そんな強気な雪哉の右手の甲を思いつきり踏み潰す。

雪哉は田を見開き、声にならない声で悲鳴を上げた。その顔を見て、声を聞き、虹子は屈託の無い笑みを浮かべる。

「そう、その顔が見たかった」

「サディストが……」

「アンタが勝手に付ける私の評価なんてどうでもいいわ、でも、いいの？ 私はアンタを殺したら理愛の所へ行くわよ。必ず行くわ。いいの？ 私を止めないとダメなんじゃないの？」

焚きつけるような虹子の言葉は明らかに雪哉の怒りを煽っていた。そんな安い挑発に雪哉は即座に乗りかかる。恐怖など消え失せ、雨弓に受けた傷の痛みも感じない。そして、すかさず立ち上がり雨弓がすぐ横にいるのさえも忘れて雪哉は自分よりも遙かに小さな少女に襲い掛かった。

「ふざけ、やがって……！」

「来なよ、無能力者。とつとと私を倒してみなよ」

言われなくとも、と雪哉は右腕に全身全霊を籠めて殴り掛かる。どれだけ無能力の存在であつたとしても、そんなことで決めさせてはいけない。何もかもが敵の思い通りに動くのならば、足掻かなくては、戦い続けなくてはいけない。だから、雪哉は拳を突き出す。力も無く、何も感じない、ただの拳で……有能なら結晶の力を持つ怪物に挑む。

「なんだ、これは……？」

それでも、

「ふふっ、威勢がいいのね。そこだけは理愛とそっくり」

雪哉の放った拳は、

「でも、いいのはそれだけ。理愛と同じ。性格は アンタの方が腐り切ってるけどね」

まるで薄い一枚の膜に守られていくよつて、虹子に聞くことはなかつた。

見えない壁を打ち付けたように。

衝撃は確かにある。何かに触れている感覚も、ある。

虹子の顔面に拳は触れているようにさえ見える。それでもまるでテレビ画面に映し出される虹子の顔を殴りつけたように変わらない。そして虹子は笑うことを止めず、雪哉を侮り続ける。

「アンタの威勢の良さは認めてあげる。覚悟も、信念も、勇気だって、全部認めてあげる。無能な肩が存外に扱われて尚、諦めず立ち向かうその姿勢だつて評価してあげる」

虹子が雪哉の左肩に触れ、そして悪魔の微笑みを。

やがて七色の輝きを孕む瞳の光が雪哉を呑み込む。

「だけど

虹壁レイン・ボーナルファは全てを遠ざける

触れれば遠くへ消失する唯一無一の絶対力。

種晶を超える花晶が持つ力。虹子の花晶に宿る力。

それに触れたものは壊れるしかない。身体がバラバラになつたようなどんな一撃が雪哉を完全に討ち滅ぼす。数十メートルは吹き飛ばされたろうか。木々をまとめて薙ぎ倒し、砂煙を巻き上げたまま、何もかもが壊れて消える。雪哉の身体は樹の海へと沈んでいく。そして闇の中へと消えて、もう見えなくなる。

「あつちやあ……虹子お、やりすぎだろ。いくらなんでもただの一般人ヒトだぜ？」

それは種でなく花を司る「本物」の力。

その力が与える威力は計測など出来ない。ましてや何の力を持たない人間が耐え切れるレヴェルの話ではない。あまりの惨状に兩弓も顔を蹴り飛ばした相手であつても同情せざるを得ない。

「触れれば、壊れる……それが私の『花晶』仕方ないでしょ、ムカツくんだもん。あの喋り方とか、頭の悪さ、殺したくなっちゃう

う

ただ望めば破壊を可能とする、そんな単純シンプルで雪哉は消えてしまった。

能力そのものも説明など要らない程に簡単な力。意識すれば触れるだけで壊せる力。「壊す」とは、消えて無くならることだ。吹き飛ばし、そのまま止まるまで消え続ける。初めて理愛に使用した

際はフェンスまでの短い距離を飛ばしただけで、それは力の殆どを制約し、息を吐くようなその程度の力の分配で使用しただけだから、理愛の身体が浮いただけに過ぎない。だからそうやつて虹子の感覚でその「破壊」の度合いを調整することは出来る。しかし虹子の怒りを買い続けた雪哉には慈悲も無く一切の優しさも見せずに能力の全開を使い、雪哉を滅ぼした。

「まあ、成仏したか……さすがに」

遺体を捜すのも億劫になる。完全に能力行使すれば塵さえ残らない。そんな凄絶さだけを形にした最高の能力。触れればということは触れたとしても発生する危険。触らぬ神に祟りが無いように雨弓は虹子の逆鱗に触れる真似は絶対にしない。しかし執拗なまでに虹子の機嫌を損ね続けた結果だ。自業自得だろう。

「はあ……はあ……が、ふつ、」はあ

樹に凭れ、血を吐き、額から血を流し、壊れた右腕を庇いながら屍の如き、生氣を失つた状態で生きていたのだ。神に等しい花晶の力をまともに受けて、生還しているのだ。虹子の表情がまるで鬼神のような酷く恐ろしい形相に変わったのを雨弓は見てしまった。生きていたのなら、どうしてそのまま大人しくしていいのか、命が惜しくないのか、異常すぎる行動を取り続ける雪哉の生き方を雨弓は理解できない。

「黙れよ」
「りあいかせ」

虹子の口調が変わった。

そして思いつきり真横に生えていた大木を殴りつければ触れた部分から真上が綺麗に無くなつた。

ろへ行かせろつてええええええええええええええ

ここまで怒り狂う蛇には雨も祝めでたが
絶望的な力の差を見せ付けられて尚、立ち上がり、致命傷を負つ

たとて同じ行動を狂つたように繰り返す異常者を前に虹子が耐えられなくなつたのだろうか。

时任雪哉に能力は無い。

全能なる結晶が舞う世界で、一片の能力も見せず、得ることもなく、覚醒めることもなく、それでも同じ行動を取り、同じ選択肢だけを掬い取つて来た。それだけが気に入らないのだ。何も出来ないくせに、何も達成できない、失敗しかない。わかっているくせに、それを認めようとしている生き方が。

雪哉は、逃げなかつた。

逃げられない、言うべきだつたらう。

身体の外も内も破滅している雪哉自身もどうして生きているのかさえ不思議に思つていた。それでも理愛を守るという一心が雪哉をこの世界に繋ぎ止めている。虹子が狂つたように叫びながら、動きながら、迫つて来る迫つて来る。迫つて

「死ねえつて、死ねつて、死ね死ね死ね、私の力見て、諦めればよかつたんだよ！ 黙つて寝てればよかつたんだよぉ！」

七色の光を纏いながら虹子が走る。瞳から漏れるような七光が落ちる。ああ、終わつてしまつ。一撃だけで雪哉はわからされた。やはり、能力というのは凄まじい。

人間なんてどうに先へ進んでいたのだと、自分がいかにちっぽけで、矮小な微々たる存在だつたなんてわかつてたはずだつたけれども

虹子の手が伸びる。その小さな手が、生者を死の深淵に誘う死神の手にしか見えなかつた。終わつて、しまうのか、

「守りたい……わたしだつて

」

ドスンと、雪哉の衰弱した身体に押し出す。

もう立つこともやつとだつた雪哉はその元力を押し返す余力など残つていゐはずもなく。

そして、その力の根源が、それは、雪哉の、

「理、愛？」

「生きて、兄さん、わたしは兄さんの為だったら……バケモノでもなんでも、いい……だから」

なんでもいいから

時間の流れが極端に遅くなつたのを感じた

その時間の中で雪哉と理愛が声を上げた

手を伸はし
その腕は

上冊

やめ、
る、
一

その伸ばした手が止まる」とはなかつた。

死神が雪苗ではな
く現愛に觸れた
そして

「やめなきゃなんかないやつだよ。」

その咆哮が、雪哉の大切なものを奪い去つたことを確信させた。雪哉を庇い、盾になり、吹き飛び、雪哉の身体に触れて、

理愛は笑う。

破滅の力を受け、消散する身体。それは白銀に煌きながら。

アハガのハの死ノ刀ニハカナガ

問

一
ただ、
わたし、
わたし
ね

消えてしまふのに、元が無事だと知つてそれに涙する理恵を見て

雪哉は何を言えたか、たゞ消える。
雪哉の世界を支える最後の柱が、
理愛か、消えてしまひ。

「わたし、兄さんの妹で、よかつた」

そして、理愛は、消えて無くなってしまった。

雪哉はガクリと膝を落とす。

あつという間だった。秒単位で雪哉の構築し、守り続けていた世界が終焉を迎えてしまった。もう何もできない。何もできるはずがない。終わってしまったのだ。この物語が、終わりを迎えた。

理愛の、妹の喪失が意味するもの、それは死だ。

理愛が死ねば雪哉も死ぬ。

そう病室で涙した理愛に約束した。約束とは絶対。誓いを破ることは許されない。

だから、死のう。

もう、死のう。死んで楽に、理愛の元へ。独りぼっちにさせてはいけない。きっとあの世なんて暗くて寒くて狭くて悲しい場所だと、雪哉は思っているから。だからすぐに追いかけないと、早急に自害して、さつさと理愛の背中を追いかけよう。

「ははっ、なんか理愛勝手に死んじゃった。手間が省けてよかつたけどね、花晶も手に入つたわけだし」

そんな雪哉の前で虹子は大声を上げて笑っていた。

手には巨大な結晶。銀色の結晶を手に、発狂している。その銀の結晶は理愛の身体に見えた花の名の結晶。それは理愛だ。理愛を、下衆が掘んで喰いている。

「すまない、理愛」

すぐに自殺して、すぐに昇天して、すぐに抱擁してやりたかった。でも、少し待つてくれと、雪哉は立つ。

「俺もすぐに逝く、だから少し待て、天国でも地獄でも、お前が待つ場所なら、何処へだって迎えに往ける」

呴く。

それはここにはいない理愛に向けられた言葉。

雪哉が理愛を守りたいように、理愛だって雪哉を守りたい。

同じ行動原理を持ち生きていたのだ。理愛が雪哉を置いて逃げ切るわけがない。わかつてはいたはずだ。しかし自分の価値観を押し付けすぎたのだろう。理愛は納得していなかつたのだ。逃げた振りをしていただけ。雪哉に危機が迫ればすぐにでも盾の代わりになれたのだ。

能力があつたのかもしれない。この状況を打破する屈強な異能があつたはずだ。しかし理愛は使えなかつた。光が溢れただけで、その銀の光は何もしてはくれなかつた。だから理愛は諦めた。しかし戦つことを諦めたわけではなかつた。雪哉を守り抜くと、それだけを諦めなければ戦えるから。だから、死ぬことなど怖くなかった。大切な人に見守られながら、逝くのだから。

しかしこの兄妹、本当に愚かである。どちらか欠ければ酷く脆いことを忘れている。雪哉は死ぬ。すぐに死ぬ。理愛を追つて死ぬだろう。だけど、まだ、死ねない。死ねないのだ。

「理愛を、還せ」

理愛の花晶を持つ虹子を前に、ここで終わつてしまつては理愛を葬れない。あれは理愛だ。あの結晶も理愛だ。理愛のモノは全て取り返す。全て終わつて初めて死ねる。だから、

右肩は上がらず、身体も動かない。それなのにまだ戦える。

どうして？

奪われたモノを奪い返さなければいけないから。

「妹もだけどテメエも十分ゾンビすぎるんだ、この変態兄妹がよお！」

「兄貴い！」

銃口を向ける兩方に怒号を上げる。

「こいつは私が殺すんだから、そこで見ててよお、ねえ、こんなイカレ野郎、もう一回終わらせてやるよ、大好きな理愛のところに力をせてあげるんだからさあー！」

三日月が唇に架かる。悪魔のよつなおぞましい視線を雪哉に浴びせ、命を略奪せんと虹色の終極^{おわづ}が世界を色彩する。接触による終結の壁が創造された。

そんな絶望を前に、雪哉はやけに落ち着いていた。
心は冷たく、視界は鮮明に。

左腕を握り締めた。包帯を巻いたままの「設定」の腕。その腕は何が掴める？ 何が掴めた？

「そうか、そうだった……な 」

答えは出た。

もう失うモノがない。失ってしまったのだから。
失つて初めて理解してしまった。

目蓋を閉じ、善惡の力を前に焦ることもなく、驚くこともなく、心を落ち着かせていく。

そして、見開けば広がる世界。

もうこの世界に未練もない。未練も恐怖も負そのものはもうこの世界に落ちていない。今あるのは信念を貫けず、覚悟など意味なく、理愛が死んでしまったという失望だけだった。もうとっくに諦めている。生きることは、もう止めだ。

それでも、復讐する。

そう、これは復讐だ。最愛を強奪した、最悪を穿つ為の最期の戦いだ。

「はは、ははあ！ 何、なになに？ 突進しちゃう？ そんなことしちゃう！ 意味ないって、ゼーんぜんつ、意味ないってえええええええええ！」

雪哉の暴撃に笑いが止まらない。

考え無しに、策も無く、ただ走行する雪哉がおかしくて堪らない。触れれば壊れて、消えて無くなる無敵と知つて、立ち向かうなんてただの死にたがり。

そうだろう、そうなんだろう、あれだけ溺愛していた妹が死んだのだ。勝手にぶつかって消えて死んでしまえばいい。だから最期ぐらい付き合つてやろうと、虹子は手を広げる。まるでやって来る子を抱き締めてやろうと期待する母のように、雪哉の憎悪も悔恨も何もかもを受け止めてやろうとする。その抱擁は死しか与えない。触れれば破滅するだけの災厄。

そして、雪哉は素人丸出しの大振りの左拳を振るう。

もう攻撃する為に使える部位はこれしかない。だからその左腕を

虹子へ。

その最初で最後の一撃、虹色の光に向けられた雪哉の意思、その意思是、

「えっ？」

虹色の光を突き破る。膜のよつな光が破れ裂けていく。

虹子の絶対の自信、完璧なまでの弱点などない能力。無敵、最強、それが、たった一人の無能力者の拳に破綻させられる。ただ純粹に左の拳を虹子の顔面に向けて撃つただけだった。

それが、触れれば終わる筈の結末を覆す。そう、結末が一撃で覆されたのだ。

炸裂する雪哉の左拳は虹子の顔面に叩き込まれ、小さな身体が放物線を描き、虚空を舞つた。そして何が起こったのかもわからぬまま、地面にその矮躯が埋もれる程に強く叩き付けられる。

「なんだ、なにを、なにを、した……？」

能力は確かに発動していた筈だ。

虹色の光が竜巻を生み出し、その防壁が虹子の全てを守護していた。触れれば消失を与える破滅の盾が消えた。もうボロボロになつた壊れた人形に成り下がつていた筈の雪哉がそこにいない。そこには全て失い、終わりの果てに立つ勇敢なる者。これで最期と決め、ただ理愛の結晶を取り戻そうと最期の職務を全うする兄の姿

しない。

そして、左腕を伸ばす。破れて汚れきつたズタズタの包帯。ずっと縛り続け、虚偽を包み隠していた白き布。それが解かれようというのだ。

そして、終にそれは外される。

「言つた筈だ、この聖骸布を外した時、それはお前を敵と認識したことのことだと」

外された包帯。聖なる骸を包む布が解け、封印が解除される。それは「設定」だった筈だ。

これまでもただふざけて複数用意した御伽噺のほんの一部。本の中の世界。幻想でしかなかつた。それは妄言の筈だった。これも妄想だった筈だ。

違う。

もしそれならば、雪哉の左腕は肩から指先にかけてどうして白き銀で構成されているのだ。その輝きが嘘ならば、雪哉の手は虹子の壁を越えることなど、出来なかつたはずだから。

天に掲げた左腕、そして右腕はその結晶の左腕の肘に置かれ、長い前髪の合間から見えた鋭い視線。今、ここに……全能結晶に挑む、無能力者が生まれた

「贖罪^{あがな}え、罪を背負い、ただ罰を受けろ」

最期の戦いが始まる。

1 - 17 全能結晶の無能力者（∞）

1 - 17 全能結晶の無能力者（8）

全能たる結晶に、今までに挑もうとする無能力者がいた。
そんな無能力者の話をしたい。

少し逸れるが話をしたい。
それをしなければ先へは進めない。

それは时任雪哉という無能力者が「失い」、そして「得る」まで
の出来事だ。

时任理愛は、本当の「妹」ではない。

时任理愛は、雪哉とは血の繋がらない義妹である。

雪哉が九歳の頃だつたろうか。
理愛は突然、姿を現した。

雪哉の父と母に連れられてやつて來た。新しい家族、妹になる。
雪哉は兄になるなんて

最初、理愛を見て雪哉が感じたのは違和感だつた。
唐突に現れ、家族だといきなりやつて來た。どうして理愛が「时任」の姓を手に入れることが出来たのか、それは今となつてはわからぬままだ。

事実を知る両親はもつ、いないのだから。

そんな雪哉の母の背中に隠れる理愛の姿は酷く怯え、震えたまま、
雪哉の顔を見ることなく、俯いたまま恐怖していた。

そうやって恐怖したままの理愛を見て、雪哉が最初に口にした言葉は、理愛を傷つけたことに変わりは無かつた。

「へんないろのかみだ」

変質するその銀の髪と瞳の色は、子供の無垢で純粋なままの心には、不気味に思えて仕方がなかつたのだ。だから雪哉の第一声は鋭利な刃で切り裂くかの如く、理愛の心を傷つけた。

それはいきなり自分の妹だと、家族だと、いきなり自分の世界が変わつてしまつたことに対する反抗だったのかもしれない。

そう、雪哉は理愛を妹と、家族だと、認めていなかつたのだ。

だが、いつか知るのだろう。

雪哉は理愛の本当の正体を、知るのだろう。

だから、それを知つてしまつた雪哉はもう理愛を拒めない。

だから

その銀の輝きを孕む左腕を、雪哉は知つてしまつた。

あの理愛が人で無い、別者といふことも知つてしまつた。

だから物語が始まつた時から、雪哉は知ることとなる。

あの六年前の地獄の日。

全てが書き換えられたあの日。

雪哉の世界を狂わせたあの日。

あの日、夢のよひな日。悪夢の日。

日を覚ませば雪の上。

炎上し、燃え盛る大地。そして結晶が降り注ぐ。

空を飛ぶ鉄塊が墜落し、雪哉の両親は炎に呑み込まれていた。だ

から雪哉は家族に「さよなら」を言う時間さえなかつた。両親は呆氣無く焼死し、雪哉は放り出されていた。

気がつけば額から血を流し、顔を押さえていた。

いや、押さえようとした。けれどそれが出来なかつた。雪哉の左腕は肩から根こそぎ持つていかれたのだから。鋼鉄に挟まれたのか、それとも飛び跳ねた鉄板が刃のよつに削ぎ落としたのか、原因はいくらでも考えられる。ともかく、雪哉の左腕は切断されていた。十歳になつたばかりの幼い少年に「えられた試練は、あまりにも過酷すぎた。

痛みは、無かつた。

神経」と、綺麗に切り落とされたからか、今となつてはわからないうが、ともかく思つたよりも不思議な感覚だつた。自分の腕が無くなつた　その程度しか考えられなかつた。

けれど自分の腕が無くなつていることよりも、大好きだつた父と母が焼き屑になつていることの方がずっと辛かつた。

「ああ、……ああ

どれだけ叫び続けたことだらう。

その叫びで何か変えられるわけもなく、泣いたところで何も返還されない。

地を焼き、雪のよづに白く染める結晶の下で、雪哉は大の字になつて倒れる。

消えた腕、喪われた家族。壊れた世界。冷たくなつていく身体、幼いながらももつこで終わつてしまつのだという絶望だけが雪哉に圧し掛かる。

手を伸ばしても星に手が届かないように、最初から叶わないことだつてある。

死んだ人間は生き返らない。この惨状を無かつたことになんてできない。もう両親は死んでしまつた。左腕は無くなつてしまつた。

何もかも、全てが消えて無くなつた。

何か 忘れている

仰向けのまま、動けない雪哉は消えることのない炎上した世界を見詰める。

確かにその炎は全てを焼き尽くせんと平等に焼き払つていたはずだった。

そんな業火の奥底から溢れ出る銀の輝き。

まるで炎はその銀光に触れぬように避けながら燃え盛る。その火の先に、炎の向こうにそれはいた。そんな幻想的な光景。銀の煌きを晒し、露出した光の中に、

「……おま、え」

时任理愛はいた。

銀の髪、瞳。一方的に雪哉の妹となつた少女。

何もかもが気に入らなかつた。独りでよかつた。家族として現れ。十足で雪哉の領地に踏み込んできたような、そんな理愛が憎くさえ思つていた。

そんな理愛は現世を彷徨つ亡者のように歩いていた。瞳には光が抜け落ち、虚ろなまま立ち尽くし、炎の中を歩いていく。銀の髪から放たれる光はまるで理愛を守護するように炎を遠ざける。

雪哉はずつと、理愛を非難し、批判し続けていた。

お前は妹ではない。

お前は家族ではない。

お前は氣味が悪い。

お前は家族じゃない。

誹謗し、中傷し尽くしてきた筈だった。

だから、きつと恨まれている。嫌悪を言葉にして並び立ててきたそんな最低。最悪の行為を繰り返してきたのだ。

だから、一人は「兄妹」になんてなれる筈がない。

そうしてきたのは自分自身だった。だからこのまま死ぬのも自業自得だ。距離を置き、突き放し続けたからこそその因果応報。理愛は雪哉を助けない。助けるわけがない。

それなのに、理愛は虚空を見つめたままの光無き瞳で、雪哉を見つめ、身を屈め、そしてそつと雪哉の身体に手を差し伸べる。差し伸べられたその手はとても小さく、氷のように冷たく、けれど「温かい」のは

「おれ、おまえに、ひどいことばつか、したのに……」
その手はまるで救済。

酷い言葉を投げ掛け続けて来た筈だった。

恨まれていても憎まれていても当然の仕打ちを与えてきたにも関わらず、それを許すかのように理愛は聖母のように雪哉を抱き締める。

子供の我慢だったわ。

家族の輪にいきなり入り込んで来たことを納得できなかつただけだ。たつたそれだけが理愛を傷つけた理由だった。一年もの間、ただ勝手に怨嗟を言葉にしてはぶつけて来ていた。本当に酷いことをしたと思う。だけど、それはもう消えない。その罪は決して消えない。

だから、それが雪哉の未來永劫、忘れることの出来ぬ大罪。

そんな罪悪に押し潰されそうになる雪哉の身体をそつと理愛が触れる。

そして抱き締める理愛の手が失われた雪哉の左腕に

「わたしは、選びます、選び、ます」

その言葉の意味を雪哉が知るわけがなく、けれど紡がれた言葉が光を形成し、銀の輝きは確かに雪哉を包んだ。

やがて太陽のように眩しい輝きを生み出したその光は雪哉の左腕を象つていく。

そして創造されたその腕は、銀の光を内包し、形を成す。雪哉の失われた左腕が、新たに創られ、雪哉の意識でその腕は身体の一部として動き出す。

まるで、それは魔法。まさに奇跡のように、雪哉の左腕が再生する。

そんな奇跡を呼吸するのと同じぐらい簡単にやつてのけたというのに、そんな魔法使いはただぐつたりと、目を閉じている。そして奇跡の発現者は雪哉の腕の中で眠り、雪哉は身体の上で動かない。雪哉もまた仰向けのまま理愛の身体をギュッと、その新しく手にした左腕で抱き締める。

けれど理愛の体温も感触も感じることは出来なかつた。確かにその腕は雪哉の思い通りに動いているのに、それなのにその腕にはまるで神経が通つていらないように何も感じない。無痛のまま、無感のままに、けれど動くその腕は、もう「人」としての腕ではないような、そんな気がした。

「……これは？」

しかしそんな変質した腕よりも、目がいつたのは理愛の肌蹴た服の向こう、胸元に埋まる銀色の結晶だった。髪と瞳に負けぬ程に煌くその銀が皮膚の上に埋没している。

やがて知らぬ間に雪哉は答えを出してしまつたのだ。

理愛は、人間ではないんだ、と。

銀の瞳と髪の人間なんて、いない。

失つた左腕を生み出し、胸には銀の結晶を、そんな魔法使いのよ

うな少女。

人間ではない違う者。

それでも、もう、雪哉は拒絶することを止めた。

ここまで十分拒み続けた。

だからこれは罪だ。妹を傷つけた罰。

消えた腕をもう元通りにしてくれたことに対しての恩義。
遅すぎるけれど、全部失つてしまつてから、一人になるのが嫌だ
なんて、そんなの傲慢だらうけれど、

「理愛、俺の、妹に、なつてくれるか 」

雪のように降り注がれた結晶の下で雪哉は問つ。
眠り姫のように田覓めることなく眠る理愛は答えを返してはくれ
なかつた。

この左腕は理愛がくれたモノだ。だからいつかその感謝を形にする為に、それまで、理愛を守ろうと決意したのもこの時からだ。
死んでしまつた家族、大事なモノが勝手に手から零れ落ちて消え
てしまつた。だから、理愛が雪哉と血の繋がりのない偽りだとして
も、本当の家族でなくとも、人間でなくとも

雪哉の妹になると、聞かされていたから。

その事実から一年も逃げ続けてきたけれども、もう逃げられない。
逃げることは出来なかつた。幼く、責任を全うできる力も無い、生
温い世界で生きてきた弱き者としても、それでも最後の一人にな
つてしまつた唯一の「家族」を守る為に、掴む。

だからこの手を握る。こうして雪哉と理愛は兄妹になる。

本当の家族は喪われ、新たに生まれた偽りの家族。それでもいい、
縋るしかない。孤独は嫌だ。おぞましいそんな闇の中を生きること
など考えられない。この腕がその証になる。この腕があるから、理
愛がくれたモノだから。だから、理愛と共に。

自分は選ばれたんだ。

理愛の言葉を思い出す。意図はわからない。意味も知ることはなく。

それでも理愛が自分を選んだのならば、生きるにじみない。

「選ばれた、俺は……選ばれた？」

ならどうすればいい。

選ばれたのならば、どうすれば、そうだ、自分を偽りう。雪哉は願う。自分が選ばれた存在だと。高位なる者だと。雪哉がいつも口にする「設定」の数々、その発端もこの瞬間だったのだろう。

勇者のように、世界を守る存在にでも選出されたとしても考えれば、それだけで十分狂える。この異常を自分の一部に出来る。人から逸脱した銀の腕、この腕を認めるには、そうするだけでいい。戦う為の腕だ。何と？ その敵はまだいないけれど。けれどそう考へるだけで救われる。

理愛が選び、与えた、この腕で、いつまでも理愛を守りう。そう、誓う。

だから雪哉は理愛から離れられない。

あれだけ憎んでいた筈なのに、今はとても大事で堪らない。

もう理愛しかいないのだと、そうわからされれば、おかしくもなる。

両親を喪い、腕を失い、その腕が別の腕に作り変えられ、妹となるその少女は人間ではない。そんな事実が雪哉を執拗に襲うのだ。おかしくならないわけがない。

手の中で眠る理愛を見つめる。

大丈夫、大丈夫だと何度もそう言い聞かせ、ギュッと握る。離すものかと。

今、受けた絶望を一度と受けぬ為にも、強く生きるのだと。十歳になつたばかりの少年が強い信念を抱き、前を向く。涙は止まつていた。もう泣くことさえ許されない。強く、強くと、そう言い聞か

せながら、自分を作り替える。心を改造する。

「うして、雪哉は「失い」 そして「得た」こととなる。

けれど、六年後。

別離と共に、その腕が雪哉に力を与えることなど、知る由もない。
そして「妹」の消失がその左腕に更なる覚醒おきなめを起こし、全能た
る結晶に立ち向かわせるのである。

なんて、最期の戦いの前の、くだらない戯言。

1-18 全能結晶の無能力者（9）

1-18 全能結晶の無能力者（9）

その銀の左腕を掲げ、雪哉は指差す。だが、そんな雪哉を嘲笑うように虹子はゆっくりと立ち上がる。そして顔を庇いながら、指と指の隙間から雪哉を睨む。その視線を浴びるだけで呪われてしまいそうな程に、虹子の発するその虹色の瞳は危なげで、おぞましい。

そんな呪詛を放出させながら虹子は痛みに耐えていた。顔面に受けた傷が痛む。痛覚などとっくに忘れていた筈だった。触れれば壊れてしまう。触れるから壊してしまった。そんな絶対無敵。その無敵を超えたことが顔の痛みより痛い。心が痛い。心が

自信を打ち砕かれるということは、耐え難い苦痛そのものだ。築き上げてきたものが瞬間で崩れ去るその様を悲嘆と呼ぶのだろう。無敵が効かない。最強も利かない。あの左腕が、憎たらしく銀色に輝くあの腕が、虹子の全てを破壊する。壊された。壊すのは自分の役目。同じことをした。同じ真似をされた。

「トキトウ、ユキヤア！　お前はあ！」

たつた一撃で終わるわけがない。

怒鳴り、喚き、そして狂う虹子を前に雪哉は構える。何も出来なかつた自分とはさつき決別した。それでもうこの世界から乖離する準備も出来ている。その前に、勝利を手向けに消えることを願う。理愛を奪つたこの敵を許すわけにはいかない。理愛の結晶を手にするこの悪が憎い。だから、戦う。これで最期。全て、終わらせる。

「お前はあああああああああああああ！」

先手、虹子は両手を前に出したまま、走り出す。

叫び狂いながら、虹色の光を帯び、雪哉を破壊しようと疾駆する。触れれば壊れる滅びの光。その絶望を前に雪哉は酷く落ち着いて

いる。どう動き、どうすればいいのか、自覚することなく身体が自動的に動く。ただ純粋に、素直にその左腕に力を籠め、手を開き、雪哉に触れようとする虹子の小さな手の平へ、雪哉は渾身の力でただ殴る。

虹の光を超え、虹子の手に雪哉の拳が触れる。

そのまま雪哉の拳は虹子の両手を押し返す。両手は弾かれ、無防備に。しかも雪哉の振り抜いた拳が既に元の位置に戻っている。だが追撃はしない。構えを解き、無防備のまま尻餅をつく虹子を見下ろす。その情けが虹子を更に発狂させる。

「なんだ、なんだよ、なんで止めたあ！」

「立て」

逆上する虹子に気も留めず、雪哉は人差し指を動かしながらたつた一言。

そんな余裕めいた表情も、感情も、何もかもが氣に入らない。

「何、それ？　何よ、それ？　何なのよ、それ？　それ、それ、それ、殺す、アンタ殺すわ、殺してやる」

「全く気品の欠片も無いな、女はもつと淑やかにだらう？」

「その言葉の次に『理愛みたいに』って言いたいんでしきう！　シスコンがあ、この変態があ！　気持ち悪い、気味悪い、氣色悪い、不気味不気味不気味、アンタ氣味が悪いのよー。理愛、理愛理愛愛つてえ、ずっとずっとずっと、アホの一つ覚えみたいに妹の名前、そんなに好きかあ！」

「ああ、そうだが？　それが……」

すました顔で、とぼけることもなく、悩むことなく告白する。

その何が悪いとさえ顔に出ている。どれだけ中傷したところで雪哉は砕けない。大切な家族に好意を寄せて何が悪い。その「好き」が何の好きかだなんて、どうでもいい。それでも、もうその好意さえ雪哉は寄せることができない。だから、

「それが、どうした」

雪哉が一步踏み出すだけで、まるで虹子の背後に回る映像を切り

取つたように、瞬間移動している。そんな超常を前に虹子は理解する。この男が常識を超えているその理由を。

「やうか、「やつぱり」、そうか！」

雪哉の左腕が伸びられる。その銀の手腕を虹子は躊躇す。そしてそのまま走り、雪哉と距離を置く。

「同じ土俵に上がられた気分はどうだ？」

攻撃は躊躇されたが、それが雪哉の強さを輝かす。

攻撃を回避した、ということは虹子は自分の力に不安を抱いたといつことになる。

躊躇する必要などない。触れば壊れるのだから。

だが、それをしないのは雪哉の左腕を脅威と認識したからだ。そうしてしまったことで虹子は自身の価値を下げる」ととなる。わざとらしく音を立てて舌打ちし、汚らしく唾を吐く。

雪哉は知らない。この銀の左腕がどのように作用して虹子の力を跳ね飛ばしたのか。

しかし、理由などいらない。意味など知る必要は無い。

この腕で怨敵を討つことができる。それだけで十分すぎる。

「ちょっと勝てる可能性が見つかってたらいで、はしゃいじやつて……ムカつくなあ、私の顔がメチャクチヤになっちゃつたじゃない。ふざけやがつて、その拳動も台詞も私の神経逆撫ですんだよ」

「勝てる可能性が見つかった。それだけで戦うには十分すぎるだろ？　お前達に勝てるのならば億分でも兆分でも、そんなの幾らでもいい。「零」でないなら縋りもする。だから、戦える」

それがたとえ天文学的数値であろうとも、確立が発生するのなら諦めるわけにはいかない。雪哉はそう考える。そしてその確立は明らかに「零」に近いほどに小さくない。大きすぎる程だ。一撃を与えたのだ。ならば終われない。勝利できる。必ず勝てる。

しかし、そんな雪哉の言葉に呆れ返り、呑び笑う虹子がいた。雪哉の言葉がおかしくて堪らない。雪哉の言動がふざけているようにしか見えないのである。しかし雪哉はふざけてなどいない。戯れで

はない、これはただの殺し合いでしかない。大切な妹を殺した殺害者を縊り殺す為の復讐劇。

そんな雪哉を馬鹿にし、虹子は笑う。その笑声は雪哉を否定しているようだった。そしてそんな声がピタリと止み、冷たい風が吹き抜ける。

「アンタが私に勝てない理由があるわ」「言つてみろ」

即座に言葉を返す。
そして即答される。

「考へてもわかるでしょ？ 経験よ」

虹子が屈んだと同時に、雪哉は無意識のまま身を竦めた。雪哉の真上で風刃が飛び抜けた。虹子がいた位置から重なるように雨引^{レイン}が銃を向けて立つていた。

「オレを無視すんなよ、交ぜや^{シコハダ}」

回転弾倉^{シコハダ}が廻り、撃鉄が落ちる。火花さえ見えない不可視が音も立てずに雪哉を食らうと螺旋を描きながら穿たれる。そんなおぞましき弾を左腕で力いつぱい地面を叩き、その反動で跳躍することで回避する。人間の範疇を超えた跳躍力を垣間見ながら、雪哉は森の海から抜け出し、満月を背に再び落下。

人間ではなくなってしまっている。

やけに遠くがよく見える。夜空の星が一つ一つ重なり合つて川のように流れているのが見える。身体も自分のモノではないように、ただ躍動し良く動く。飛べば羽根でも生えていくように空が近くなる。更には脅威を前に思考はやけに冷静だった。恐怖という言葉の意味さえ忘れてしまいそう。

銀の左腕が解放されてからといつもの雪哉は人間味を失つてしまつた。

それでも今の雪哉にとつては何も問題の無いことだ。これからは未来なんてない。将来は潰えた。世界は滅んだ。ただ今は理愛を殺した敵を殺し返すという、その願いを叶えることしか頭に無い。そしてそれが果たされた時、雪哉は本当の終わりを迎えるのだから。だから、見えないモノに恐怖することも、不安がる必要もない。もう何も無い。理愛の消失は全なる消失。とてもない存在感だ。その存在が消えて無くなってしまってはどうしようもない。だからもう雪哉は止まれない。止まることなんて出来ない。最期の覚悟だった。これを捨てれば瞬く間に雪哉は朽ちては果てていくことだろう。それでもいい。もうこのまま自ら消えたって構わない。

それでもこの憤怒は人間である証だ。感情が雪哉を生かす。理愛を殺した敵らが憎い。この憎悪を孕んで逝つてしまつては理愛に申し訳が立たない。笑顔で迎える為にも、笑顔で見える為にも、今はこの朦朧のような憎悪を出し切る為に、雪哉は飛翔する。人間を止めてでも、この敵を倒すことだけを

「勘違いしてもすぐわかるんだよ、アンタが私達に勝てないワケを「覚悟を糧に墜落する雪哉の真横に虹子がいた。

いつの間に、なんて思った頃には遅すぎる。虹子の手が雪哉に伸ばされる。雪哉はその手を左腕で庇う。そして直下したまま地面に叩き付けられる。何かに乗せられて射出されたみたいだ。虹子に触れられた時、雪哉は見えない力で押し出されたのだ。

「どれだけ不可思議、がアンタを守つても、こうやって私と戦えたつて、そんなの運が良かつただけじゃない。結局、能力を自分の手足のように使える私と、自分でもさっぱりわかつてないアンタなんかとじや差が開くのなんてわかりきってる」

経験の差、とでも言いたいのだろう。

それが雪哉が覺醒し発現させた能力なのか、それさえも定かではなく、その左腕はまだ輝くだけ。豪語し、啖呵を切つても、こうして雪哉は小蠅を叩いたみたいに潰れて死にかけている。何もかもが素人なのだ。どれだけ戦えたとしても、これが初戦なのだ。数え切

れぬ程に戦闘といつモノを経験しているであろう虹子と、初戦闘の小物の雪哉はどうしようもない距離でハンデを背負うことになる。

そして雪哉は背中から地面に打ち付けられた、

「やつぱり、死はないね、おかしいなあ……なんで死はないの、アンタ」

地面には小規模ながらクレーターが出来上がっていた。その中心に雪哉が潰れている。虹子がその上で雪哉に愚痴り、さらに踏み付ける。痛みはないが、動くことはできなかつた。しかし苦しい。呼吸もままならない。まるで重力が倍加しているようだ。

「私に触れたら飛んで、壊れて消えて滅びるまでぶつ飛ぶんだよね、それなのにアンタ、飛んでいくだけ。」つやつて地面に叩きつけられて蛙みたいな声上げて悶えてるだけ。もういいでしょ？ やつさと死んでよ、お願いだから」

そんな懇願、引き受けるわけにはいかない。

けれど虹子はどうしても死はない雪哉が恨めしいのだ。確殺の異能で、殺せないとなると苛立ちもする。傷らだけになりながらも五体満足のままというのが余計に腹正しいのだ。これまでだつてずっとじつとの異能は瞬間で終わりを迎えてくれた。それがこつも時間が掛かり、しつこく耐え抜いていることに吐き気がするのだ。さつさと死んで、消えてくれないと、でないと意味がない。

「俺から大事なモノを奪つておいて、死ねだの諦めろだのまだ言うか」

身体の痛覚が麻痺しているのか、身体は思うように動かないせに、まだ十分戦える。その気持ちだけは決して失うことなく、雪哉は声を上げる。

「言つや、黙つて死んでりやいいだけなのにそりやつて立ち向かつて来るから悪いんだよ、アンタ元々おかしくせに、その腕見せてからもつとおかしくなつてるんだよ」

「そりなんだろ？ 俺も吃驚している。まるで俺の身体じゃないみたいだ」

「そりやそうでしょう、アンタの動きがいきなり『人間のモノ』じゃなくなつたもの。すぐわかつたよ。アンタのその左腕は……花晶^{レムリア}でしょ？ そりやそうよ、そんなの当たり前じやない！ それの副産物で上手く動けるだけ！ 上手く進めるだけ！」

この左腕は、理愛が与えてくれたものだ。

ここまで来れば繋がっていくのも無理はない。六年前の地獄によつて雪哉の左腕は失われた。だから今、こうして雪哉の目に映る左腕は別のモノである。そんな左肩から下は人間の腕ではない別腕。その銀の腕は理愛の輝きから創造された神秘。そして人ではない結晶だった理愛がくれたのは、結晶の腕。その結晶は種晶ではなく、上位とされる花晶だつた。

「第一界層^{かいそう}よ。それは花晶そのものの能力を発動するよりも最初に付与するもの。だから所詮、現象程度よ。そんな超越^{ちかく}をくれるの。人より早く、人より遠くへ、人より高く高みへと進ませてくれるの」

花晶には決められた段階^{ステム}というものが内包されている。

その一つが第一界層である。これは全ての結晶に備わっている仕組みの一つであり、言わば初期段階となる。花に劣るとされる種晶^シは全てこの第一界層に行き着いただけで終着となる。だから身体能力 자체を向上させる程度の能力ならそれだけしかない。雨弓^{レイン・ボルト}のような風を操る能力ならば、それだけしか使えないのである。だから種晶は一つしか能力が備わらない。

しかし花晶は違う。固有能力の前にこの第一界層に到達するだけで、戦闘能力を飛躍的に上昇させ、強化し、この能力だけですむ微弱な種晶の有能力者と戦つて、勝つことも可能となる。本来の能力は更に一つ層を上げる必要がある。虹子^{レイン・ボルト}のあの触れるだけで全てを壊し尽くす「虹壁^{レイン・ボルト}は全てを遠ざける」もまた第一界層ではなく階位を上げ、発動させた絶対なる異能^{ちがひ}である。

「なるほど……な、こうして俺が人間味が失われてしまったのはこ

の腕が原因か

合点がいく。納得してしまつ。やはり自分は無能力者だ。

时任雪哉は無能力者。

それだけは変わらない。結局、何も変わっていなかつたのだ。
だつてこの力は雪哉のモノではないのだから。その能力の一部が左腕から発した力ならば、それは理愛のものだ。無能力者という称号を捨てるこだけは出来ないのだ。こうして地の上に倒れ、虹子に踏みつけられ、それでも戦おうとするその意思だけが雪哉の全て。この腕が無ければとつぶに肉細工に加工されて獣の餌だ。

「そうよ、そういうことよ。もういいでしょ？ わかつたでしょ？ アンタが何か出来たわけじゃなかつたつて、その奇妙な腕だつて、アンタ自身何かわかつてないじやない。それなのに、それなのにまだやるの？ まだ終わりたくないの？」

「そうだな、嫌だ。他人に結末を決められるのは耐えられない。俺は俺の成すべきことをする。それを果たすまでは、お前に抗つてやる」

「あつそ、そりや格好いい生き方ね、そんなにこれが大事なの？ これを取り返したくて仕方がないわけ？ なんで？ どうして？」

雪哉を足蹴にしたまま、虹子は手に持つ結晶を見せびらかす。それは理愛だ。どんな形であつたとしても、それが理愛の身体を創つていたのなら、それは必ず奪還しなければいけない。もう顔も見れない。声も聞けないとしても、それを抱き締めて死ぬ為に、ただ前へ手を。

「気持ち悪い、これはもうただの花晶。^{レムリア} それなのにアンタ……これ

を理愛だなんて思つてゐわけ？」

「それがどうした、俺は言つたぞ 理愛を、還せと」

どれだけ無様に寝転がりながら、傷つき汚れても、果たすべき使命さえあれば、後は勝手に結果がやつて来る。願え、動け、止まることなく前へ、前へと、それだけを思考する。

どんな形に変わり果ても、理愛であるならそれでいい。

「怖いわ、アンタが怖い。異常だわ、アンタは異常。異常者よ。こんなちつぽけな結晶さえも、妹だなんて思えるアンタのその頭の中身、気持ちが悪い。氣色が悪い。氣味が悪い」

「ああ、そうだな。でも、そうやって他人の過小に評価していくどんな気分だ？　上に立てて満足か？」

「ええ、そうね」

雪哉の言葉に適当に返事をして、虹子は上げていた手をふらりと下げる。そして結晶に絡み付いていたその五指が解かれる。その結晶が雪哉の胸へ。ゆっくりとその結晶を傷だらけの右手で掘む。まだ右腕はしつかり人間のままだ。けれどそれは脆く弱い、何も成し遂げることが出来ない無能の手。けれどその手で握らなくては意味がない。この腕が雪哉の腕なのだから。左腕は理愛に与えられたものであつて雪哉のではない。だからそれではいけない。雪哉の腕で理愛を抱き締めなければ

「ほら、お望み通りにしてやつたわよ。それでどうするの？　大好きな妹がそんな形になつても、それが妹って言えるの？」

「ああ、これは理愛だ。俺の、理愛だ。お前が殺した理愛だ。こんな形にしたのもお前だ。だから俺はお前を許さない。だから俺はお前と戦うんだ」

胸元で握り締めて、もう離さない。

これでもう大丈夫。憂いは潰えず、ただこの悲哀は雪哉の身体を奮起する。

だが激情する雪哉をただ憮然とした表情で虹子は吐氣を催している。人としての形は失われ、結晶に変化した妹を前に、悦に浸るその様が気に入らない。时任雪哉の全てが気に入らなかつた。心は折れず、信念も碎けぬまま、それどころか何か達成感に満ちていたよううにさえ見える。（いもうと）結晶を取り戻せたことがそんなに嬉しいのだろうか。それはもう喋る事も無い。人の形を成すことなど永遠に来ない。それなのに、どうして雪哉はこんなにも喜悦に溺れる？　わからない。だからもう、お仕舞いにする為に、その感情全てを押し潰して

しまおうと、虹子は力を揮^い。

「そう、だつたら 時任雪哉、理愛をずっと抱き締めたまま、そのままその素敵な思想^{しんしょく}ごと压死^{つぶ}しなさいよ」

「お前の重みで、俺の想いを压死^{つぶ}すだと？」

雪哉は鼻で笑う。

压死 重みに耐え切れず死ぬこと。

その重みとは、力によるもの。吹き飛ばし、叩き潰し、壊れるまで磨り潰す。

触れれば壊れる虹子の手。収束する虹色の光を纏いながらその手が雪哉に触れる。しかし雪哉はその手を左手で叩ぐ。ただ右から左へと平手を打つだけ。それなのにその光は失われる。虹が消え、虹子は呆然とその様子を見つめるだけ。そして時間が動けば虹子の形相が歪み出す。

「潰れるのはお前だ、お前が犯した罪の重さで！」

「理愛は勝手に死んだだけだろうが、お前の弱さが殺しただけだ、私のせいにするなよ！ この卑怯者^{ひきしゃ}が！」

その通りだ。何も間違つてはいない。虹子の言葉は核心そのものだ。

確かに殺したのは虹子なのかもしれない。それでも、その結果に至るまで雪哉に何が出来ただろうか。そんな悲しそぎる結末を招いたのは弱小で、脆弱な雪哉の無力さによるものだ。無能であるが故に理愛を守り通すことが出来なかつた。だから、だから、だから、「その結晶を大事に抱えたまま、何も遂げられぬままに、死んでしまえ！」

「ああ、そうすると、そつやつて死んでしまつぞ……だけどー」

この戦いの終わりが、雪哉の「終わり」だから。

理愛が形を成す前のこの結晶を抱擁したまま、死ぬことは決まっているけれど。

でも、それを決めたのは虹子ではない。だから、虹子の思い通りにはさせない。

虹子が後退し、雪哉はすかさず立ち上がる。そして虹子は跳ねる。

雪哉は駆ける。

虹子の七色が雪哉に迫る。幾度となく雪哉に襲い掛かるその全壊の力が雪哉へ向けられる。それでも雪哉は臆すことなく執拗に立ち向かう。

虹子の虹色の手が、雪哉の銀色の腕が交差する。

正対し、互いの憎悪が行き来した。しかし、その果てに行き着いたのは雪哉の腕だった。

虹子の額を雪哉の拳が打ち付けられる。まさにそれは鉄槌。結晶の腕は人の硬度をも凌駕していた。そんなものが直撃したのならば、無事ではすまない。一発目の直撃。虹子の手は雪哉の鼻の上で止まつた。雪哉に触ることが出来ない。能力は発動されない。そして触れられても発動されるはずの能力もまた発動されない。硬いその左腕が虹子の身体を叩き割る。

何故？

虹子は自分の身体が宙に浮いていることよりも、無敵である筈の能力が何の効力も見せないことにばかり気を取られていた。そして身体が打ち付けられても、答えが出ないことだけに困惑する。痛い。痛覚とは無縁の世界で生きてきた虹子にとって、この初めての痛みに恐怖した。痛い、痛い、そんなことよりも胸が、痛い。心が……痛む。

「教えてくれた、この腕が。そうか、『アンチ・マグナ』と言

うのだな」

雪哉は左腕を伸ばし、その花晶の名を呼んだ。

如何なる強固な力を撥ね退けるその左腕を手にしたとしても、偉大にはなれない。

それは雪哉が本当の能力者ではないから。

理愛がくれた腕。その奇跡の一片。願うことなく、気がつけば手

に入っていた。それに気がつかずここまで来てしまった。そんな人間が手にしたとしても、それで自分自身の価値が高まるわけではない。誇ることもできない。寧ろ滑稽だ。結局、雪哉は何一つ一切の努力もせずにここまで来てしまったのだから。だからお前は偉大ではない。お前はそんなものにはなれないといつ、そんな雪哉には相応しい名がその左腕に付けられている。

けれど、その腕は虹子の能力を無視する。その腕は左右されない。雪哉の左腕は周囲の能力を拒否してしまう。

「时任あ！」

吹き飛んだ虹子を見て雨引が叫ぶ。田の前で一度も殴られているのだ。怒声を吐くのも当然だ。

額に拳を打ちつけ、地の上に寝そべる虹子。虹子とは二倍の背丈はあるであろう男がそんな小さな少女に乱暴をする。これだけだと完全に雪哉が悪人であろうが、知つたことではない。

雨引が怒鳴り散らし、「ARK」という名の銃器を振り翳し疾走する。そして雪哉に襲い掛かる。遠くから撃つではなく、銃口を雪哉の身体に押し付けるように……これでは避けようがない。銃口が心臓に突き付けられる。しかし大人しく心臓を貪らせるわけにはいかない。危機を悟った瞬間、身体に命令を送ることなく自動的に防衛本能だけで行動する。左膝が動く。銃口を蹴り上げ、それは雪哉の心臓から空中に向けられた。撃鉄が落ちた頃にはその風の弾が空中に撃ち出された。この間、数秒も経過していない。

「殺す、殺す、殺すう！ よくも虹子をお！」

それはこちらの台詞だった。

雨引の感情は雪哉のものと同じだった。それでもまだ虹子は地面の上で悶えている。しつかりと生存しているのだ。こんなものでは済まれない。こんなもので終わらせる気などない。雪哉は間違いない。虹子を殺すだろう。理愛を奪つた殺「人」者を殺すだろう。そして、雨引には同じ感情を植えつけることだろう。理愛がどんな存在であるうとも人として括り続ける雪哉にとって勝手に化物という

カテゴリ 分類に分けられては我慢ならない。

「雨」「お前にも教えてやる。だから、俺と同じ田に遭つて、俺と同じように絶望しろ！」

復讐はただ殺し尽くすだけではない。
血らが受けた全ての負の感情を授けることもまた復讐の一つである。

だから必ず虹子を殺す。殺して、雨を絶望させて、それさえも殺す。殺してやる。そうしなければ雪哉の心は浮かばれない。

「だつたらやってみる、『じらあ…』

雨は銃を、使わなかつた。

その銃は「ARK」と呼ばれ、能力を格段に強化する代物だつた筈だ。しかしそれを使わないのは、

「なんだ……？」

身体を包み込む程に大きな風が通り過ぎる。

かまいたち

そして吹き抜けた風が消えた後、そこに立つ雪哉はまるで鎌鼬に襲われたように全身を切り刻まれていた。ガクリと膝を落とし、裂けた皮膚を見る。魔風が雪哉の肉を刻み続ける。そしてその風は視界さえ遮る。左腕で顔を庇いながら、けれど身動きも取れずに雪哉の身体は地上に縫い付けられた。

「言つただろ！ オレは風しか操れない。この「ARK」は上手く能力をコントロールするために使つてるだけなんだよ！ 使わなかつたら力の加減ができねえから使つてやつただけだボケ！」

荒ぶる暴風が雪哉に深い傷を負わす。

左腕を大きく振るう。しかしその風が搔き消せない。

「さつきみてえにやつてみるよー 虹子の力を消し飛ばしてみるよー！」

出来ない。

雪哉は何度も手を振るう。しかし暴風は消えない。勢いを増すばかりのその風が幾度となく雪哉を襲い、雪哉は何度もその風に攻撃される。虹子の虹色の壁を突き破る程の力が備わっているわけでは

なかつたのか？ 雪哉は考察する。

制限時間？ 使用回数？ この左腕は能力を打ち破れるのでは、なかつたのか？

虹子の絶対破壊の能力を発動させることなく、封殺したとなると異能を持たない雪哉であつてもその左腕の謎は十分解くことはできた。銀の左腕は能力を消し去れるものだと思っていた。しかし、違う。雪哉の左腕で「雨引」の能力を消し飛ばせない。しかし、一つだけわかつたことがあった。

「……この左腕、傷一つ付いていない？」

頬を、腕を、足を、全身に傷が作られていく。そんな中で雪哉の左腕は綺麗な銀のまま、原形を留めている。

「氣色の悪い腕だ、ぶつ壊れろよ！」

竜巻を起こしたまま、その中心に立つ「雨引」が再び「ARK」を取り出し、射撃を開始する。数発が雪哉の横に逸れ、そして一発が雪哉の左腕に命中した。巨大な大木さえも貫き通す破壊力で、その力は雪哉の身体を回しながら、木々を薙ぎ倒し、やがて止まる。

本来なら樹が折れる程の衝撃で飛んでいるのだ。即死もいことこのだが……しぶとすぎた。雪哉はまだ生きている。本当に頭部でも切斷しない限り活動は停止しないのではないかといつその生命力。雪哉はまだ、生きている。

「がはつ……ははつ、なかなかどうして……人間じゃないな、これは

確かに左腕には風の弾丸が直撃した筈なのに、雪哉の左腕はしつかりと形を成している。それどころかやはりビビリ一つ入ることなく銀色の輝きを放ち続けていた。やはりこの腕は絶対に壊れないようだ。なら、攻撃にも守備にも使える。

「时任、お前、まだくたばんねえのか？」

「くたばる？ 僕は、こうして生きているぞ？」

裂傷と打撲、骨折その他諸々と傷だけで雪哉は酷い有様。満身創痍もいいところだが、そこは忘却することを感じていないことにな

する。そうすることだけが今の雪哉に出来たこと。自分を偽ることだけが、能力の無い雪哉が出来ること。全てを失つたから、全ての感情を自在に作り、嘘で構成できた。理愛がいてくれたから、理愛の前では強い存在だと書き換えた。

「どうか、じゃあ死ね」

銃口は向けず、再び「呼応風塵」^{ゲイルヘイル}が雪哉の全身を撫でた。

雪哉のそんな突風に身体を支えることが出来ず、成すがままにその身を風に委ねることしか出来ない。そんな滅びの風が雪哉の身体を壊し続ける。左腕は壊れずとも、所詮は人族の身体である雪哉の耐久力は最早皆無に等しい。

突風が雪哉の身体を押し出しては、樹に衝突し、雪哉は吐血する。拷問のように雪哉に地獄を見せ付ける。しかし、これで地獄ならば生温いものだ。これ以上の地獄は六年前に経験している。そんな体験を前に、たかが身体を押されでは樹にぶつけられる程度、まだ耐えられる。身体に受ける痛みならば、まだまだ耐えられる筈だ。限界をとつぐに超えているにも関わらず、心は未だに余裕のままだつた。

風が止んだ。

雪哉は樹の下で、まるで死体のように崩れていた。

それを見下ろす「雨弓」がやっと終わつたと息を吐いては銃器を向けた。

「わかつたか？ テメエはよくやつたさ、虹子とあんだけ殺り合つたのも正直、感心してるんだぜ？ でも、やりすぎはダメだな。あと舐めた口も頂けねえ」

もう声も出ない。口元は少しだけ開いて、笛を鳴らすよつにか細い音を上げるだけ。もう指の一本も動かせない。しかし、雪哉はまだ意識を失うわけにはいかない。

だつて、あれだけ大事に握り締めていた結晶が無くなつていたから。

それだけで雪哉の閉じそうになる意識が覚醒する。

右腕にしつかり握り締めていた箸の結晶がない。理愛が、いない。

「お前、理愛をどこへやつた！」

あれだけ死体のように押し黙っていた雪哉が突然、声を上げたことに雨弓は驚いたが雪哉の昂ぶったその声につい返答してしまつ。手の中で氷が解けたように消えてしまった。けれどその融けてしまつた理愛は何処へ行つた？

「はあ？ あの石ころは虹子がお前に返してやつたろ？..」

「ふざけるな！ ない、ない、俺の手から消えてる、どいく、ど二へ！」

「知るかよ。なんだよ、さつさと死ねよ。もうこいつて、お前、犯罪級に変態だわ。虹子が苛立つのも無理ねえわ」

そして雨弓は銃をベルトに挿して、両手を合わせる。

左右の手の中で織り成す疾風。それは雨弓の手の中で形を作り、球状となる。

「まあ、これを手向けにしてやるよ。バラバラになれ」

小さなその暴風の塊。触れるだけで引き千切られそうな脅威を象つたモノ。それがこんな至近でぶつけられれば雪哉の左腕だけが地面に残り、それ以外の身体は塵芥ちじょうあくただ。

「死ねよ」

死にたくない。

こんな形で終わりたくは無い。

でも、身体は動かない。もう動きそうもない。

どれだけ自分を偽つても、これだけボロボロになつてもまだ行けるなんて、そう思つても限界なのだ。もうそれ以上は動けないのだ。終わりが、近づく。

『私の兄さんに、何をしてるの』

消えそつになる意識の中で、確かにその声が脳裏を掠めたのが分かつた。

『 殺しますよ』

右手が、動いた。雪哉の意思に反して雪哉を呑み込むはずの終わりの珠が両断される。そして雪哉ではなく、その背後の木々を呑み込みハツ裂きに細切れにしていく。だが、雪哉は生きている。しっかりと、はつきりとそこに存命していた。

何が起きたのかも、自分が助かつたことさえも、そんなことはどうでもよくなってしまった。もう終わりだと思った。やはり最後の最期で諦めという感情を抱いてしまった。だから、また情けないまま終わってしまうところだった。

けれど、それを拒絶した。雪哉の右手が意に反したまま動き出す。まるで見えない糸にでも引っ張られているようだ。そしてその右手の指先からゆづくりと白く光を放ち、雪哉は立ち上がった。理解し、認識し、開眼した。

そして、その糸は切れる。雪哉の意思でその右腕が動く。異常性が更に増長され、増幅される超越。けれど、そんな逸脱さえ、今の雪哉にはどうでもいいことだった。そんな進化よりも、雪哉は言葉を紡ぐことだけしか頭にない。

「なんだ、そこに、いたのか……」

結晶は失われた。理愛が消失した。世界から消えてしまったのかと、それは杞憂に終わった。だって、理愛は雪哉と一緒にいるから。理愛は雪哉の右肩にそっと寄り添うように、天使のように銀の翅はねを羽ばたかせながら、けれどそれは翅じやない。結晶だ。雪哉の長い銀の髪が好きだった。宝石のように煌く瞳も好きだった。

初めは嫌いだったくせに、嫌悪の言葉を並べてきたくせに、今は何よりも理愛の存在が大きくて、いなくなるだけで地面が音を立て

て崩れてしまつて、空が割れて破片を落としながら落ちてきやうで、そんな雪哉の世界を支える柱のような、そんな存在。それがいなくなつたとばかり思つていた。

もう一度と逢えないとさえ、思つていた。
だから全てが終わつたら、すぐに迎えに行こうと思つていたから。それが天国であろうとも、地獄であろうとも、この世界ではない別の場所であつても、異世界であるうが現実世界ではない何処か別の場所であつても、絶対に、如何なる手段を用いて邂逅を果たそうと思っていた筈なのに、それなのに、

『往こう、兄さん。わたしは選んだんです。兄さんと一緒に、と「わかつた、理愛。これで最「後」だ。だから理愛と一緒に往く』

お前がいたら、終われない。終われないだろうが。

だから雪哉は心の中で呟く。

理愛は生きていた。雪哉の傍らで、見守るよつこ、そつと、ずつと、そこにいる。

雪哉の髪が少しだけ銀に染まつっていた。

そして、

「なんだよ、どうこうことだよ、これは、これはよおー！」

雪哉の長い前髪の合間、黒い瞳の片割れが銀の光を放ち輝く。半身が銀に染まり、雪哉は理愛によつて力を与えられる。無能力者まま、けれどその身には全能なる結晶を超える能力が備わつてゐるであらう。

けれど、どんな能力であるとも、雪哉は構わない。
理愛がいる、それだけで十分だ。一人がいい。一人でいい。

一人で勝てないのならば、一人で一緒に戦えばいい。そうするだ

けで勝つ」となど容易いから。

「兄貴……」

「虹子……」

蹲つっていた虹子が口口口と足取り重しげに廊下の横へ。月下兄妹が雪哉を見る、理愛を見る。

雪哉も理愛もそんな二人を見る。出揃つた。ほほ異形と化した雪哉を前に驚きながらも虹子は前を向く。

「なんなんだよ、理愛も、アンタも……私より立派にバケモノじゃないか」

なんて手を広げ笑う。銀に染まる雪哉を見て、ただ笑う。

右腕は白い翅を生やしたような光の腕。左腕はただ純粹な結晶の形をした石の腕。異形なる両腕を見せつけ、雪哉はその腕を前へ。

「ならバケモノは一人でいい、お前の兄の言葉だ。俺だけが、それでいい。だからお前はその環から消えろよ、出来損ない」

雪哉は言葉を操り、虹子に先手を打つ。

怪物であるうが化物であるうが、そんな存在は一人でいい。雨引が理愛に言つた言葉。大きな力を掲げ、その力を自在に操り、思つがままに行動する。だから雪哉はその通りにさせてもらひ。理愛の為だけに、この理愛に与えられた力で、全て思うがままに。

「雨引」は眉間に皺を寄せ、血管を浮かせている。虹子もまた口元を引き攀りながら七色の輝きを纏い始めた。

「バケモノが、ぶつ殺してやる」

「ああ、殺してみろ、俺を殺してみろ。俺はお前を殺してやる」

雪哉は理愛を見つめる。

笑顔のまま、何も言わず雪哉の身体に寄り添つている。何も怖くない。怖いわけがない。一人で一緒に戦えるだなんて、最高ではない。

いか。

そして、雪哉は飛翔^とぶ。

あれだけ溢れそうな憎悪が鎮まつている。

だからこれで終わりにしよう。あの日の穏やかな日常へと帰還^{かえ}る

為にも。

1 - 19 全能結晶の無能力者（10）

1 - 19 全能結晶の無能力者（10）

月下虹子は困惑していた。

同じ花晶レムリアの少女。それを手に入れることが「ark」から『えられた使命だつた。

しかし、今、虹子の前に立ちはだかるは、虹子の知らない未知なる形成。

黒の中に銀が滲む。
黒と共に銀を灯す。

时任雪哉の身体はまさに銀で構成されていた。

両腕が、髪が瞳が。

その半身は銀で創り上げられ、そしてそれは理愛の面影を浮かばせる。死んだ筈の理愛が此処にいる。

花晶レムリアは結晶であるが、その結晶の中には幼い少女を眠るとされている。それが本当の結晶の形である。そしてその破片が種晶シードとなる。破片でさえ人が手にすれば限定的ではあるが能力を与えるとされている中で、花晶はまさにそんな異能の原型ともされ、そして力の頂点となる。

五千年も前からわかつていたことだ。人が形を成すより遠い過去。そんな世界がまだ出来たばかりからその結晶は存在していた。

そしてそんな人を超える、神秘の石の存在に人類が気付かなかつただけだ。世界を変革させる禍根は遙か過去からその形を見せていたのだ。

虹子もまた人ではなく、結晶。

そして田を覚ましたのは六年前だつた。

花晶の中で眠るのは少女。そしてその眠りは永劫覚めることはない。だから、虹子はどれだけ眠りについていたのかさえわからなかつた。千年？ 一千年？ もつと、もつと長い時間？ わからない。しかし田を覚ました時、「ark」がいた。奴らが虹子を田覚めさせた。そしてそれは虹子という名を与えた、役割を与えた。

虹子、というその名は「えられたモノであつて本当の名前ではない。

田覚めた後、「月下虹子」として名前を「えられ、月下雨」の妹という役割を「えられた。雨」の妹として生きることになった。ただ振りをするだけの、贋物の兄妹だった。

結晶が与えるその能力の名こそが、真名となる。

だから虹子の本当の名前は「レイン・ボナルファ」である。全てを遠ざける破壊の力。それだけが虹子の全てだった。だからその能力こそが本当の名。だから虹子は偽りなのだ。人間ではないのだから、叡智を刻んだ全能たる結晶。名前など、最初からその結晶に刻まれている。だから人の名を付けられたとしても、それが自分の名前だとは認めていない。雨の妹であるといつその役割も演じているだけにすぎない。

なら、理愛は？ 本当の名は？

そして誰が理愛を田覚めさせた？

「また奇妙な格好になりやがつて！」

考へ込む虹子の横で雨は拳銃を構え、躊躇うことなく発砲した。それも回転弾層に込められた全弾が雪哉に向けて撃ち込まれた。不可視の凶悪な風弾が雪哉を食らうとただ真っ直ぐに飛んで来る。しかし雪哉は動かない。回避の姿勢すら見せることもなく、ただそこ

で立つだけだつた。

しかし、風の弾が雪哉に当たるものだけを選び抜くように、三発は雪哉の真横に逸れ、そして残りの一発が雪哉に接近した時、雪哉はその光子を放ちながら、光る右腕を振り翳す。結晶の左腕ではなく右腕。その右腕を左から右へと振り払うだけで、雨弓の放った凶弾はまるで無かつたことにされ、そして振り払われた腕は光の軌跡を描き、残滓だけが残つていた。

「なんだよ、これは……聞いてねえぞ、ただ花晶を回収するだけだつて、そんな簡単な話だつたんじゃねえか」

雨弓の言つのも無理はない。

さつきまで無能な様を見せていただけの男が突然、花晶の力を持つ虹子を殴り、死ぬ一歩手前まで追い詰めれば、今度は死んだ筈の理愛が雪哉の傍らでそつと姿を見せ、そして雪哉の姿が現実から掛け離れたモノとなつた。

黒の髪に銀を交ぜ、片目は黒から銀へと変色した。そして結晶のような左腕と、光輝く右腕。これをどう見て人間と呼べるのか？ どう見たつてそれは異形そのものだった。

「化け物……」

「聞き飽きたな、それは」

再三としつこく言われては飽きもする。

雪哉には自分の姿が見えないから、今の自分がどれだけ人と異なつた形をしているのかはわからない。けれど、十分人間から逸脱していることだけははつきりわかっている。けれど理愛がいて、一緒に戦えるから、だからどうということはない。

雪哉は一步足を踏み出すだけで、雨弓の前に立つてゐる。腕を振り被り、そして拳を突き出す。瞬間で距離を縮め、攻撃態勢に入つてゐる雪哉を目にした時、雨弓は全身を戦慄かす。雪哉の右腕の形は、左腕の結晶を象つたものよりもずっと凶悪的なフォルムをしていたから。

爪先はまるで猛獸の鉤爪を模したように鋭く尖り、そして光は白

い翅の形を創造りながら、そんなを冷酷さだけを視認せらるその爪が雨引に襲い掛かる。

「避ける、兄貴い！」

そんな時、虹子が叫んだ。雨引はすぐにその場から転がる。そして雪哉の前にとてもない速度で打ち放たれたそれは、樹だった。

「なにつ！」

力を手にし、変質を遂げた雪哉でもさすがのこれには虚をつかれた。

まるで樹が巨大な槌のように雪哉に襲い掛かる。

それは虹子の力によって放たれた脅威。

触れたものを吹き飛ばし、壊れるまで飛ばすのなら、触れたものを射出し、それを弾丸のように扱うことも出来る。大木をまるで槌のように。

一瞬で壊れて無くなってしまったとしても、少しの距離ならば凄まじい質量と体積で雪哉を押し潰そうとするだけは変わらない。雪哉は飛び交う樹木を回転し、回避する。躊躇した樹木はやはり雪哉の後ろで粉塵になつて消えていく。けれども巨大な砲弾と変わらない虹子が撃ち出す樹。しかし虹子は雪哉に近付くことなく、そんな遠距離からの攻撃を繰り返す。

「どうした……お前は、お前の力で俺を殺さないのか？」

「アンタのその左腕が、厄介だから。だから私は悔ることを止めた。その姿、その力、私も覚悟したわけさ、堅実にもなる」

「そうか」

虹子はもう嗤わない。

明らかな異形を前に覚悟し、戦うと決意したその表情はまさに戦士。雪哉は最初から覚悟している。だからこれで同じ位置なのだろう。雪哉は左腕に力を籠める。そして真正面から虹子の槌を受け止める。

ただ左拳を振り抜き、折れた樹の砲弾に拳をぶつける。痛みなどなく、ただ衝撃による負荷が身体に掛かる。それでも耐えられた。

そして高速で振り放たれた拳はその巨木を破碎する。それは何らかの能力が発生したわけではない。ただその腕の硬度が常識を遥かに超えているだけ。

雪哉の左腕アンチ・マグナは偉大ではない。しかし凡庸ではない。雪哉自身は自分を凡庸であると思つてゐるかもしない。しかしこの左腕は違う。その腕は雪哉のものではないから。

「死ねえ！」

粉碎した樹の向こう、雨弓は飛び跳ね、「ARK」を構えていた。走りながら回転弾層を廻し再び装填。弾層こそ空ではあるがその中には大気が籠められている。雪哉は巨木を破壊し、拳を振り切つたことで一瞬の間が生まれた。雨弓は走る。撃たない。そして雪哉の懷に飛び込んだ。

「こんだけ近付きや、さつきの手品弾消しは出来ねえし、躲せねえだろお！」

雪哉が右腕を振るうことで雨弓の風弾は搔き消された。しかし銃口が雪哉の胸元に突き付けられている。これでは右手を振り翳すこともできない。

「だが、いいのか？」

「何？」

雪哉は慌てない。何度も危険を前にしてきたのだ。死を目前にしてこうして生きて来た。どんな危機も脱してみせる。だから、雪哉は「左腕」を振る。

「なんだと！」

雪哉は雨弓を攻撃せず、その武器を叩く。巨木すら塵に変える強固なその腕が「ARK」を粉々にする。雨弓は目を見開き、そして自分の武器が破壊されたことに悪寒が走る。しかしそれでも雨弓はまだ諦めない。両腕を振り、風が揺らぐ。武器を失ったところで力が失われるわけではない。そんな風の刃が至近で放たれ、雪哉の身体を切り裂く。

たとえ異形であろうとも、身体は人間と変わらない。左肩から抉

り裂かれた肉が真っ赤な鮮血を迸りながら地上を染める。それでも、
雪哉は崩れない。

「な、なんなんだよ！ テメエはよおー！」

危機よりも恐怖の方が大きかった。

肉を裂かれ、骨を碎かれて尚、立ち止まらないこの男が。
それどころか雪哉は膝を地に突くことなく、腕を折り曲げている。
右手の五指全てが折り畳まれていて。

「ははっ、でも、でもよお！ テメエはよおー、消せないだらうー！
さつさばじびつたけどよおー！ オレの風塵呼応ゲイルヘルはあ

雪哉は無言だった。

理愛は雪哉の首元にそっと寄り掛かり抱き締める。

「俺では、無理だろう。でも、お前は気づいてない」

雨弓の眼前には竜巻のような壁を織り成し、そしてその螺旋が雪哉を喰おうと口を開く。そんな大きな風に逃げることなくただ拳を、
前へ、前へ。

「俺には、理愛がいる」

風を裂く、光の右腕。翅を生やすその腕がその暴風を殺し尽くす。
青藍と輝くその光の中に理愛が微笑む。恐惶の風が止まる。雪哉の
右腕が振り上げられる。

「届くかよ、お前の手が、オレにー！」

『届きます』

理愛が呟く。雪哉はその言葉の通りにその手を振り抜く。
そして完全に風は死に、その死を超えて雪哉が駆ける。

『どれだけ離れていたって、どれだけ届かなくなつて、さつと
リゾン・ラーゴア』

雪哉が振り抜いたその拳が理愛の言葉と共に雨弓を打ち碎く。

雨弓の右頬に拳は叩き込まれ、雨弓の身体はグルリと何度も回転しながら吹き飛んでいく。そして樹木に身体を打ち付けられそのままピクリとも動かなくなる。

偉大ではない、けれどその手は頂に触れることがないは、出来る。

どれだけ遠くても、その差が離れていてもきっと届く。この腕はそれを叶える為の腕。

「兄貴、やられちゃったか」

「あとは、お前だけだ」

雪哉が地面に倒れる雨』から虹子に視線を移す。

「その両腕、お互いの欠点を補っているんだね」

「そういうことだな」

「私の能力も、兄貴の能力も、どっちもその腕に阻まれて届かない

なんて、そんなの、ズルいじゃん」

左腕は花晶を、右腕は種晶の能力を消し去り、封殺するという力。

それが理愛の力。けれど、

「理愛、「どっち」が本物?」

その言葉の意味が雪哉にはわからない。しかし理愛は虹子の言いたいことがわかっているようだった。

結晶には名前がある。そしてそれは一つだ。だが、理愛が雪哉に与えた左腕とその能力。そして右腕にも違う能力が備わっている。

『わたしは……』

理愛は答えられない。理愛もわからない。

「どっち? どっちでもない。どっちかだなんて言葉はいらない、理愛は俺の妹だ」

雪哉はその白い右手で理愛の頭を撫でる。それが本物かなんて、本当の名前なんて、そんなものは雪哉には必要のない答えだ。いま必要なものは雪哉の家族であり、妹である理愛の存在だけだ。それ以外は不要だし、そんなもの欲することもない。そんな雪哉の言葉に虹子は肩を震わせる。

「本当の兄妹でもないのに、それなのにどうしてそんなことを平然と言えるの? 自分の本当の名前も、ここにいる意味も、何も、無いのに、一緒にいることが出来るの? 手放せばいいのに、そうすれば本当の日常は返つて来るので、このまま理愛と一緒にいたって、この世界で生きていくわけがない。私達はいつまでも理愛を狙う

わ。大きな力は必ず征服されるものよ。一緒に生きるだなんて、兄妹で居続けることなんて、出来るわけがないのよ！」

「ふざけるな」

雪哉は歩く。

理愛は不安そうな表情を浮かべる。自分が何者かわからない。結晶であったとしても、本当の名前はわからない。未知が理愛の行く手に影をさす。けれどその陰影で理愛の心に暗闇を満たすわけにはいかない。雪哉が虹子に歩み寄る。そして、雪哉は怒りの形相のままに虹子の胸倉を掴んだ。

「出来る、出来ないを勝手に線引きするな。お前の価値観を俺たち

「兄妹」に押し付けるな」

「押し付けもする、そんな狂った思想、イカレた能力、私だって、「本物」だった筈なのに、私より強いってえ？　じゃあ私がここで負けたら、私は、私は何の為に生まれて来たのぞ！」

虹子の慟哭が森林を覆い尽くす。

結晶は能力を与える。それだけだ。能力を与えるだけの道具。それは花であるうが種であろうが変わらない。花晶であろうが、それは生きているだけに過ぎない。生きた部品。世界の一部でしかない。能力を持つた生きた結晶は、それを目覚めさせた者の道具になるしかない。

虹子は「あー」と、口元を押さえられ、役割を与えられ、そして理愛という結晶を回収しようとしたこの町に来ただけだ。強大な能力を秘めた花晶として、道具として、そんな道具として行動する虹子の前に同じ境遇に立ちながら、生きる意味を履き違えた花晶を見せられればおかしくもなる。

しかしそんな絶叫する虹子を前に雪哉は嘆く。なんて悲しい存在なのかなとう感じざるを得ない。

「何の為に、と？　生きてるなら、それぐらい自分で探せ。そんなことも出来ないのなら、お前の言つ道具とやらのままで、生きたまま死者のように彷徨つていろ」

それは雪哉自身にも向けられた言葉。

雪哉が生きるその意味は、理愛と共に生きること。

虹子の胸倉を掴む手が強くなる。結局、生きていれば生きるしかないのだ。時間は経過していくのだから、死なぬ限り止らなければ、足搔くしかない。

「だつたら、私は……アンタをお…！」

胸倉を掴まれながら虹子は暴れる。そしてその手が光る。虹色の光を付与させたその身体が雪哉の全てを破壊しようと暴走する。そして雪哉は手を離し、左腕を

「俺は生きる。だから、お前のような小さな壁に阻まれて堪るか！」「アンチ・マグナという結晶の左腕はただ虹子の腹部に叩き込まれ、そのまま押し出されていく。虹子の身体に埋没する七色の結晶が罅割れ、そしてその光がゆっくりと雪哉の中に流れ込んでいく。花晶を殺す腕。その腕で幾度と無く打ち付けられた虹子の身体は限界だつた。そして終にその身は人の形を保つことすら出来ず、花晶は碎け、虹子は消滅した。

「……なら、理愛に、教えて、もりおつかな」

散り際、虹子は自分の死を理解していながらも消える最中、そんなことを言ひ。しかし雪哉は答えない。復讐の対象に掛ける手向けの言葉など持ち合わせていない。

『あ……』

そして虹子が完全にこの世界から消え去ると、理愛がふと声を上げた。

「どうした？」

『いいえ、なんでも……』

「そうか

『そう、寂しかったのね、アナタは』

傍らでそう呟く理愛ではあったが、誰に対してもの言葉なのか雪哉にはわからなかつた。でも、構わない。雪哉は気にすることなく、構えを解いた。

だが、

「トキト、ウウウウウウウウウウウウウオオオオオオツツツ…」

まだ、終わりではなかつた。

のたうち回り、それでもがきながら雨弓が立ち上がる。これを倒して初めて終わる。全てが終わる。雪哉は両腕に力を籠める。

「終わりだ、雨弓」。終わつたんだ、そこを退けてくれ

「ふざけんなあ！ 虹子ぶつ殺されといて、こっちが潔く退けるわけにはいかねえだろお！」

ご尤もだつた。

雪哉も理愛が死んだと思い、特攻した。なら雨弓だつて同じだろう。たとえ結晶の塊であろうとも、自分の妹ならば、殺した相手を放置することなど出来るわけがない。

「アレだけバケモノを罵りながら、お前もバケモノの妹を手元に置いていた……何故だ？」

「はあ？ バケモノだらうが虹子はオレの妹だあ！ それが悪いか

！」

悪くなど無い。

もし、同じ道を歩んでいたのなら、共に手を取り合つことが出来るほどに共感できる感情を雪哉は抱いていた。どんな形であれ、自分の信じたモノならば、周囲に左右されることなく真っ直ぐに進むことの出来るその生き方。

「なり、どうして理愛を狙つ……俺の世界に攻撃する？」

「……はあ？ 花晶はバケモノなんだよ、そんなバケモノがこの人間様の世界にのうのうと生きていくことがオレは気に入らないんだよ…」

「雨弓」が大氣を纏つ。「ARK」を失つてゐる今の雨弓の能力は爆

発的な威力を持つている。あの拳銃は自らの能力をコントロールする為に装備していたものだ。

しかし今は違う。見境無くありとあらゆる万物を切り刻んでいる。そんな暴風域の中心に雨引が立つ。今、その壁に近付けば輪切りにされてただの肉塊にされてしまうのかもしれない。

「オレの妹はなあ、とっくの花晶のバケモノに殺されちまつたんだよー！」

暴風が縦横無尽に駆け巡る。樹木を切り倒し、自然を裂きながら、雪哉を喰い殺そうと暴れ始める。雪哉はそれを跳躍しながら、竜巻と竜巻の間を飛び抜けていく。少しでも躊躇えば、動くことを止めればその風にその身を貪られ、解体される。右腕に宿りし光であるリゾン・ラーヴァは種晶の力を潰し壊すことが出来る。しかし右腕に触れるということはかなりリスクを伴う行為だ。右腕は無事であつても、他の部位が飲み込まれれば右腕だけが現世に残り、それ以外が喰い破られてしまう。だから今は出来る限り躲し続ける。好機を見つけ、生誕した雪哉と同じ復讐者を穿つ為に。

「虹子の誕生日だったあ、綺麗な雪が降る六年前だあ、ケーキを用意してえ、プレゼントも用意したあ！」

回避に専念する雪哉は竜巻を躊躇することで精一杯だった。しかし、雨引の叫びが耳に入る。その声が聞こえる。それはまるで雪哉と同じ。六年前に地獄を見た者の悲痛なる叫び。

「いきなりやつて來た。氣色の悪い蟲が、オレの家族を喰い散らかしたあ！ 気がついたら、オレだけだ……妹はあ、虹子はあ、どうなつていたと思う！」

雪哉は何も答えられない。しかし雨引は言葉を続ける。

「はははっ！ 上半身が無くなつてよお、足だけだあ！ しかも片足だけ。おい、おいおい、オレの虹子、どこにいっちまつたあ！」

雪哉の動きが止まつた。前方から、そして後方から襲い掛かる暴風が雪哉を呑み込んだ。躊躇できなかつた。一番やつてはいけない停止という行動を雪哉は取つてしまつたのだ。それは同じだ

つたから。雪哉もまた六年前に、両親を炭にされた過去があつたから。

そんな映像を見せ付けられてしまえば、狂つてしまつ。壊れてしまつ。だから、あの時は理愛がいてくれたから、理愛が助けてくれたから堕ちてしまつあと一步のところで踏み留めた。

しかし雨「は？」妹が殺されたとするなら、それは……雪哉も同じことになつていたら、想像するだけでおぞましい。そしてそんなことを思つてしまつた時、足がピタリと止まつてしまつたのだ。だから雪哉の身体は暴風に巻き込まれ、大きく開いた風の顎^{あご}に喰われてしまつた。

「だから、オレは殺すぜ。花晶をな。『ark』はオレを選んでくれたよ。オレには力がある。オレには戦う才能がある。そして……『虹子』^{レムリア}をくれた。あれから六年だ、大きくなつてよ、綺麗になつてよお、オレが憎んでる花晶でも何でもいい、藁にも縋るつて言うだろう！ なんだつていいぜえ、矛盾だらうがなんだらうが、だけどよお、もう一度オレの人生が始まつてそう思つてたんだよ！」

暴風の向こう側、竜巻に呑まれた雪哉に雨「の言葉が聞こえるのはわからぬ。それどころか絶命しているであつた雪哉にその言葉が届くわけがない。それでも雨「は言葉を続ける。何度も叫ぶ。叫ばずにはいられなかつた。雪哉の存在が憎いから。自分と同じように妹を持ち、家族を持ち、それをしつこく守り続け、守り抜き、傍らに一緒になつて立ち向かうその姿が憎くて仕方が無かつたから。

虹子と同じ容姿。虹子と同じ名前。それでもそれが嘘だといつことを雨「だつて理解している。その現実から背を向け、役割を演じる虹子を妹だと、家族だと信じ込ませていた。

けれど雪哉を前にすると、そんな偽りで塗り固める自分を惨めだと思わせられていそうで、滑稽な自分の姿が許せなくて、だから、憤怒という感情で隠すしかなかつた。そつすことしか出来ない自分を更に呪つた。

それなのに、それなのに、まるで戒めのようになつて、もう一人の自分のような、そんな「もしも」の自分が消え去つた竜巻の向こう側で立つている。血塗れになりながらも、意識を保ち、呼吸を整え、はつきりとこの世界に繋がっている。

「それで、どうして欲しい？ 懐れんで欲しいか？ 同情して欲しいのか？ それでお前が救われるのか？ お前の心は保たれるのか？」

「いらねえ！ そんなもんはいらねえ！ でも、オレはテメエが憎い！ オレから何もかも奪つていくのは、いつだつて花晶だあ！ またオレは独りになつちまつたあ！ 時任お！ だから、オレは、テメエを、妹をぶつ殺すッ！」

大きく両腕を振り、またも創造される暴雨という結界。

雪哉は回避することを止める。そして左腕を前へ。その光が再び大きな翼を描き出す。しかしその白き光の翅さえも、今の雨^{おから}にとつては妖しく輝く墮天使のモノに見えて仕方が無い。

「なら、俺はお前を殺そつ。お前の世界を、お前の全てを」理愛の悲しげな表情も、今の雪哉は目もくれず、そして地上が陥没する程に強く強く踏み込む。そして飛翔した。直線的すぎるその行動に、雨^{おから}は呆れ返り、そして再び両手を握り、巨大な竜巻を召還する。

「なんだあ？ その気味の悪い右腕^{おから}でオレの能力を消してみるつてかあ！」

竜巻の数は前方に四つ。しかも全てが雪哉を囲むように蠢いている。右手を振り翳しても消し去ることが出来るのは一つだった。だから、それを消しても雪哉を囲むその檻が雪哉の身体を磨り潰す。けれど雪哉は前方の一つの竜巻を消すことしかしない。残りの三方から襲い掛かる、雨^{おから}はその光景を凝視し、勝利をこの手にしたと、心を奮わせた。

なのに、

「まだだ、まだ、まだだ、もっと、もっと遠くへ

届くのだろうか。触ることができるのだろうか。その腕はその光は。頂に触れることだけを叶える腕なのだろうか。なら、頂上に指先すら届いていないその右腕の名は偽りか？ 雪哉は心の中で叫ぶ。リゾン・ラーヴアという名を冠するその腕が、頂点に触れることが出来ぬなど、その名は嘘かと。真なる力を見せろ。その腕は飾りではない。そうだろうか。

「届け！」

雪哉の呼応が、力を与える。
雪哉の奮起は、力を消せる。

その左右の腕は、如何なる力も殺すことが出来る。

右腕の翅が大きく瞬く。その光が風を呑み、喰い返す。風は全て咀嚼され、全ての空間から風が死を遂げる。

「ふざけ、んなあ！」

雪哉は歩く。
「そんなふざけた異能あからがなかつたらあー。」
雪哉は歩く。

「テメエなんかよ……即死なのによー！」

雪哉は歩く、そして、その手が頂に触れる場所へ到達する。
「テメエも、いつか餃うんだよー！ オレみてえにー！」

そして、

「そんな結末は来ないさ。理愛を、守護まもる。だから、来ないー！」

ただ結晶の左手が、雨の身体を打ち上げた。

雨はそれ以上言葉を口にする事なく、朽ち果てた。意識が完全に途切れ、今度こそ地面の上で動かなくなつた。白由を剥き、無様に泡を吹きながら、もつ動きがない。

けれどその様を見て雪哉は何も言わなかつた。そのまままるで何か思い詰めたように。

『雨』はまるで雪哉の合わせ鏡のように思えた。もし理愛が、死んでいたのなら、あの六年間の乖離の果てで、理愛も一緒に両親と喪失していたとするなら、自分は『雨』のように壊れていたのかもしれない。背中に悪寒が伝つた。恐ろしい、そんなのは御免だと、雪哉は嘆息を漏らす。

『終わり、ましたね』

「ああ」

そして全てが終わった。

『兄さん、殺さないんですか？　この人を……この人を殺すと、兄さんは言つていましたが』

『殺さないさ、理愛が死んだから抱いた殺意だ、理愛が生きているのなら『雨』は殺せない』

詭弁かもしけない。

虹子は死んだ。なのに、『雨』は殺さないなんておかしいのかもしない。それでも殺すことは出来なかつた。人間を殺す選択を選ぶことなんて、そこまで強く生きて来れたわけではない。

『虹子のことですけど』

「ああ」

『死んませんよ、なんだか、兄さんがやつつけたとき、わたしの中に流れて來たような、そんな氣がしましたから』

「やうか」

雪哉はそれ以上何も言えなかつた。もしさうだとしても雪哉の手で、雪哉の意思で虹子を殺したことには変わりない。消える一瞬、理愛と同じように七色の結晶の塊になつたのだけはわかつたが、その結晶もまた粉碎し、そして霧散してしまつたから。しかし、そん

なことよりもだ

「理愛、お前、いつまで俺の肩に寄り掛かっているつもりだ?」

雪哉はついそんなことを言ってしまった。重みも感触も何も感じられないが、このまままるで磁石のようにくつ付いたままとこうのも考え物である。それにこの異形な容姿。半分が銀と色に染まる雪哉もさすがにこのまま山を降りるのは問題があると思った。

『そ、そんなこと言われましてもわたしもどうすればいいのか……』

「こういった力による融合は、意外と感情で操作できるものだ。やつてみる」

『に、兄さん……なんか詳しくあります?』

「くくく、装着型の聖異物は古き悪しき時代で見たことがあります」ケレゴリアム

「な……相変わらず、なんというか「死ね」といいたくなります」

『帰還かえつてきた。』

このふざけた会話。馬鹿みたいな兄の言葉。そしてそれを辛辣なままで剣呑な目で見つめる妹。これがいつもの形。それが瞬間で戻ってきた。あれだけ命のやり取りをし、死の横を歩いていた筈なのに、今はどじつしてこんなにも愛おしい。当たり前が、こんなにも美しい。

『と、とつあえず……』

理愛は雪哉に言われた通り、心の中で「離れる」とか「外れる」とかそんな感じの台詞を呟きながら、雪哉の身体から離れたいという意思を浮かべる。すると、どうだろ?……雪哉の身体はゆっくりと風前の灯のように光は小さく、そして消えた。白い翅も、銀の髪も瞳も、まるで元通り。雪哉の右腕は人間のものに戻り、左腕は結晶のまま、元の身体へと回帰した。

「す、すじい……兄さんの言う通りなんて」

まさか雪哉の言つ通りにしただけなのに、元の身体に戻れるだなんて思えなかつただけに、いつも簡単に事が運ぶと返つて怖いぐらいた。しかしこの世界に再び生還ることが出来るとは思つてい

なかつただけに度重なる奇跡の中でひつして再び地を踏む事が出来たことに理愛は感謝する。

しかし、そんな感謝の気持ちで溢れる理愛を前に雪哉は「う」と唖然としたままポカんと口を開けたまま動かない。ひつして帰つて来たといつのに、もう少し嬉しそうな顔をしてくれたつていいのに、なんて理愛は不満げに頬を膨らませるのだが

「理愛、どうしたんだ……その格好は……ツ」
「……………」
「へつ？」

自分でもやけに情けない声を上げたと理愛は思つたが、そんなことよりも雪哉が指差す方を見る。それは自分の身体。なんといふことか、理愛は自分の身体を見た時、驚愕するしかなかつた。

だつて、今の理愛の姿は一糸纏わぬ赤子の姿となつていたのだから。

「り、理愛……そんな破廉恥な姿、どうかと思つぞ。たとえ兄の前であつても、そんなことをしては、いけないんだ、うむ」

雪哉は「ホンと咳を。そして理愛は顔が爆発するであろう、ボンツ」という擬音が聞こえる程に

真っ赤に紅潮し、そして大事な部分を隠しながら、

「に、兄さんが破廉恥ですー！」

凄まじい速度で理愛の右拳が雪哉の顎を碎いた。

雪哉は声を上げること無く、そのまま地面に倒れた。

「ははつ、不味いな……血が出すぎたなあ、もう、無理だ……」

そしてそれが決定打。

出血死してもおかしくない量の血を流し続けた雪哉は限界だったのだ。そして今の一撃はそんな雪哉の意識を繋ぎ止める最後の一本の糸を断ち切る威力だった。雪哉の意識が消えて無くなるには充分すぎる。

そして、日常への帰還と一緒に、雪哉の意識も遠い別の世界へと帰還したといつ。

120 塞げ、言葉（ヒピローグ）

120 塞げ、言葉

深淵があつた。

闇黒の中、小さな光が見えた。
そんな小さな光を今までに喰い漬そつとする闇の下で、大きな円卓に座る人影。

そんな円卓を囲むようにして上り、声が並ぶようにして上りられる。端から聞けば、何を言つているのか、何を喋つているのかわからぬ程に、早く言葉が上げられる。そんな戦場のように激しい轟音を、会話と呼ぶのは間違いなのかもしね。だが、言葉はただ乱雑に撒かれていく。

「やはりいつになつてしまつたね」「ははっ、いいじゃないか。順調ではないかな」「いやはや、本物には勝てないか。力も、絆も、全てが劣るか」「妹役を当てて、兄に仕立て上げたつもりだったが、やはり脳味噌を少し弄つたぐらいでは、あの子らを止めるることはできないようだな」「酷いことを」「どれだけ此方が小細工をしたところで、あれは出鱈目だ」「星に手は届かない、わかりやすい存在ですよねえ」「嘘の席に座らせた時点で、敗北は決まつていたよ。無駄だつたかね?」「いいえ、成功ですよ。無駄ではないです。十分すぎますね、成功です」「そつか、それならよかつた」「……それで、どうする?」「ははっ、そうだねえ、じゃあ次は自分が組みましょーかね?」「君は少々、やり過ぎるところがあるが、今は人手不足だ。すまないが頼めるかね」「ええ、構わないよ。そろそろ新しい玩具が欲しいと思っていたところでして」「頼むから、君の持つているアレと同じようなことはしないでくれよ、使いモノにな

らない　なんて、そんなことになつてしまつたら大変だ」「そうですねえ、自分としても別にアレの強弱は関係ありませんので、ついついやつすぎてしまつて。でも安心してください、ちょっとだけ壊すだけなら問題ないでしよう。やりすぎて壊してしまつては自分が危ないですしね」「次はいつ?」「近々」「早急」「まあ、待ちたまえ」「そうだなあ、まあ、少しだけ時間を上げてもよろしいのでは?」「今回だけは特別に」「確かにここまで来るのに少々、急ぎ足だつたかと」「とにかくちよつとだけ待つてあげよう」「そうだな、まだ時間はあるか」「我慢できないね」「ちつとも」「でも、少し待つ」「しかし、いつも上手くいくと、怖いものですね」「最高級の餌で最高級の魚が釣れなくては此方も困りますがね」「まあ、いいでしょ?」「そうですね」

そしてあれだけ激しかつた音が急に止む。

時間が止まる。全てが止まる。

「諸君、もうじばりへの辛抱だ。永遠に近づく為に、今じばりへのへりへの注がれるは赤い液体。それは酒ワヤクだった。

猶予を

「では、「ファンタズマゴコロいつか来る永遠の日」の為に」

そしてその言葉と共に、合掌し、その血のような赤いワインを呑み干した。

「…………」

田を覚ませば、いつぞや爾なまこの凶弾で腹部を撃ち抜かれた時に運ばれた病院包帯だつた。

左腕には聖骸布包帯が巻かれていた。いや、ほほ全身に包帯が巻かれている。これでは重症患者だ。ダンプカーにでも撥ねられたか、なんて、雪哉はすぐに思い出す。

日常を掛け離れた非日常と対面していた。非現実を駆け抜けていた。左腕はまるで封印されたように白い布が異常を包み隠している。そして右腕は、「人間」のモノに戻っていた。

思ったより見た目はミイラのようにグルグルに巻かれているせいか酷く見えるが、案外身体はよく動く。痛いというより「重い」のだ。氣だるいだけで、動こうとするその意思さえ抱けば難無く身体は動いた。そして鏡を取れば、髪も瞳も半身銀と化していたその異形がまるで嘘のようだった。

眩しかつた。

外が、空が。何もかもが、眩しかつた。

朝だつた。

この陽射しを見る為に生きていたのだろうか。理愛が消えて無くなつたままならば、もうこの陽日を見るにも出来なかつただろう。あれだけ死ぬことさえ厭わなかつた雪哉が、今もこうして現世に存命している。

まるで諧謔。どれだけ眠つていたのかはわからない。しかし田を閉じる前、あの夜。理愛と共に飛翔したあの日、まるで絵空事のような、そんな世界で、戦い、勝ち、前へ進んだ。

だから、日常がある。じず

そして

「よつ、生きてるー！」

パイプ椅子背凭れに身体を預け、胡乱といつ腐った臭氣を放つ男。瀧乃曜嗣だつた。

朝日を挿むのも忘れて雪哉はその胡散臭い男を不審げな瞳で見詰めてしまった。

「いやあ、理愛ちゃんから電話があつた時は驚いたね。行つてみれば雪哉くん、ほぼ上半身裸でしかも血塗れで寝てるもんだから、オラチンの口から言えないと凄いことしてたと思ってね」

相変わらずだった。

道化が雪哉の前にいる。けれどそれは恩人。どれだけ不気味でも、疑わしい人間であつても、侮蔑を口にしてはいけない。

「程々にしてよお、連載できなくなつてもしらないよお？」

「勝手に俺の人生を書籍にしないでください」

「まあ、まあ、そう言わずに、生きててよかつたねえ。さつさと実感してよねえ」

「それは

」

言い切るより早く、曜嗣の言葉の意味を理解する。

雪哉のベットの横、小さな机に突つ伏して、頬の肉が押し潰れるぐらゐにそれは可愛げな寝息を立てて眠つている。理愛が寝ていたのだ。

「シイーっ」

曜嗣が人差し指を口に当てる、息を漏らしていた。

静かにしろとでも言いたいのだろうが、その本人が騒いでいたようにも思えたので納得できない。

そんな片目を閉じて、人差し指を立てる曜嗣（ヘンタイ）が小さく口出す。

「芸術的だよねえ、まるで聖母だあ。理愛ちゃんつて可愛いよね、ね？ 雪哉くん」

「ええ」

否定する気など微塵もないのと、すかむず答える。

「オラチンの嫁さんにして」

「芸術的な頭脳構造ですね、くたばれ」

曜嗣の発言を完全否定しつつ、死刑宣告しておく。

今はただ陽の光よりも、理愛に視線を。

これだ、これを守る為に雪哉は戦つたのだ。そしてここまで来た。幾度と無く試練は雪哉を襲つたものの、いつも何も失わずに来れたのだけは奇跡だろうか。

いや、それは違う。雪哉は首を横に振る。

これは勝ち取つたものだ。必然だ。決まつていたことだ。

雪哉は最後まで選んだ。

だから、これは、そう 選出だ。

雪哉は選ばれたのだ。

勝者は先へ進むことが出来る。そしてこれからも勝ち続けなければいけない。戦わなければいけない。いけない。

けれど、今は勝者の余韻に浸らせて欲しいと、雪哉は理愛の寝顔をジッと見る。何の為に逸脱たたかうのか、ただの無能力者が、何の力も持たぬ、出来損ないが、ただ与えられた力だけで、その先へ進もうとするのか、

「理愛と、一緒に……居たい、それだけなんだ」

それは単純明快で、至極当然のよう。同じ、だろう。そうだろう。

それでいい。

たつたそれだけの理由。小さな覚悟を胸に、信念一つで、世界の反転さえ耐えられる。

そつと雪哉の銀髪に触れた。

滑らかな絹のよつた感触。川のように流れるその長い銀につまでも触れていたいと指先がその銀の上を流れしていく。そして毛先まで指は伝い、やがて離れていく。

「んんっ……兄さ、ん？」

理愛はゆっくりと皿蓋を開け、皿尻を指で擦る。口を開き、その欠伸を両手で隠している。

そんな理愛を雪哉はただ黙つて見ていた」としか出来なかつた。何と声をかけていいのか、こんなにも近くで遠い。この不可解な距離感をどうすれば縮められるのだろうかと、雪哉は眉間に皺を寄せた。

「兄さん、あれから「また」一週間も寝ていたんですよ」「だがそんな距離感は容易く零になる。だつて動いたのは理愛だから。

立ち上ると、理愛は雪哉の横へ。

「まったく、心配させないでくださいよ。そりゃあ……「前」と比べればまだ我慢できましたけど」

結局、曜嗣に言われた一週間の謹慎の倍の時間、雪哉は学校に行かなかつた。行けなかつたと言つべきだらうか。しかし学年が上がつたばかりだというのに学業を疎かにしては、後に繋がつてしまつ。自業自得だ。受け入れるしかない。それでも、今はそんなことで後悔している場合ではない。

「あ、瀧乃さん」

不機嫌そうに苦言を並べながら、理愛は腕を組む。そして曜嗣が視界に入るとその腕を解いてペコリと会釈。

「やあ理愛ちゃんおはよう」

そして曜嗣は椅子から離れ、いつの間にやらタロットカードを何度も切りながら病室から退出しようとする。

「じゃあオラチンは帰るよ。トネで録つたアニメ見ないと」

そう言つて、手を振り病室のドアに向かって、

「選んだんだろう? 進めよ」

いつもとは違う真面目な口調。

茶化すようないつもの調子でもなく、歎てなければ聞こえない声。だがその言葉を雪哉ははつきりとしっかりとその耳で聞いていた。言われるまでもないと、雪哉は一切の反応を見せず無表情のまま、

ただ黙止した。

曜嗣は、病室を退出した。

「今回ばかりは瀧乃さんにも感謝します」

曜嗣のことはいつも悪いように言つ理愛が世辞を言つのはかなり珍しい。

「俺を負ぶさつてくれたとか？」

「まあ、その通りです」

この辺りの話は過去のことだ。血塗れで上半身裸で倒れていた、などと無様な姿を見せていたことは曜嗣から聞いている。だからもうこれ以上格好の悪い話はしたくない。雪哉はそれ以上は聞くことはせずこの話はここで切り上げる。

とは言つものの、やはり雪哉から会話を切り出すのは難易度が高いようだ。

瞬間で距離を零にしてくれた理愛も黙り、気まずい空気だけが流れている。立っていた理愛は自分が座つて椅子に腰掛けていた。

やはり、気まずい。

おかしい。兄妹だらう。どうしてこつものように軽い気持ちで会話を切り出せぬのか。

相変わらず無能な兄の姿が、そこにはあった。

「兄さん、お身体のほうはいかがですか？」

「大事無い、と思う。見た目は大袈裟だが痛みはない。大丈夫だ」

そう言つて、手を上げてみる。

本当に痛みは無かつた。裂かれたし、折れもした。身体は酷使し、壊死こわれもした。それでも今、こうして病室のベッドの上で五体満足のまま生きている。

しかし、会話はここで途切れた。

「きよ、今日「も」いい天氣ですね」

理愛が気を利かせてそう言つたのだが、よもや会話の出だしに詰まつたとしてこんな切り出し方を使うとは思わなかつた。しかし、

「今日も? 昨日「も」晴天だったのか?」

雪哉が田を覚ましたのは今日。昨日の天候は存じていない。雪哉の言い回しに理愛は気がついたのか、申し訳なさそうな顔をして床を見つめている。雪哉はしまったと思いつつも、吐いた言葉は呑み込めない。取り返しもつかないので逃げるよつに黙殺することにした。

「昨日は、雨でした」

「ああ……そうか……」

致命的すぎる。

結局、ここで再度会話が途切れてしまう。

弾を撃てば不発する理愛に、そもそも装填する弾がない雪哉。状況は最悪だった。

数分程、経過しただけだが正直雪哉は息が詰まりそうだった。白いベットの上で溺死したくはない。とにかく、何でもいい。雪哉は小さく呼吸を整える。

「兄さんにお願いがあります」

意を決した雪哉だったが、その覚悟は徒労に終わった。やはり最後まで先手を打つて来るのは理愛だった。

「言つてみろ」

「いつも、あります」

「いい、言つてみろ」

「わたしは、兄さんの妹でいてもいですか？」

「それは願いではない。叶つているのなら、願いとは違う。そういうことは言つたな。聞きたくない」

雪哉は鋭利な刃物のような言葉で理愛の願望を切り捨てた。

聞きたくはないのだ。それは雪哉の願いだから。自分が兄でいいのかなどと、そう思う。だが、雪哉もまたそんな言葉を吐くことはない。その言葉は自分の弱さを口にすることだから。だから、理愛のそんな台詞が、まるで自分の台詞のように聞こえて、理愛を叱咤する為に雪哉は返答したのではない。自分の弱さを違う声で聞かされているような、そんな気がしたから。だから、聞きたくなかった

のだ。

「では、一つだけ」

「それでいい」

理愛は床に視線を向けたまま、雪哉を見ずにスカートを両手で握る。そんな強く握つては、皺になつてしまつ。止めろと言いたかつたが、雪哉はただ理愛の次なる言葉を口にするだけを待つた。「わたしが何なのかわかりません。けっしょう花晶けっしょうだなんてよくわからないですし、生まれた頃の記憶は殆どないです。わたしの記憶は兄さんの「妹」になれたあの日からしかないと言つてもいいです。だからわたし、何のかわかりません」

理愛が立て続けに言葉を流す。その言葉の濁流を雪哉はただ受け止めるだけ。

「わたしは、「わたし」を知りたい。だから、兄さん、わたしと一緒に探してくれますか？」

「それならお安い御用だ」

自分がわからない。未知という存在。それはとても恐ろしいことだ。

自分が何なのかなんて、そんなのおぞましいじゃないか。

結晶の子。種を超える花の結晶。生きた結晶。「行き」続ける結晶。

異常なまでな力が、世界を変えてしまう。

理愛が雪哉と同じ高校へ入学して、たつた一ヶ月。雪哉も理愛も、生き方を随分変えられてしまった。たつた一度の戦闘で全てが終わつたとは思えない。それでも、今まだ。

だからこの戦いは、手に入れる為の戦い。

平穀を、記憶を、全てを手に入れる為の戦い。

理愛の銀の瞳に意志の光は強く、雪哉は返す言葉が見当たらなかつた。

それが理愛の願いならば、叶えてやれるのならば、こんな自分で

よければ、なんて そう思つ。

だが、それだけなのだろうか？

願いを叶える為の助力を貸すだけで、いいのか？

それは違う。

「なら、俺の願いも叶えてくれるか？」

「ええ、わたしが出来ることならなんでも」

それなら何だって出来るな、と雪哉は心中で呟く。

「理愛」

「はい？」

「好きだ」

「はい、

はいっ！？」

頷いたと思つたら、頷きながら理愛は大声を上げていた。病院では静肅に。後で看護婦が飛び出して来て、怒られたとしてもそれは雪哉のせいではない。原因は雪哉にあるだろうが。

「い、いきなり何を言つてるんですか！」

「いや、本当のことだ」

事実だ。

血は繋がらず、人としての繋がりも無く、人間の兄と結晶の妹といふ関係。

ずっと守りたい存在。六年前の地獄から生きる意味をくれた存在。左腕を、絆をくれた。与えてくれた、掛け替えの無い妹。

だから好きだ。この想いに偽りは無く、喻え世界がそれを狂つていると選別しても、世界という天秤から墮ちたとしても、それは世界の分別でしかない。雪哉は此処にいる。理愛の手を取る。躊躇いなんて最初から無い。嘆きなんて吐いた覚えも無い。何処までも往ける。

でも、それには理愛が必要だ。だから、

「理愛、俺の手を取つて欲しい。これからも、この先も」

信じて欲しい。

それだけだった。

格好の悪い処ばかり見せて来た。無様で、滑稽で、軽蔑され、唾棄されてもおかしくない姿ばかり見せて来てしまつた。それでも、信じて欲しかつた。

だから、雪哉の言葉は切望だつた。
理愛を失うことが、終焉だから。この手を取つてくれるだけ下さい。それだけで先へ進める。

「死ね」

そんな雪哉の言葉に理愛は辛辣な一言と剣呑な視線で責め立てる。
「そんなこと言わなくていいです、兄さん。わたしは兄さんと一緒にいたいだけなんですから」

その手が包帯で包まれた雪哉の傷ついた手を握る。

冷たく、氷のような手。けれど、この冷たさが、今は心地良い。
終わらない。まだ、終わらない。終わりにはまだ早い。

まだ始まつたばかりなのだから

「べ、べべべ別に、兄さんのことが好きだからとか、そんなんじやないんですから。そ、そりゃあ、兄さんのさつきの台詞好きはび、びびっくりしましたけど、ともかく、わたしさですね、そのです
ね、ああ、なんですかね」

言葉が破綻していた。最後まで言い切れていない。

そんな狼狽する理愛の表情を見て、雪哉の頬は緩み、口元が綻ぶ。
ああ、その顔が見たかった。その顔だけを見ていたい。

雪哉は理愛の頭を撫で、そして自分の顔へ近付けた。

そしてそつと理愛の言葉を、塞いだ。

〔 パート 059 〕

120 塞げ、言葉（ハロローグ）（後書き）

一ヶ月とちょっとでしたが、ありがとうございました。
こんな感じですが、まだなんか続きをやつです。

登場人物・用語集（1）（前書き）

ネタバレを含みます。「protologue」・「兄妹」を読み終えてからの閲覧をお願いします。

無事に序章を書き終えることが出来たので作者の息抜きで書いたものです。

本編でちゃんと説明できていない用語とかの登場人物の紹介とかを下記に書いていきます。

作品の世界観をブチ壊すような書き方をしているので、あと別にいらないような説明もされていますがお気になさらずに。

登場人物・用語集（1）

Ark

アーク研究機関。六年前の結晶の飛来。墮落によって姿を見せた結晶。

その結晶の研究をするために設立された組織である。しかし結晶は実はすでに数千年年以上前に発見されており、ずっと前からその研究はされていた。

ARK

「Artifact・Radical・Knows」の頭文字三つを重ねた用語。
結晶を科学の力を用いて抽出し、能力者の力を増強させる為に作られた謂わば「武器」

本来の「科学」の意味とは語弊がある。この装備を元に、使用することで能力を増強することで意味を成す。また能力を安定させたりと恩恵は大きく、多い。ちなみに形は様々である。

アンチ・マグナ／それは偉大とは違う

包帯で隠した雪哉の左腕に秘められた「異能」だが、その左腕は理愛に与えられた腕であり、その腕の能力であるからして、雪哉は結局ただの無能力者である。

包帯を解けば透明なその結晶は姿を現す。結晶と同じ透明度。そんな不思議な腕。

とても硬く、頑丈。傷一つ付かず、その強固は盾として使う」と

も出来る。

そして本来の能力は触れれば「花晶」（＝「花晶」に関しては後述にて記載）が発動する能力の封殺が可能とされている点。しかし花晶の能力「のみ」に有効。

凄まじい能力だが、欠点がある。偉大ではない。そして雪哉自身、偉大ではない。

査定団（イグザミナ）

Arkが作った戦闘集団。異能等を使用し、治安を乱す者を裁く集団。

ただの行政機関ではどうにもならない場合、査定団が動くことになっている。また能力を見極める為に動くこともある。

最期

死^おわりの前。

最後

終わりの前。

界層（かいそう）

花晶（レムリア）に秘められた異能の段階の事を指す。

本来、結晶が与える能力は一つだけしかない劣悪品とされているが、その結晶の中でも頂点とされている、花晶には段階を踏むことで能力が強大なものへと進化していく特性がある。

まず「第一界層」だが、これは潜在能力を飛躍させる。その為、

運動能力や反射神経、五感が超越される。よってこの時点では十分戦うことは出来る。またこれは能力そのものを使用しているわけではない。所持者の補助のよつたものである。

そして「第一界層」からが本来の能力であり、その花晶の基本となる。ここからは千差万別であり、能力は様々なので省略する。更にその上

種晶（シード）

結晶の下位。持つのではなく、身体に埋めることが必要。しかし装備しただけで能力を発動できるわけではなく、選ばれた者だけが使用できる。

これにより有能力者が無能力者が決まることとなる。今や高度な能力を使える人間が未来を有望されることとなつている。

そんな世界に仕立て上げてしまつた透明の石である。

そんな世界の摂理さえ変えた結晶も、所詮は下位でしかない。花晶から零れたただの断片。そんな搾りカスが今日も人を狂わせている。

種晶保有検査

種晶は身体に埋め込まなければ意味を成さない。よつて、見えない部分に埋め込んでいる可能性もあるので、それを調べる必要がある。

これは国の義務で定められている。

序列（じょれつ）

能力を持つ人間を数字によって分類している。

それは四十三位まで存在する格差。

当然、数字がなければ腕のある能力者といふことになる。

聖骸布（せいがいふ）

雪哉の左腕に巻かれている白い布。

ただしただの布。どこにでもある包帯。

どこぞの神様を巻いた聖なる布ではない。ただの、ただの布だ。何の意味もない、何の役にも立たない、異形を覆い隠すだけの布。

しかしそれはスイッチだ。

敵と認識した時、外される。攻撃態勢に移行する為のスイッチ。

厨二病（ちゅうにびょう）

インターネットスラング。

それは、人に幻想を抱かせる観得ぬ病。妄想が人を変える。

本編の主人公である時任雪哉ときといゆきやが疾患している。

この症状は人を別物に変えてしまうおぞましい病であり、タイプも千差万別であるが、時任雪哉は凄まじい力を秘め、その力を隠し、いもしれない謎の組織と戦い続けているなどという夢想を起きたまま見ている。勿論、発症した理由は他にある。

ただ、この病は特効薬や効果的な治療方法も見つかってはいない。罹れば終わりである。

時任 雪哉（ときといゆきや）

本編の主人公。高校二年生。無能力者。

六年前の飛行機墜落事故の被害者であり、唯一の生還者。しかし、その時に左腕を損失。理愛に「えられた左腕が変わりとなつていてる。

前髪を無駄に伸ばし、左腕には包帯を巻いているという不審者。勿体無いのは170センチ後半の身長で、一般的に美形に分けられる容姿ではあるにも関わらず、「厨一病」^{かういちびょう}という病気を患つているせいで、その満足さは残念に反転している点。

不可解な言動等が変人さに拍車を掛けしており、そのせいで理解者は皆無である。

よく台詞で出てくるルビが振られた謎造語は全てこの男の妄言でしかないのに、騙されてはいけません。ちつとも本編には関係なく、そんなものこれからも一生出てきません。こんなもん使えません。そもそも使いません。

そんな病気に罹った理由、それは妹の理愛を守る為にした虚勢である。強さを嘘偽りで塗り固めているがそのベクトルが間違っているといつ。

好きなモノは書くまでもないので省略。こいつ病気。頭の中が爆発している。そもそもそんな感情一つで死に掛けても前に進もうとするその姿勢

変態です。

異能^{ちがいのう}は持たないが、理愛から貰つた左腕には「アンチ・マグナ」という能力が備わっている。本来の武器は覚悟と信念のみ。これだけが雪哉の唯一の術。

時任 理愛（ときとい りあ）

雪哉の妹。高校一年生。口癖は「死ね」と度々、雪哉は殺されている。

長い銀の髪、銀の瞳をしている為、周囲からは異質な目で見られることが多かつたせいか人間嫌い。友達を作ることもせず、孤立を決め込んでいる。

雪哉と同じ高校に入学してから行つた「種晶保有検査」にて結晶が感知される。

人間ではなく、その正体は結晶。レムリア花晶の一つである。（＝「花晶」に関しては後述にて記載）

異能としては、「リゾン・ラーヴァ」という能力が備わっている筈なのだが、単体での使用は不可能。雪哉を触媒とし、雪哉の右腕を使わなければ発動すら叶わない。（＝「リゾン・ラーヴァ」に関しては後述にて記載）

夜那城 切刃（やなぎ きりは）

雪哉の数少ない一友人（？）である。無能力者。種晶を首元に装備しているが、髪の毛を伸ばし隠している。雪哉の妄言に平然と着いて来るのだけは同じ病気を患っているのか、それとも？

瀧乃 曜嗣（たきの ようじ）

タロットカードを持ち歩く謎の男。雪哉と理愛の保護者。白衣に無精髪、眼鏡といったきな臭いを形にした男。胡乱とも言える。

今はまだこの程度の説明しか出来ない。

月下 雨（つきした あゆみ）

雪哉の最初の敵。高校三年生。有能力者。序列七位。能力は「呼応風塵」ゲイルハイルである。

その能力は風を操る。

月下 虹子（つきした にじこ）

高校一年生。理愛と同じクラス。

栗色の髪に、虹のように何色にも変わる不思議な目を持つ。姓は「雨乃」と同じだが兄妹ではない。花晶の一人。

覚醒した雪哉と理愛の前に敗れ、消失。よつて死亡。雪哉の目には明らか死んだかに思われたが……？

飛行機墜落事故

六年前に起こった大きな事故。雪哉と理愛も同乗していた。突然の爆発。原因は不明。唯一生き残った雪哉と理愛。両親は死亡。

そしてそれが始まり。全てが変わった日だった。

ファンタズマゴリア／いつか来る永遠の日

そ　　は、s／おお終

リゾン・ラーヴァ／その手は頂に触れる

理愛の花晶としての能力。その能力は種晶の力を殺し切る。また銀光の粒子を撒き、翅を象る。そしてその光に触れても能力は焼き消える。当然、翅であるからして飛翔も出来る。

しかし単体で使用が出来ず、別の相手に分与することで初めて使用できる。雪哉に取り憑き、雪哉の右腕にその力を付加させるのである。その際、髪色と瞳の半分が銀色になる。

しかし、雪哉の左腕も理愛のモノ。そして能力の名こそが本当の名前。

さて、どちらが本当の名前か？ それとも……別の？ いや、それはまた後の話。

レイン・ボナルファ／虹壁は全てを遠ざける

虹子の花晶としての能力の名前。そして真名。

本来、花晶は少女を象つてはいるが所詮は結晶。物。道具である。よつて、能力の名こそが本当の名である。

能力としては単純に、触れれば吹き飛び、止まつたところで壊れるという出鱈目。

しかし雪哉の花晶の力を封じる左腕の前に無効化され、敗れてしまった。

花晶（レムリア）

結晶の上位。この世界の裏側にあるもの。

人は種晶を本物と思っているがそれは違う。少し夢を見ているだけに過ぎない。夢のような事を現実でやつてのけることが出来れば、勘違いもする。

だが、種は種。花を咲かせなければ意味はない。花晶こそが本物の結晶であり、至高。

その能力は種晶を遙かに凌ぐものばかりである。そして本当の結晶は石ではなく、幼い少女とされている。結晶の中に少女がいる。その結晶は棺のようなものなのだ。そしてその破片が種晶であり、中身が「本物」である。

そして雪哉の妹である理愛もまた、その結晶そのものである。

無能力者（むのうりょくしゃ）

何の能力も持たない人間。また「ヌーブ」と言われる。なりたがりの出来損ない。種晶を装備しても能力が発現しない者を言う。

これは能力を望んでも使えなかつた者ことを指すので、元々種晶を装備していない者を指す言葉ではない。

しかし差別的な意味を持たせて、能力を使えない使わないに関わらず、「能力を持たない者」をまとめてこのように呼ぶ場合もある。

有能力者（ゆうのうりょくしゃ）

何らかの能力を持つ人間。また「コーダー」と言われる。

異能を使用する際、能力としての基盤を組み込み、読み込むことが必要である。これを脳内で行つことが出来るようだが、これが出来る人間は本当に僅か。まず能力を使用するということが未知そのものであるからして、想像出来ない。能力を使ってもそれを他人に説明することも出来ない。

ブラックボックスのような仕掛け。しかしそんな「箱」を開けることが出来れば能力を使用することが出来る。

今や能力を自由自在に操ることが出来れば、それだけで未来は明るくなる。称えられる。

第一章は一週間後に。

2 1 あの夜を越えて

2 1 あの夜を越えて

六年前、結晶が地上に降り注がれた。

そしてその結晶は人々を進化させ、世界を作り替えた。

超常たる異能。超越なる能力。それは「力」

それでも、時任雪哉はそれを持たない。

無能力者。ちからをもたない

常識から逸脱することはなく、非常識に接触することもなかつた。

そう、妹である時任理愛が人ではなく結晶であつたという事実を知るまでは。

最初は種晶が見つかっただけだと思つていた。けれど、それは違つた。

結晶の最高位 花晶。レムリア

それは少女を模した結晶。それを狙い、襲つてくる者を退けることは出来た。

しかし、それだけだ。それしか出来なかつた。何も解決はしない。

だから、やつと始まったのだ。

ゆつくりと成長し、前へ、前へ進んでいく。

これは何の力も持たない愚兄が、有力を与え、戦わせる愚妹の物語。

だからいつか見るであろう「わたし」を知るまでの物語。

そして、一切の力を持たぬ無能力者が全能たる結晶に立ち向かう物語。

そう、
物語だ

2・2 乖離への反逆

2・2 乖離への反逆

神は死んだ

「兄さん、三田ぼじお別れです」

もう一度、言おひ。

神は死んだ。

雪哉は神という存在を見ていない、信じていない。
けれど今だけは、そんな陳腐な台詞を言わざるを得なかつた。
その一言は、时任雪哉を狂わせるには十分すぎた。
妹の时任理愛の突然の告白は、雪哉を錯乱させる程の威力だつた。

通学路の真ん中で、雪哉は足を止めては動かない。理愛が雪哉の
前を歩くよくな形になつたが、すぐに雪哉の様子に気がついた理愛
は振り向く。

「……と、言ひひとで兄さん、三田ぼじ留守にしてます」

再び呪いの言葉を口にする。雪哉は

「理愛、エイプリルフールは先用だぞ？ 今日は五円一円だぞ？」

「兄さん、わたしは嘘を吐くのが苦手です」

「では、エイプリルフールの日に嘘を吐けなかつたからか？ 確か
に一度だけ許されるというのはとても魅力的だからな」

「そんな一回の為だけに、人を騙したいなんて思いません!」

「理愛、エイプリルフールは先月だぞ。今日は五月一日だぞ」

「疑問符が消えただけで、台詞が変わってないです」

「エイプリルフール、四月一日、今日、五月一日、嘘、駄目」

「鬱陶しいです、死ね」

戸惑っていたせいか、終には単語を並べることしか出来なくなつた。しかしそんな滑稽極まりない雪哉は理愛の言葉で殺害された。二人は学校へ向かつた。

事件と言つべきかどうか、ただ时任兄妹にとつては大きな事件だつた。

理愛の身体に結晶が見つかつたというだけで大事だつたというのに、それはただ力を手にすることの出来る権利 種晶ではなく、結晶そのもの。

それは花晶レムリアであった。少女の形を模した結晶。力そのもの。窮極的な異能そのもの。そう、理愛は「それ」だつたのだ。

时任雪哉と理愛が知つたその事実。それを教えてくれたのが月下つきした兄妹だつた。

この世界のどこか 「Ark」と呼ばれる組織が存在する。結晶を研究しているという、そんなお伽噺の世界の集団。しかしそれは夢想ではなく現存する存在。世界を大きく変革させた原因。世界は「異能ちから」を認知してしまつた。そして、誰もがそんな能力を身につけることを許された世界。強大な力を探し求める「Ark」が作つたのは「査定団イグザミナ」だ。

月下兄妹はそんな戦闘集団の一員であり、理愛を強奪しようとした。雪哉を殺人しようとした。

しかし、その脅威は何とか撃退することができた。

理愛は花晶であることを受け入れ、雪哉は無能である」とを受け入れた。

だからこそ月下虹子を殺し、月下雨弓は斃された。

全てを受け入れて雪哉と理愛は先へ進むことを選んだ。こうして月下兄妹を撃破することが出来たものの、それで何かが変わったわけではない。まるでそれはなかつたかのように、日常そのものは変化せず、二人はまるで最初から「居ない」ものにされていた。まるで脚本が添削されたように、登場人物が削除されてしまった。

誰もが一人が消えたことに疑問を持つていないうだ。勿論、そんなことはあり得ない。人物が一人も消えて無くなるなどと、そんな異常性に疑いを抱かない時点でおかしいのだ。

だけど、人は「納得」してしまった。教師らは「虹子と雨弓人はどこか遠くへ行つたと、引越ししたなどと、そんな理由程度で納得してしまった。所詮は他人。唐突に姿を消したところで、気にならなければどうでもいい。自分の人生に関与しないのならば、問題無い。

だから、終わってしまった。月下兄妹との関係は終焉した。あの夜、あの戦い、そして勝敗が決まってからといふものの顔も見ていない。声も聞いていない。もう邂逅することも無いのだろう。

そんな別離を越えたところで、雪哉や理愛の世界が変わるわけがなかつた。何も、始まつていなかつた。だからあの結晶の力を身に宿した夜を越えるまでは、出発地点にすら到達していなかつたのだ。理愛は、理愛のこの先の深淵へ進む理由を見つけた。そして雪哉はそんな理愛が路頭に迷うことのないように、道を示す。道を創る。道を歩む為に守り続けることだけを成し遂げればいい。二人は見つけたのだ。自分たちの物語の新たなページを。見えない暗闇の中で道を見出すことが出来たのだ。

始まりから、既にやるべき事ははつきりとしているのだけは大きい。何がこの先、待ち受けていても、それを乗り越えるための覚悟と信念は持ち合わせている。

だが肝心の守護対象が突然、三日間の別れを告げた。雪哉が困惑するのも無理がない。守るべき対象が姿形を消すなどと、そんなことをされてしまえば雪哉はどうなる。最初、理愛にそう告げられた時、本当に雪哉の目の前は真っ暗になり、地面が音を立てて崩れたよつだつた。

なら、理愛は三日間もの間、どうして家を留守にするのか？

答えるは簡単。林間学校だ。入学した一年生の最初の行事であろう。高原にある施設に宿泊し、校外学習を受ける行事。雪哉も一年生の頃には当然、参加した行事だったが「あの頃」はまだいい。まだ何も無かつたのだから。

だが、今は違う。

理愛はきつと「A^敵rk」に狙われている。もし何かあつたからでは遅い。だからこそ今、雪哉は三日間という時間も何も出来ず無事を祈るだけなどと、そんなことしたくはなかつた。祈るだけならとつぶに祈つてゐる。それでどうにかなるなら神も信じる。しかしどうにもならない。何も変わりはしない。そんな無駄な行為に及ぶのなら、少しでも長く理愛の傍らにいることを選ぶ。

だが、それは不可能だ。

「七十一時間、四千三百一十分、二十五万九千一百秒、それまでの間、俺は無力に晒されるというのか」

雪哉は小さく絶望を吐き散らかす。

それほどの膨大な時間を何も出来ずただ浪費しろなどと憤懣の極みである。

何かいい手はないかと考察するものの、何一つ手は浮かばず学校に到着した。

何か。

そんなことを考えながら自分の席に座る。しかし雪哉自身も一生

徒な為、サボタージュなどという手を使うことも出来なかつた。雪哉は優秀ではないが、だからとて常識まで失つてゐるわけではない。いつだつて自分が正しいことを行つ。その覚悟は曲げぬが、それで全て自分の行動が正しいなどと湾曲した正当を周囲に押し付けるつもりはない。確かに月下兄妹の一件では長い間、学校を休んでしまつたがそれは仕方が無かつたことだ。

学校を無断で休み、それで理愛を追いかけるという手はどうしても選べない。それでも、もし他の手が無いのなら最後は悪しき行為とわかつていても、選んでしまいそうだが。

「どうしたんだい雪哉、いつもより深く思考を張り巡らせているようだけれども？」

仏頂面のまま自分の顔に手を置いて席に就く雪哉に声をかけたのは夜那城切刃やなぎきりはだった。雪哉が前髪を伸ばしているのなら、切刃は後髪を伸ばしている。雪哉と違うのは人当たりが良く、愛想のある笑みを浮かべ見る者に好印象を与える所だろうか。雪哉は常に眉間に皺を寄せて目元を吊り上げているせいかどうか見ても近づき難い印象しか植え付けない。これが雪哉と切刃と違い。しかしこの二人は朝、いつも一緒だつた。だつてそれは、

「何か強い意志を感じるよ、雪哉。また戦いが始まつたのかい？」

「戦い……そうだな、始まつたな。今度の戦いは今までのものとは規模が違ひすぎる。『図書館』の連中の相手をしている暇も無い。今は泳がせておこうと思う」

こんな風に「いつもの」不可解な会話が開始される。この二人はいつもこうやって他人が聞けば首を傾げるか訝しげに見つめるか決まったような会話になる。しかしそんな会話に唯一着いて来る切刃こそは雪哉の友人に値する人物なのかもしれない。雪哉自身は切刃を「友達」に分類してはいないが、いつの間にか無意識の内に自分の領域への侵入を許していた。どんな人間であつても、自分と「同じ」ならば嬉しいものだ。孤独だつた雪哉にとつては切刃の登場は

大きかつたことだらう。

そして今回もまた雪哉は切刃に愚痴を零すのである。

「理愛が林間学校でな」

「ああ、そういうやそんな時期だね」

切刃は握り拳をもう片方の手の上に乗せて、そう言つた。

雪哉が切刃という「友達」を手に入れたのはこの林間学校という行事のお陰であつた。孤立する雪哉に接近する他の生徒らは何人かはいた。その中には女子もいた。元々は背丈も高く、顔立ちも良いのか気になる女子もいたそうだ。しかし発言するは理解に苦しむものであつて、前髪で顔半分を隠し、左腕には包帯。そして拳句は顔に手を当てる、嘲笑すればただの不審者である。そんな奇怪な人間に好意を抱くのは余程のモノ好きでしかない。そんな珍妙に手を出す女性は逆に見てみたいものではあるが、今のところ雪哉に対する感情を見せる女性は皆無に等しい。

そんな面妖に満面の笑みで手を上げては近づいたのが切刃だつた。雪哉のように背丈は高く、長い後ろ髪に美形などと、それはまるで拮抗だつた。当然、雪哉は切刃に対しても不可解極まりない造語を、妄言を並べたのだったが、そんな言葉を全て受け止めて、雪哉のような創造された新しい言語を言い放つたことは雪哉にとつても驚愕だつたろう。それ以来、雪哉は切刃の接近を許している。

「どうにかして、理愛と一緒に行けないだらうか」

さすがに今の発言は切刃も虚をつかれたのか、言葉を失つてゐる。多少の間が生まれたものの切刃はそんな雪哉の発言に冷笑することなく反応する。

「一学年の差は大きいね、『フリ』をして　なんて、すぐにバレるだらうし」

「それもそうだ。だがそれも選択の一つだつた」

寧ろ雪哉が最初に出した選択の一つだつた。

だが些か常識といふものを破綻させている。一年生のフリをして理愛のクラスの一員に溶け込む。教師や生徒らに強力な催眠術でも

かかけるのなら可能かもしないが、そんなもの空想の世界だ。

いや「使える」人間もいるのかもしれない。だが生憎と雪哉は無能力者だ。そんな都合のいい幻想で常識そのものを書き換えることなど不可能である。だからこの案は即効で却下された。

「雪哉、妹さんが大事？」

「ああ」

言つまでもない。

「それなら頼んでみればどうなんかい？」

「……は？」

雪哉は気の抜けた声を上げてしまった。

「いや、ほら、確かに雪哉の今の保護者の人つて……確かに、こここの先生じゃなかつたっけ？ 臨時だけど先生なんでしょう？ なんとかしてもらつたらどうだい？」

「なるほど」

全くその選択肢は考へていなかつた。自分以外のものを「利用」することは考へていなかつただけに切れの提案はあまりにも名案すぎた。見えない闇に光が射した気がした。雪哉は立つ。

「先生に聞いて来る」

「いや、雪哉」

こうしてはいられないと雪哉はすぐにでも躍嗣の元へ向かおうとしたが、妙案を提示してくれた切れがそんな雪哉を制止する。

「何をする切刃、俺は往かねばならない」

「授業、始まるよ」

雪哉が立ち上がると同時に教室には一時限目の授業の教師が入室していた。授業が始まつてしまつたのだ。このまま教室を飛び出すことは出来なかつた。悔しげに下唇を噛み締め、雪哉は自分の席に座るのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2140w/>

それが全能結晶の無能力者

2011年10月10日12時09分発行